

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第124集

祈年遺跡Ⅱ

国道195号道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第2分冊 IX区・X区

2012.3

(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター

祈^き年^{ねん}遺跡Ⅱ

国道195号道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第2分冊 IX区・X区

2012.3

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

例 言

1. 本書は平成19年(2007)から平成21年(2009)まで実施した国道195号道路改築(通称あけぼの道路)に伴う埋蔵文化財調査祈年遺跡きねんの発掘調査報告書である。祈年遺跡は高知県南国市小籠こごめ、東崎ひがしざき、下末松しもすえまつに所在する。

本報告書はI区からX区の調査区の内、IX区及びX区の成果報告である。

2. 遺跡名は当初「土島田遺跡」ししまだとしていたものの、「祈年遺跡」に変更した。

3. 高知県から委託を受け、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが発掘調査及び報告書作成を行った。

4. 本書の作成は(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが行った。

編集実務は近藤孝文((財)高知県文化財団埋蔵文化財センター専門調査員)が行った。本文執筆は遺物説明、第Ⅲ章を前田光雄(同)、他は近藤が行った。

5. IX区及びX区の発掘調査は平成20年度に実施した。発掘調査担当者はIX区が近藤、前田、X区は山本哲也(同第1班長)、安岡猛(同)、平成22、23年度整理作業担当者は近藤である。

6. 発掘調査から整理作業で多くの方々、高知県中央東土木事務所等の諸機関に協力を頂いた。

出土遺物等については(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター職員出原恵三、吉成承三、池澤俊幸、筒井三菜、久家隆芳の諸氏から教授頂いた。感謝したい。

7. 本遺跡の資料等は一括して高知県立埋蔵文化財センターで保管している。遺跡名は「祈年遺跡」とし、略記号は「NS」でそれに西暦年度略を冠し、「07-NS」と言う具合に遺物注記等は記録した。

本文目次

例言／本文目次／挿図目次／表目次／写真図版目次

第Ⅰ章 Ⅸ区の調査成果

第1節 Ⅸ区の概要	1
第2節 竪穴建物跡	4
第3節 掘立柱建物跡	19
第4節 土坑	27
第5節 溝状遺構	35
第6節 柱穴跡	45
第7節 包含層出土遺物	49

第Ⅱ章 X区の調査成果

第1節 X区の概要	58
第2節 竪穴建物跡	60
第3節 掘立柱建物跡	68
第4節 壺棺墓	73
第5節 土坑	76
第6節 性格不明遺構	82
第7節 溝状遺構	85
第8節 畝状遺構	88
第9節 柱穴跡	92
第10節 包含層出土遺物	93

第Ⅲ章 まとめ

第1節 弥生時代について	99
第2節 古代について	101

参考文献

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1図	祈年遺跡位置図	1	第29図	IX区包含層出土遺物実測図	49
第2図	祈年遺跡グリッド配置・調査区配置図	2	第30図	X区遺構全体図	59
第3図	IX区遺構全体図	3	第31図	X ST1遺構図	62
第4図	IX ST1遺構図	5	第32図	X ST1遺物実測図(1)	63
第5図	IX ST1遺物実測図	7	第33図	X ST1遺物実測図(2)	64
第6図	IX ST2遺構図	8	第34図	X ST2遺構図	65
第7図	IX ST2遺物実測図	9	第35図	X ST2遺物実測図	66
第8図	IX ST3遺構図	11	第36図	X SB1遺構図	69
第9図	IX ST3遺物実測図	13	第37図	X SB2遺構図	69
第10図	IX ST4遺構図	14	第38図	X SB3遺構図	71
第11図	IX ST4遺物実測図(1)	16	第39図	X SB4遺構図	71
第12図	IX ST4遺物実測図(2)	17	第40図	X SB5遺構図	71
第13図	IX ST4遺物実測図(3)	18	第41図	X SG1遺構図	74
第14図	IX区SB全体配置図	19	第42図	X SG2遺構図	74
第15図	IX SB1遺構図	20	第43図	X区SG遺物実測図	75
第16図	IX SB2遺構図	21	第44図	X区土坑遺構図	78
第17図	IX SB3遺構図	23	第45図	X区土坑出土遺物実測図	81
第18図	IX SB4遺構図	24	第46図	X区SX遺構図	83
第19図	IX SB5遺構図	25	第47図	X区SX出土遺物実測図	84
第20図	IX SB6遺構図	26	第48図	X区SD・SU全体図	85
第21図	IX区SB出土遺物実測図	26	第49図	X区SD出土遺物実測図	87
第22図	IX区土坑遺構図	33	第50図	X区SU出土遺物実測図	91
第23図	IX区土坑出土遺物実測図	34	第51図	X区柱穴跡出土遺物実測図	92
第24図	IX区SD・SU全体配置図	35	第52図	X区包含層出土遺物実測図	93
第25図	IX区溝状遺構図	37	第53図	IX・X区弥生時代後期の集落	99
第26図	IX区溝状遺構出土遺物実測図	38	第54図	IX・X区古代掘立柱建物跡	101
第27図	IX区柱穴跡遺構図	46	第55図	IX・X区古代溝状遺構・畝状遺構	103
第28図	IX区柱穴跡出土遺物実測図	46			

表目次

第1表	IX区竪穴建物跡一覧表	4	第9表	X区壺棺墓一覧表	73
第2表	IX区掘立柱建物跡一覧表	19	第10表	X区土坑一覧表	76
第3表	IX区土坑一覧表	27	第11表	X区性格不明遺構一覧表	82
第4表	IX区溝状遺構一覧表	35	第12表	X区溝状遺構一覧表	85
第5表	IX区柱穴跡一覧表	45	第13表	X区畝状遺構一覧表	88
第6表	IX区遺物観察表	50	第14表	X区柱穴跡一覧表	92
第7表	X区竪穴建物跡一覧表	60	第15表	X区遺物観察表	94
第8表	X区掘立柱建物跡一覧表	68			

写真図版目次

写真 1	Ⅸ・X区空撮1	写真21	X区SG1
写真 2	Ⅸ・X区空撮2、Ⅸ区空撮	写真22	X区SG2、SK3、SK4、SK8、SK16、SK27、SX1
写真 3	Ⅸ区完掘1、Ⅸ区完掘2	写真23	X区SX6
写真 4	Ⅸ区ST1	写真24	X区SD・SU空撮、X区SD・SU全景1
写真 5	Ⅸ区ST2	写真25	X区SD・SU全景2、X区SD・SU全景3
写真 6	Ⅸ区ST3	写真26	遺物写真Ⅸ区ST1
写真 7	Ⅸ区ST4	写真27	遺物写真Ⅸ区ST2、ST3
写真 8	Ⅸ区SB全景	写真28	遺物写真Ⅸ区ST3
写真 9	Ⅸ区SB1	写真29	遺物写真Ⅸ区ST3、ST4
写真10	Ⅸ区SB2	写真30	遺物写真Ⅸ区ST4
写真11	Ⅸ区SB3	写真31	遺物写真Ⅸ区ST4、SB2、SK1、SK5
写真12	Ⅸ区SB4	写真32	遺物写真Ⅸ区SK7、SD22、C10-9-1P2、包含層、X区ST1
写真13	Ⅸ区SB5、Ⅸ区SB6	写真33	遺物写真X区ST1、ST2
写真14	Ⅸ区SK1、SK2、SK5、SK7	写真34	遺物写真X区ST2、SG1
写真15	Ⅸ区SK8、SK11、SK15、SD1、SD17、SD22	写真35	遺物写真X区ST2、SG2、SK4、SK6、SK8、SK16、SK19、SK22、SK27、SX1
写真16	X区空撮、X区全景	写真36	遺物写真X区SX4、SX6、SD1、SD3、包含層
写真17	X区ST1		
写真18	X区ST2		
写真19	X区SB全景、X区SB1		
写真20	X区SB2・3・4、SB5		

第 I 章 IX区の調査成果

第 1 節 IX区の概要

本調査区の西側Ⅶ・Ⅷ区が本遺跡の中心地と考えられ、Ⅸ区は縁辺部に位置するものの、遺構の密集度は比較的高い。

弥生時代後期の集落跡については、ほぼ東限に近いと考えられ、弥生時代竪穴建物跡は4軒検出している。竪穴建物跡の平面形は方形、隅丸方形、多角形と種々のものが見られる。6～7mの中型の竪穴建物跡3軒、約3.6mを測る小型の竪穴建物跡1軒である。いずれもベッド状遺構を有している。時期的には弥生時代後期後半が3軒で出土遺物からして近接する時期のものと考えられる。後期終末の竪穴建物跡1軒で方形のもので比較的多くの遺物が出土している。



第 1 図 折年遺跡位置図

竪穴建物跡以外に土坑、溝状土坑を検出しているものの、数は少ない。SK5の小土坑から土器が纏まって出土している。

古墳時代については、Ⅷ区では古墳時代後期の竈付きの竪穴建物跡を数多く検出しているものの、本調査区では未検出であった。古墳時代前期初頭の土坑を僅かに検出したに留まる。

古代は掘立柱建物跡6棟と溝跡を検出している。掘立柱建物跡の柱の形状は方形、円形のものがあり、時期差が考えられる。また畝状の小溝跡を幾条か検出している。Ⅸ区でも畝状の溝は多く、律令体制下での土地利用を考える上で重要なものである。長岡台地は近世まで水田には適しておらず、畑作を主としていたものと考えられ、これらの畝状の小溝は畑作に伴う畝の可能性が高い。

近世は現道路に沿うように東西に溝を検出している。おそらく土地区画の名残りの可能性がある。

執筆担当者:近藤孝文 前田光雄

調査担当者:近藤孝文 前田光雄

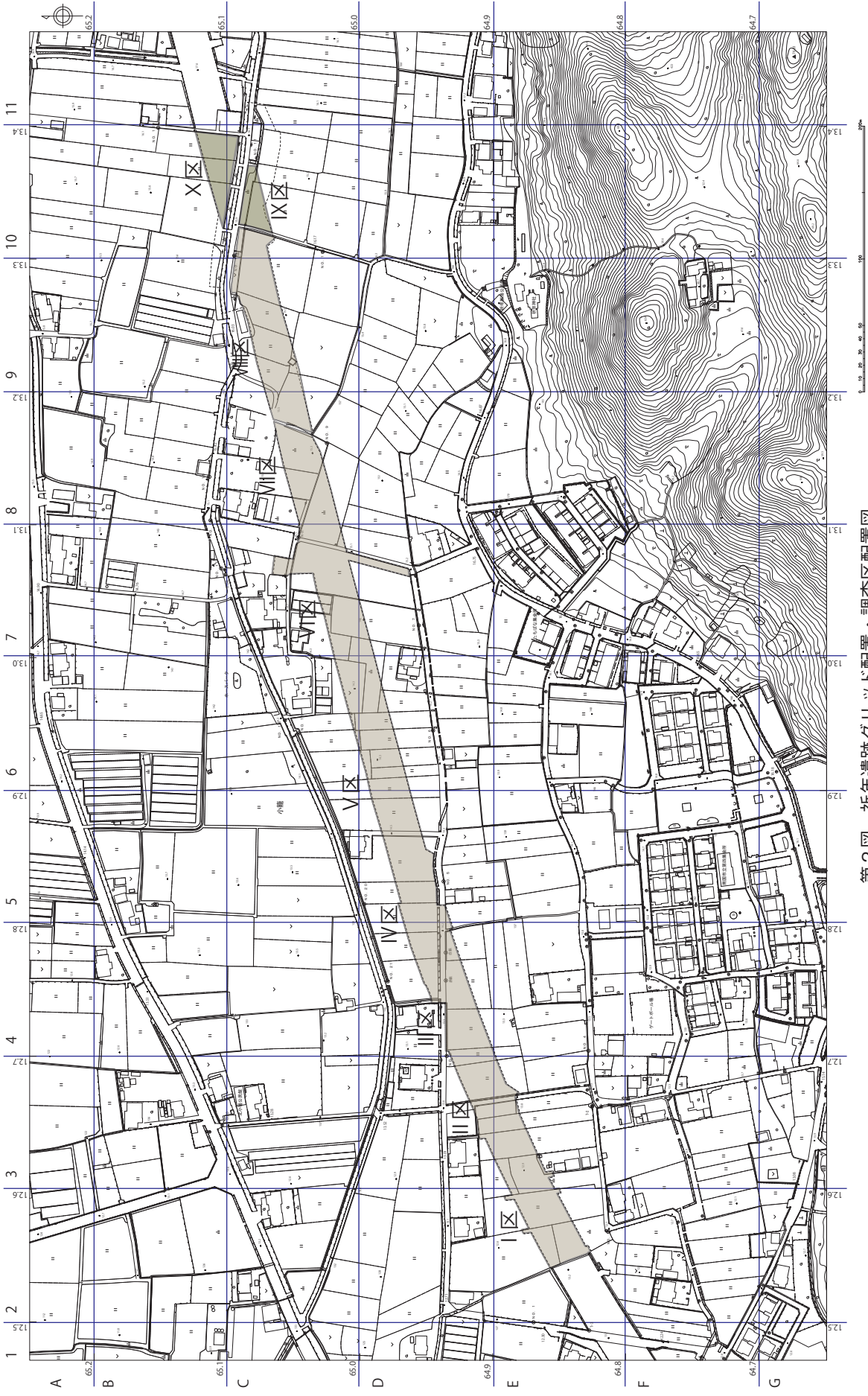
調査期間:平成20年5月21日～平成20年8月6日

調査面積:960㎡

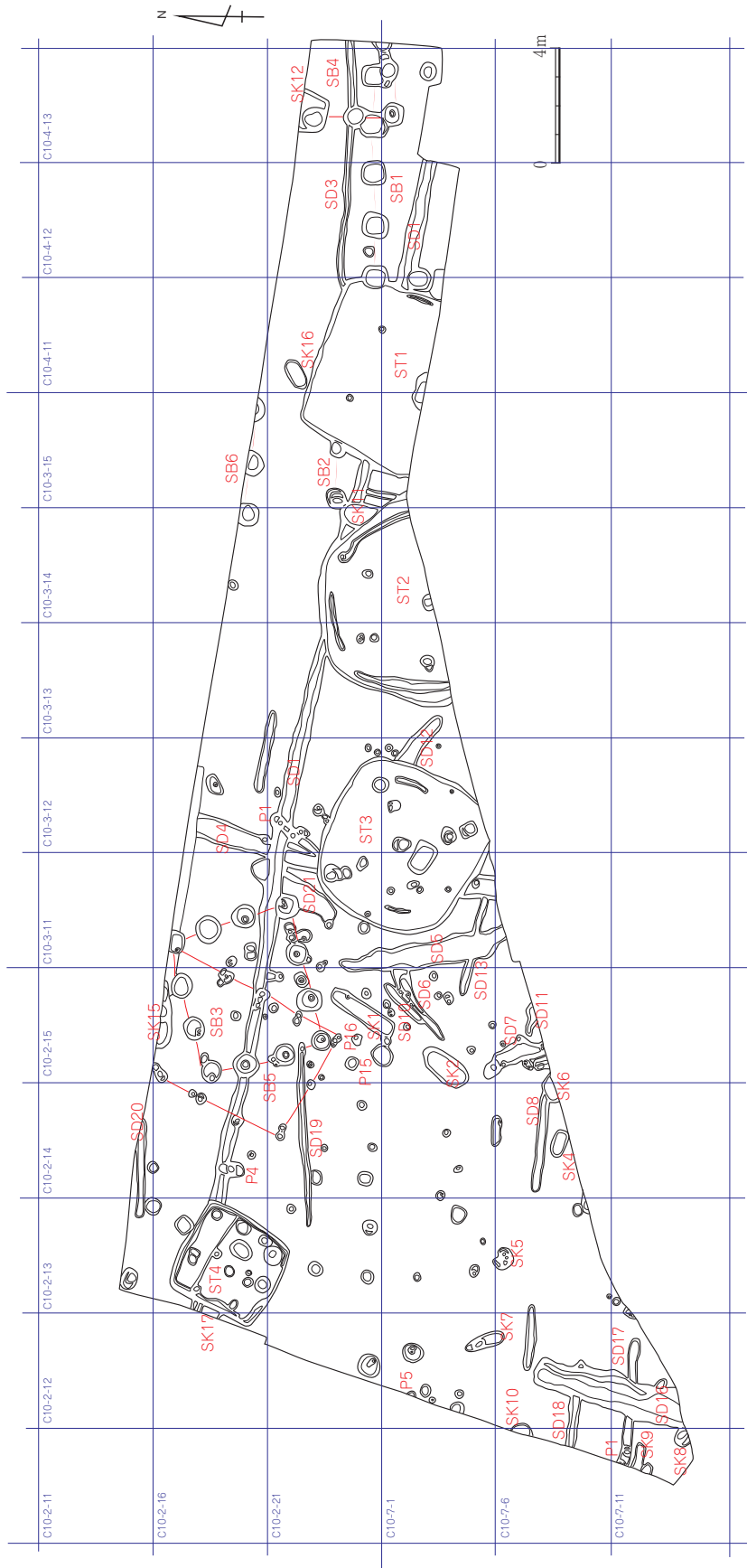
時代:弥生時代後期～近世

検出遺構:弥生時代竪穴建物跡4軒・土坑14基・溝跡3条、古墳時代土坑2基、古代掘立柱建物跡6棟・土坑1基・溝跡11条、近世溝跡1条、柱穴跡約120基

遺物総点数:約9,500点



第2図 祈年遺跡グリッド配置・調査区配置図



第3図 X区遺構全体図

第2節 竪穴建物跡

本調査区では4軒の竪穴建物跡を検出した。時期は弥生時代後期後半が3軒及び後期終末1軒である。調査区中央より東側部に後期後半の竪穴建物跡は展開している。それぞれの平面形は違っており、ST1は方形、ST2は多角形でおそらく六角形になるものと考えられ、ST3は隅丸方形である。ST1とST2は隣接しており、同時併存は困難である。壁際にはベッド状遺構と周溝を有し、中央部には炉跡を設ける。ST1の炉跡は地床炉に若干石組みが認められる。ST3は楕円形の炉跡とすぐ近くに円形の小さな炉跡が付随する。こうした大小の炉跡を有する竪穴建物跡は他の調査区でも何軒か検出している。またST3は焼失竪穴建物跡である。

ST4については小型の方形のもので、他の竪穴建物跡より時期が新しく、弥生時代後期終末のものである。北側部分のみにベッド状遺構を有し、中央部には炉跡を有する。遺物も比較的多く出土しており、礫の投棄も認められた。

第1表 IX区竪穴建物跡一覧表

ST番号	グリッド	時期	形状	主軸方向	規模(m)	規模(m)	深さ(m)	付帯施設	切り合い
ST1	C10-4-21他	弥生後期後半	方形	N-23° -E	6.16	(3.9)	0.41	炉跡	SB1・2、SD1・3・22切られる
ST2	C10-3-24他	弥生後期後半	多角形	N-4° -W	(7.28)	(3.94)	0.39	炉跡	SK11、SD1切られる
ST3	C10-3-21他	弥生後期後半	隅丸方形	N-64° -E	5.64	5.45	0.55	炉跡	SK3-13、SD4・9・12・14切られる
ST4	C10-2-18他	弥生後期終末	方形	N-30° -E	3.6	3.38	0.41	炉跡	SD1、C10-2-18P1切られる

ST1 (第4、5図)

グリッド:C10-4-21他 切り合い関係:SB1・2、SD1・3・22に切られる

時期:弥生時代後期後半 形状:方形 主軸方向:N-23° -E

規模:6.16×(3.9) m 深さ0.41m

覆土:黒褐色土主体

柱穴:数(2) 主柱穴数(2) 主柱穴P1、2

炉跡:石囲い炉、形状 不明 規模130×(38) cm 深さ10cm 覆土 黒褐色粘質土、炭化物少量

ベッド:幅96～106cm 高さ8～22cm

周溝:1条 幅14～18cm 深さ2～6cm

その他付帯施設:貯蔵穴2基

出土遺物:弥生土器甕、壺、鉢、支脚、石包丁、叩石、磨石

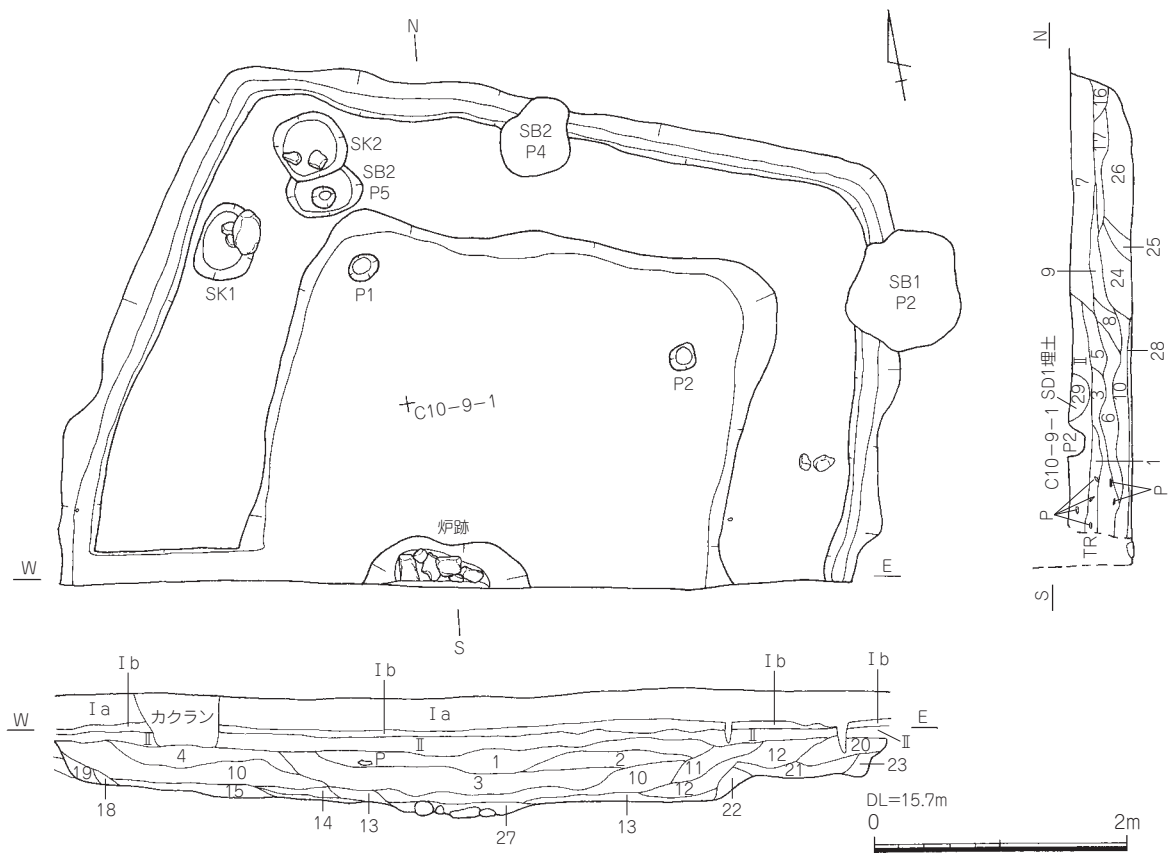
所見:調査区東部に位置する。南側は調査区外へと続き、半分程を検出している。弥生時代後期後半の竪穴建物跡ST2が西側に隣接している。弥生時代後期終末のSD22に切られている。また古代のSB1P2とSB2P2～P5の柱穴、およびSD1・3にも切られている。

確認面は基本土層Ⅲ層暗褐色土上面で床面は基本土層Ⅴ層黄褐色ローム混礫層に掘り込まれていた。平面形は方形を呈すると考えられる。北辺の長さ6.16mを測る中型の竪穴建物跡である。深さは41cmを測る。

覆土は上層に黒褐色土、次いで暗褐色土、黒褐色粘質土で黄褐色土小ブロックが混入する。壁際には暗褐色粘質土でベッド状遺構を構築する。床面土層断面等の観察で貼床に相当する層、暗褐色粘質土が認められた。床面はほぼ平坦面をなし、標高は15.09mである。

炉跡は石囲い炉を1基検出している。中央からやや南西に位置する。南半部は調査区外に広がり全容は不明であるが、楕円形に近いものと考えられる。調査区内での規模は長さ1.3m、深さ10cmである。石囲いの礫は10～25cmの自然の亜円礫である。炉の床面には炭化物が少量出土している。

柱穴はベッド際の隅、北西、北東で2基検出しており、いずれも支柱穴で直径20～24cmと径が小さいものの、深さは26～32cmを測る。



土層説明

- | | | |
|-----------------|--------------|---------------------|
| I a 現水田 | 9 暗褐色土 | 20 暗褐色土 |
| I b 水田攪はん層 | 10 褐色土 | 21 褐色土 |
| II 暗褐色土 遺物包含層 | 11 暗褐色土 | 22 黄褐色土 ベッド |
| 1 暗褐色土 炭化物少量 | 12 暗褐色土 | 23 暗褐色土 |
| 2 褐色土 黄色土、炭化物少量 | 13 暗褐色土 | 24 黒褐色土 |
| 3 黒褐色土 | 14 褐色土 | 25 黒色土 |
| 4 暗褐色土 | 15 暗黄褐色土 ベッド | 26 黄褐色土 ベッド |
| 5 黒褐色土 | 16 黒褐色土 | 27 黒色土 炉跡、石囲い、炭化物少量 |
| 6 黒色土 | 17 黒色土 | 28 黄褐色土 |
| 7 暗褐色土 | 18 暗褐色土 | 29 黒色土 SD1埋土 |
| 8 黒褐色土 | 19 暗褐色土 | |

第4図 IX ST1 遺構図

ベッド状遺構は暗褐色粘質土による造り付けで、調査区外の南部を除き三辺で確認した。幅0.9～1.0mで高さは床面から8～20cm程度である。

竪穴建物跡内土坑2基を北西隅のベッド上で確認した。SK1は62×44cmで楕円形を呈し、深さは0.17cmでやや浅い。底面より僅かに浮いた状態で小礫が2点出土しており、土坑の上には径35cm程の大礫が乗っていた。SK2は径55cmで深さ13cmの浅い土坑である。やはり小礫2点がやや浮いた状態で出土している。またSK2からはNo.9の鉢が出土している。

壁際で周溝を検出している。ベッド状遺構を掘り込み構築されている。SB1・2に切られているが全周している。幅は広いところで18cm、深さは深いところでも6cm足らずである。

所属時期は出土遺物から弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物(第5図No.1～20)

No.1は甕で口縁部が外傾し、口唇はやや平坦である。整形は外面胴部がタタキ、ハケ、口縁はナデ、内面はハケ整形である。2は壺で口縁部を上下に拡張し、外面に櫛描波状文を施す。3、4は広口壺である。共に大きく開き、口径は約26、25cmをそれぞれ測る。口唇は平坦である。整形は内外面共にハケ整形である。5から9は鉢である。外面はタタキ整形、内面はハケ調整の鉢が多く、9を除いて約13cmから16cm未満のものが多い。器形は緩やかに開き、口唇が平坦なもの8、やや尖るものが6、7である。底部の形状は不明であるが、丸底気味になるものと考えられる。9は大型のもので口径約34cmを測る。外傾し、外面の整形はタタキ後ナデ、内面はハケとナデである。大型の鉢は点数は少ないものの、若干存在するようである。10から13は底部破片で13以外は甕と考えられる。10は丸底で外面はタタキ整形である。11は底径3cmの小さな平底である。外面はハケ、内面は指ナデである。12は丸底気味で底はタタキ、胴部はハケ整形である。内面は粗いハケ調整である。13は鉢の底部と考えられる。平底で深い鉢と考えられる。

14から16は支脚である。14は裾部、15、16は脚部である。14は高坏の裾と同様に開き、器肉が厚く、外面はタタキ調整である。15、16は筒状の脚部である。外面はタタキ整形である。共に粗い作りである。

17は打製石包丁である。礫皮を残し、主要剥離面に僅かに調整痕を施すのみで、主要剥離面を大きく残す。両端に浅い抉入部を施す。石質は砂岩である。18は大型の砥石である。4面共に使用しているものの、特に1面は使用頻度が高く大きく凹む。石質はきめの細かい砂岩製で仕上げ砥石である。

19は叩石である。側縁部に線状の敲打痕が認められる。石質は砂岩である。被熱する。20は磨石である。杵状のもので先端部に朱が付着する。砂岩製である。

ST2 (第6、7図)

グリッド:C10-3-24他 切り合い関係;SK11、SD1に切られる

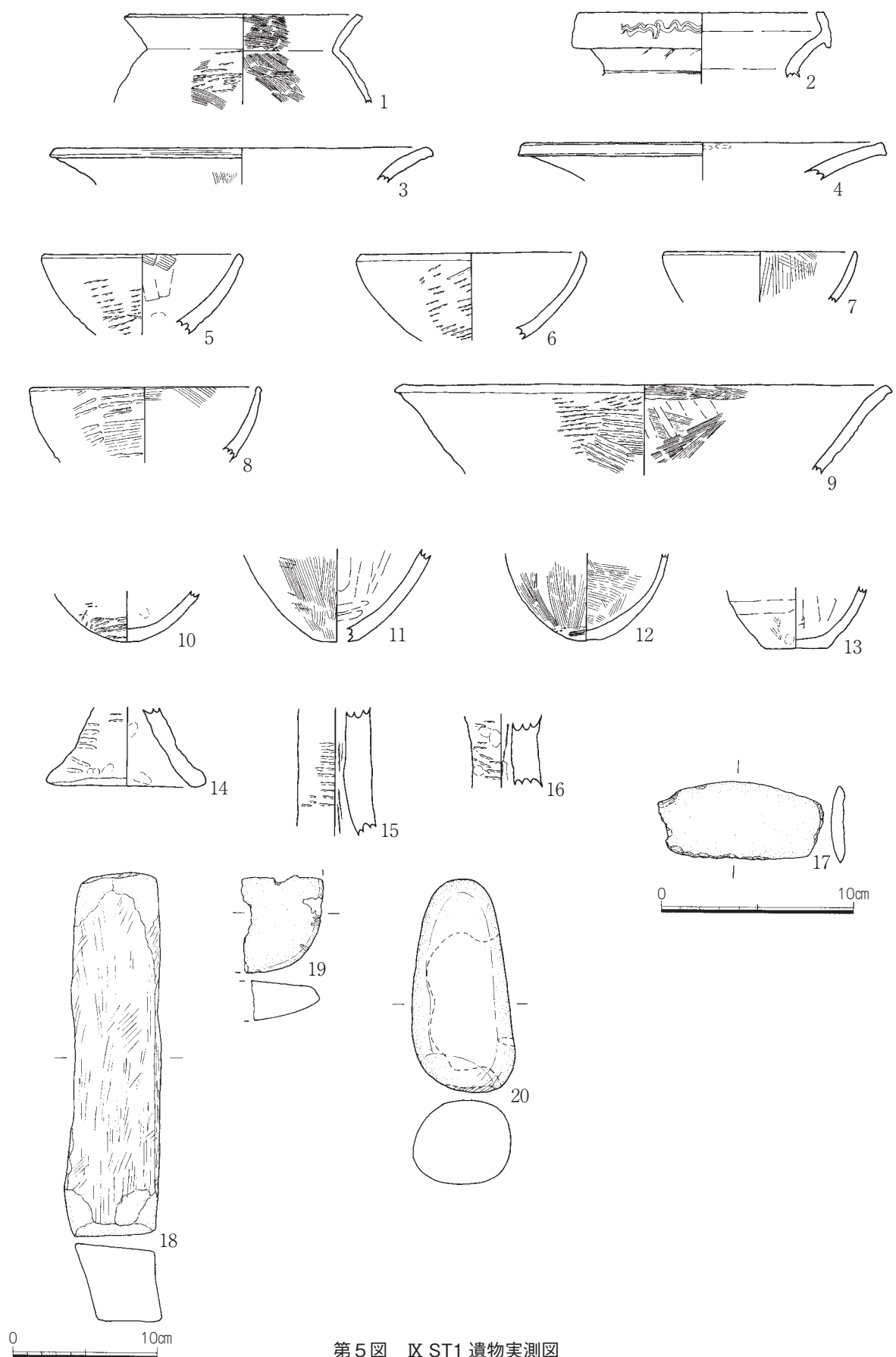
時期;弥生時代後期後半 形状;多角形 主軸方向;N-4°-W

規模;(7.28)×(3.94) m 深さ0.39m

覆土;黒褐色土主体

柱穴;数(5) 主柱穴数(3) 主柱穴P1～3

炉跡;形状不明 規模54×(32) cm 深さ4cm 覆土 黄褐色粘質土、焼土ブロック混入



第5図 IX ST1 遺物実測図

ベッド:幅78cm 高さ14~17cm

周溝:1条 幅16~20cm 深さ8~9cm

その他付帯施設:-

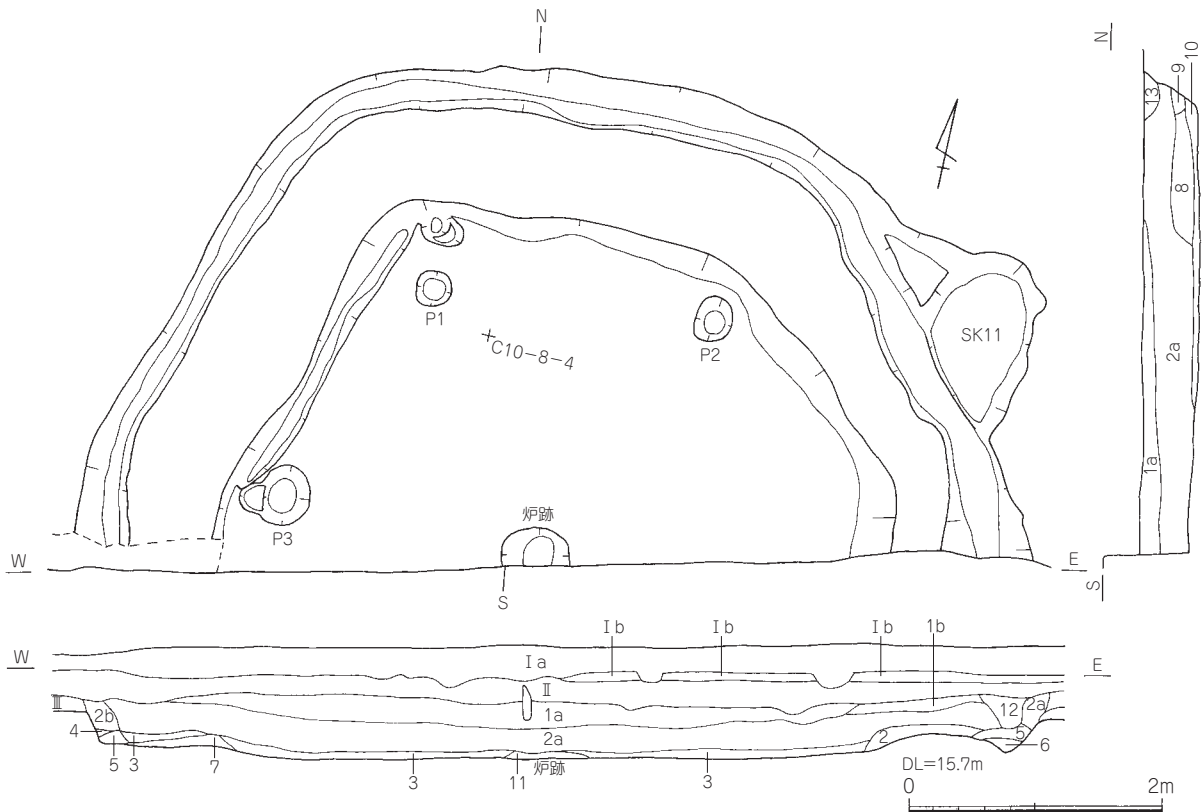
出土遺物:弥生土器甕、壺、鉢、高坏

所見:調査区中央部西寄りに位置する。南側は調査区外へと続き、半分程を検出している。弥生時代後期後半の竪穴建物跡ST1が東側に、ST2が西側に隣接している。古墳時代後期のSK11と古代のSD1に切られている。

確認面は基本土層Ⅲ層暗褐色土上面で、床面は基本土層Ⅴ層黄褐色ローム混礫層に掘り込まれていた。平面形は六角形を呈すると考えられる。一辺の長さ約3.5mを測る中型の竪穴建物跡である。深さは39cmを測る。

覆土は上層に黒色土、次いで暗褐色粘質土で微細な黄褐色粒・炭化物を含み、さらに黄褐色土で黒色土を含む層がある。壁際には暗褐色粘質土でベッド状遺構を構成する。床面土層断面等の観察で貼床に相当する層は暗褐色粘質土が認められた。床面はほぼ平坦面をなし、標高は15.01mである。

炉跡は中央に位置するところで1基検出している。南半部は調査区外に広がり全容は不明である。



- | | |
|------|---------------------|
| 土層説明 | |
| I a | 表土 現水田耕作土 |
| I b | 表土 現水田耕作土、2層上面の攪はん層 |
| II | 暗褐色土 古代、弥生の遺物包含層 |
| III | 褐色土 |
| 1a | 黒色土 アカホヤカ |
| 1b | 黒褐色土 1aと2層の漸移層 |
| 2a | 暗褐色土 |
| 2b | 暗褐色土 |
| 3 | 暗褐色土 黄褐色ブロック、炭化物少量 |
| 4 | 暗褐色土 周溝 |
| 5 | 褐色土 |
| 6 | 黒褐色土 周溝 |
| 7 | 黄褐色土 ベッド、褐色土混入 |
| 8 | 暗褐色土 ベッド、黄褐色土混入 |
| 9 | 暗褐色土 周溝、黄褐色粒含む |
| 10 | 黄褐色土 黒色土含む |
| 11 | 黄褐色土 炉跡、焼土ブロック混入 |
| 12 | 黒褐色土 SD埋土 |
| 13 | 黒色土 SD1埋土 |

第6図 IX ST2 遺構図

る。調査区内での規模は長さ54cm、深さ4cmを測る。覆土は黄褐色粘質土で焼土ブロックが混入している。

柱穴は5基検出し、このうち主柱穴はベッド際の内側の隅で3基検出しており、直径25～45cm、深さ24～30cmを測る。

ベッド状遺構は暗褐色粘質土による造り付けで調査区外の南部を除き三辺で確認した。幅は約78cmで高さは床面から14～17cm程度である。

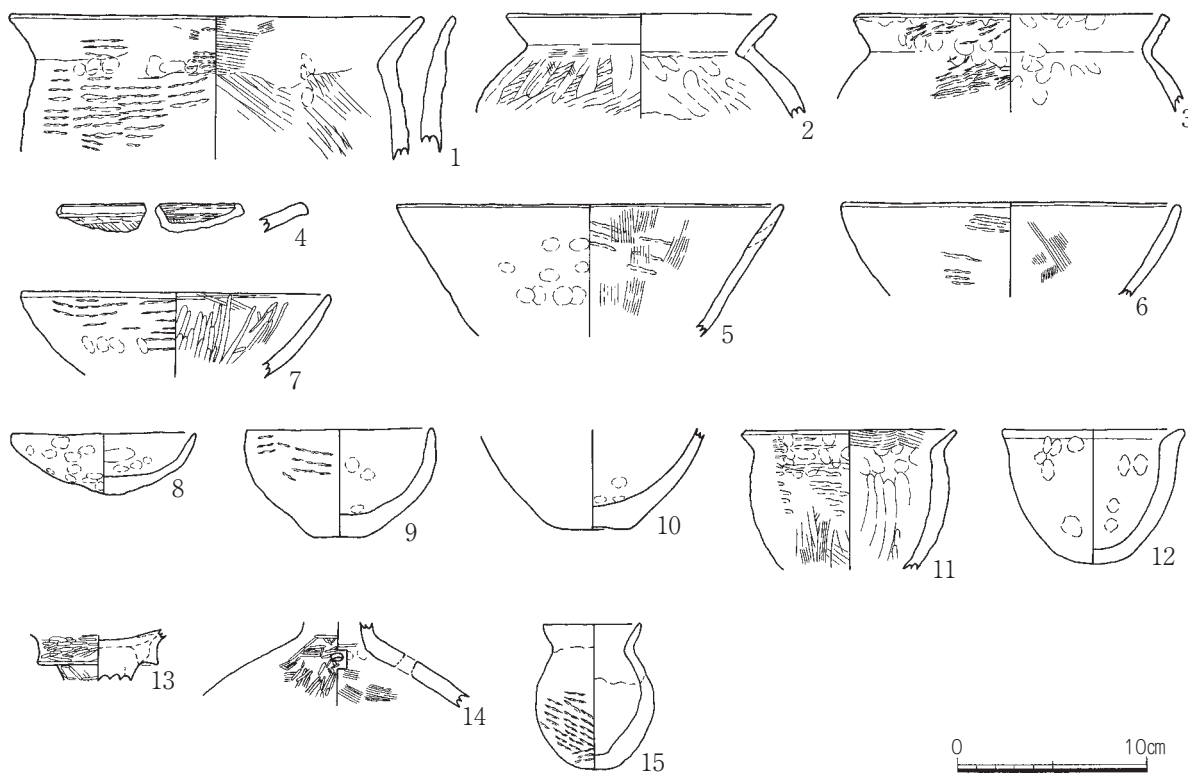
壁際で周溝を検出している。ベッド状遺構を掘り込み構築されている。SK11に切られているが調査区内は全周している。幅は広いところで20cm、深さは深いところで9cmを測る。

所属時期は出土遺物からして弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物(第7図No1～15)

No2、3は甕である。2は口縁が「く」字状に外傾し、肩部がやや張る。整形は外面胴部はタタキ、口縁はナデ、内面体部は指ナデである。3も口縁が外傾し、口唇は平坦である。肩部はやや張る。整形は外面がタタキ、ナデ、内面はナデのみである。4は広口壺である。口縁は大きく開く。口唇は平坦で整形は内外面共にハケである。

1、5から12の9点は鉢である。1は口縁がやや外傾し、胴部は余り張らない。口径は約22cmである。口縁の一部が片口状になっているところから鉢と考えられる。整形は外面タタキ、内面は粗いハケである。5から7の3点は口径16cm強のやや大型のもので体部が開く。整形は6、7の外面はタタキである。内面はハケが多く、7はミガキを施す。8は皿状で浅く、口径は9.6cmを測る。底部はやや尖り気味の丸底で体部は丸味を持ち、口縁は僅かに外傾する。整形は内外面共に指頭圧痕である。



第7図 IX ST2 遺物実測図

る。9、10は小型でやや深く平底のものである。9の体部はやや丸味を持ち、口縁は直立する。口径9.8 cm、器高5.7 cm、底径3.5 cmを測る。整形は外面にタタキを残し、内面はナデである。10は体部にやや丸味を持ち開くものである。整形は内外面共にナデである。11、12は甕状の小型のものである。11は口縁が外傾し、口径11.1 cmを測る。整形は外面体部上半にはタタキを残し下半はハケである。内面口縁はハケ、体部は指ナデである。12の口縁は短く外傾し、口径9.5 cmを測る。底部は丸底である。整形は内外面共に指頭圧痕、ナデである。

13、14は高坏である。13は坏部と脚部の接合部分の破片である。14は大きく開く裾部で円形透かし孔を穿つ。外面はミガキ整形である。

15は甕形のミニチュア土器である。口径5.2 cm、器高7.7 cmを測る。底部は丸底で体部中央部に丸味を持ち、口縁は緩やかに外傾する。整形は外面体部タタキ、口縁ナデ、内面指ナデである。

ST3 (第8、9図)

グリッド:C10-3-21他 切り合い関係:SK3・13、SD4・9・12・14に切られる

時期:弥生時代後期後半 形状:隅丸方形 主軸方向:N-64° -E

規模:5.64×5.45m 深さ0.55m

覆土:黒褐色土主体

柱穴:数15 主柱穴数4 主柱穴P1～7

炉跡:形状 楕円形1基、円形1基 規模115×74cm 深さ16cm 覆土 下層に炭化物

ベッド:幅63～93cm 高さ4～16cm

周溝:1条 幅10～21cm 深さ6～8cm

その他付帯施設:-

出土遺物:弥生土器甕、壺、鉢、台石、叩石、凹石

所見:調査区中央部に位置する。南側は一部調査区外にあるがほぼ全体を検出している。弥生時代後期後半の竪穴建物跡ST2が東側に隣接している。弥生時代後期後半のSK3、SK13と古代のSD4、時期不明のSD9、SD12、SD14に切られている。

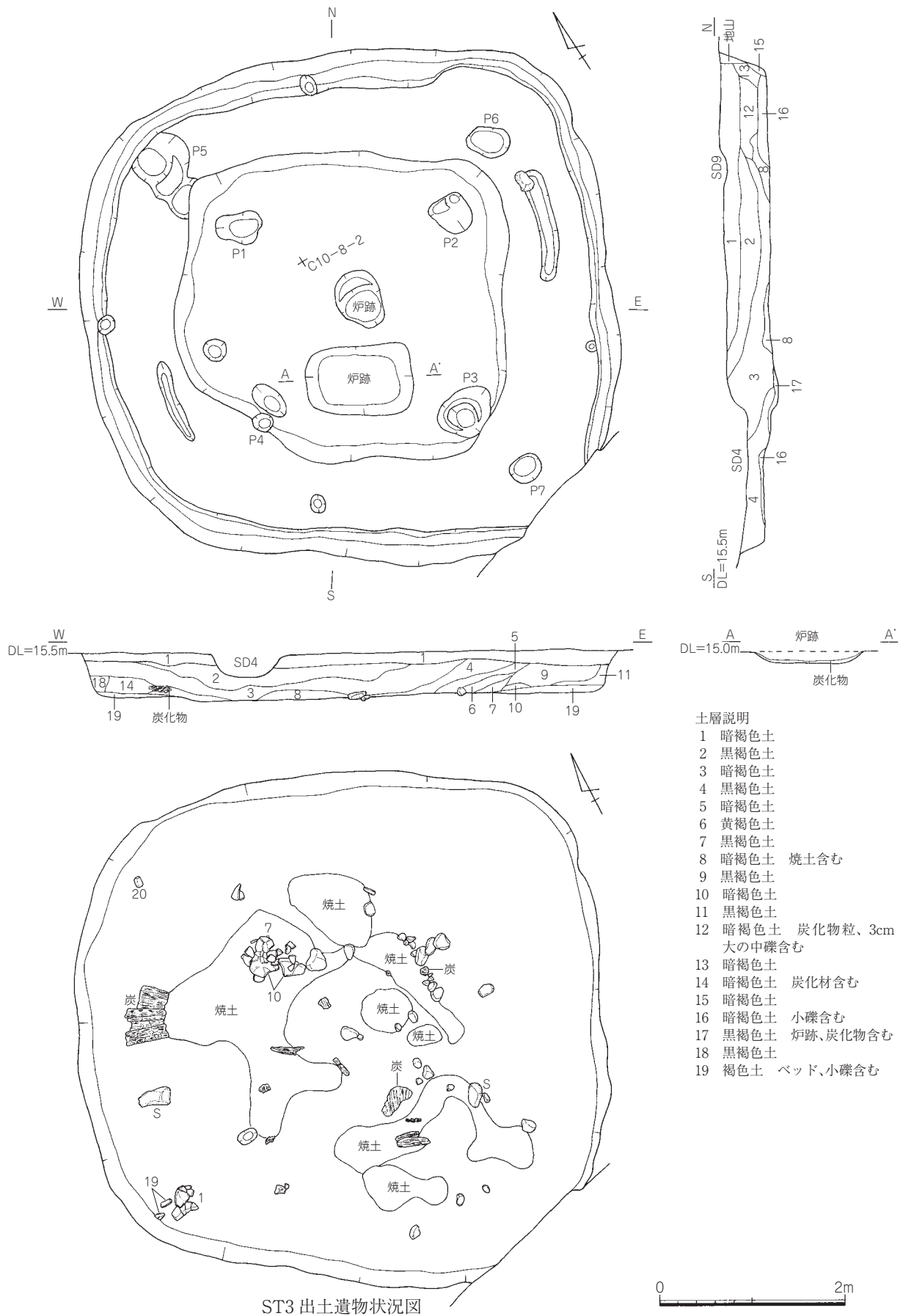
確認面は基本土層Ⅲ層暗褐色土上面で、床面は基本土層Ⅴ層黄褐色ローム混礫層に掘り込まれていた。平面形は隅丸方形を呈すると考えられる。一辺の長さ約5.6mを測る中型の竪穴建物跡である。深さは55cmを測る。

覆土は上層に暗褐色土、次いで黒褐色粘質土で全体に黒色土と黄褐色粒を含み、さらに暗褐色粘質土で黄褐色粒をブロック状に含む。下層は暗褐色粘質土で全体に焼土を含む。壁際には暗褐色粘質土でベッド状遺構を構成する。床面土層断面等の観察で貼床に相当する層は暗褐色粘質土が認められた。床面はほぼ平坦面をなし、標高は14.88mである。

炉跡は円形のもの中央に、楕円形のもの中央からやや南に位置するところで検出している。円形炉跡の規模は径50cm、深さ7cm、楕円形炉跡の規模は長軸1.15m、短軸0.74m、深さ16cmを測る。覆土は楕円形のが黒褐色粘質土で下層に炭化物が多量に混入している。

柱穴は15基検出し、このうち主柱穴P1～4はベッド際の内側の隅で検出し、直径20～62cm、深さ37cmを測る。

ベッド状遺構は暗褐色粘質土による造り付けで四辺すべて確認した。幅は63～93cmで高さは床



面から4～16cm程度である。

竪穴建物跡内土坑1基を東隅のベッド上で確認した。形状は45×32cmで楕円形を呈し、深さは14cmを測る。

壁際で周溝を検出している。ベッド状遺構を掘り込み構築され、調査区内は全周している。幅は広いところで21cm、深さは深いところで8cmを測る。

広い範囲で焼土を確認したことや、炭化物が検出されたことから焼失住居と考えられる。

なお、造り付けのベッド状遺構を掘削した結果、三隅で3基の柱穴を検出した。北部のP5は径58cm、深さ27cm、東部のP6は径58cm、深さ37cm、南部のP7は径52cm、深さ35cmを測る。西部の隅では検出しなかったが、いずれの柱穴も支柱穴を構成していたと考えられる規模である。併せて2条の溝跡も検出した。これらのことから、この竪穴建物跡は、時期については判然としないが建て替えられた可能性がある。

所属時期は出土遺物からして弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物(第9図No.1～22)

No.1から6は甕である。1は全体に丸味を持つ。底部も丸底である。整形は外面タタキ、ナデ、内面口縁ハケ、内面ケズリ、ナデである。砂粒が多い。2は余り丸味を持たないもので、口縁は外傾する。3から6は小型甕である。口縁がやや屈曲するもので胴部は余り膨らみを持たない。外面はタタキ整形、内面がハケ整形のものが多い。また色調は暗黒褐色のもので占められる。

7から9は壺である。7はほぼ完形品である。最大径は胴部のやや上半にあり24.6cmを測る。頸部がすばまり口縁は僅かに外反する。胴部はやや長胴気味で、底部は丸底である。整形は外面がタタキ、下半がヘラケズリである。内面はナデである。8は広口壺である。口唇端部が受け口状になる。9は二重口縁か。口唇は丸味を持ち、外面に櫛描波状文を施す。

10から13は鉢である。10は口径28cm強を測る大型のもので、一部が片口状になる。全体に丸味を持ち、底部も丸底である。整形は外面がタタキ、内面が粗いハケ整形である。11から13は中型の鉢で、体部に丸味を持つ。整形は外面がタタキ、内面がハケ整形のものである。13は口縁が僅かにくびれる。

14は高坏の脚部である。外面にミガキを施す。

15、16は甕の底部破片である。丸底である。17から19は鉢の底部である。共に平底である。17は底径がやや広いが内面がミガキである。18、19は小さな平底で外面がタタキ、内面がハケ整形である。

20から22は石器で、20が叩石である。側縁に線状の敲打痕が認められ、一端部には朱が付着する。

21は凹石、22は大型の台石である。3点共に砂岩である。

ST4 (第10～13図)

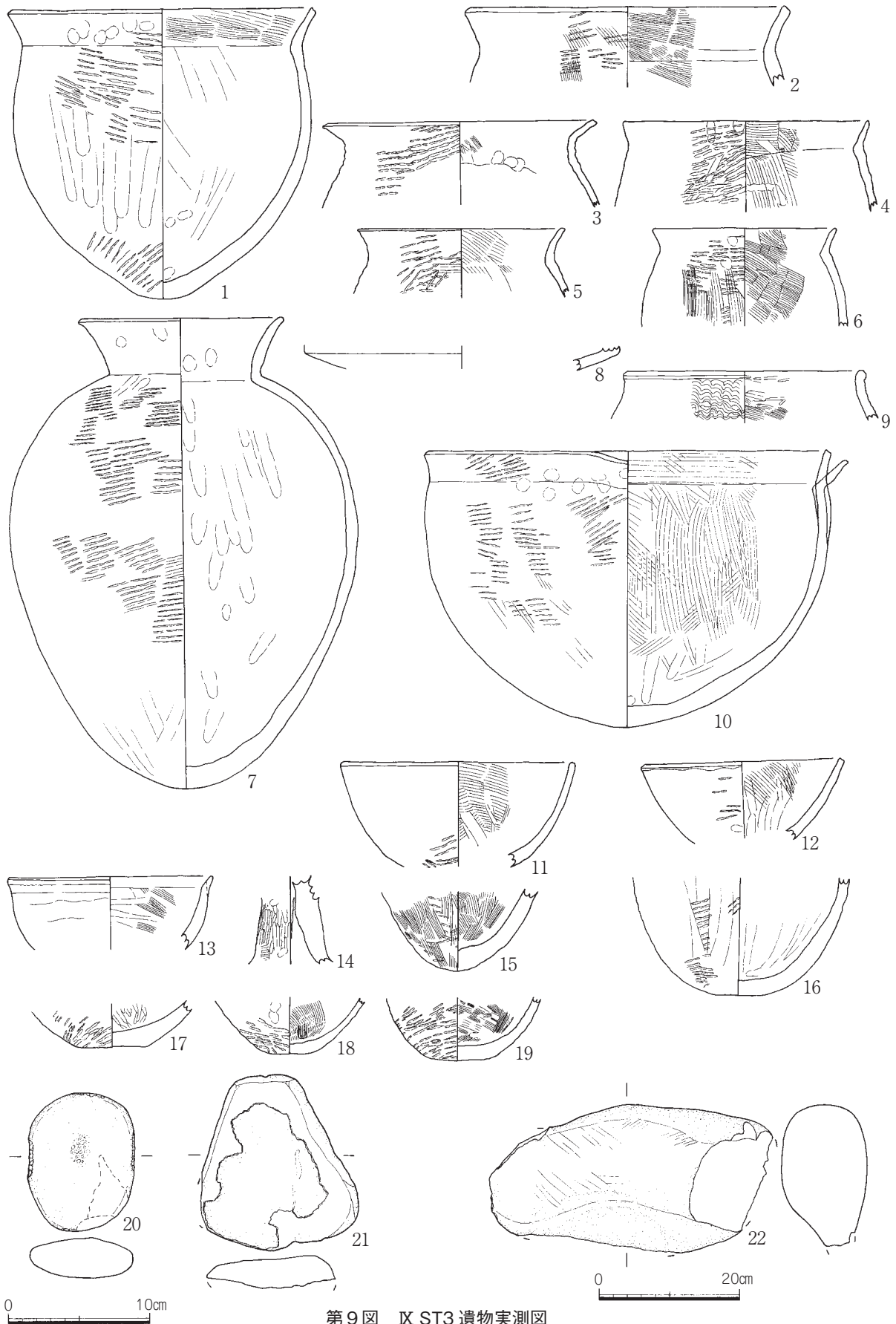
グリッド:C10-2-18他 切り合い関係;SD1、C10-2-18P1に切られる

時期:弥生時代後期末 形状:方形 主軸方向:N-30°-E

規模:3.60×3.38m 深さ0.41m

覆土:黒褐色土主体

柱穴:数- 支柱穴数- 支柱穴-



第9图 IX ST3 遺物実測図

炉跡:形状 楕円形 規模83×62cm 深さ23cm 覆土 黒褐色土、焼土炭化物含む

ベッド:幅76～79cm 高さ14～17cm

周溝:1条 幅14～21cm 深さ11～14cm

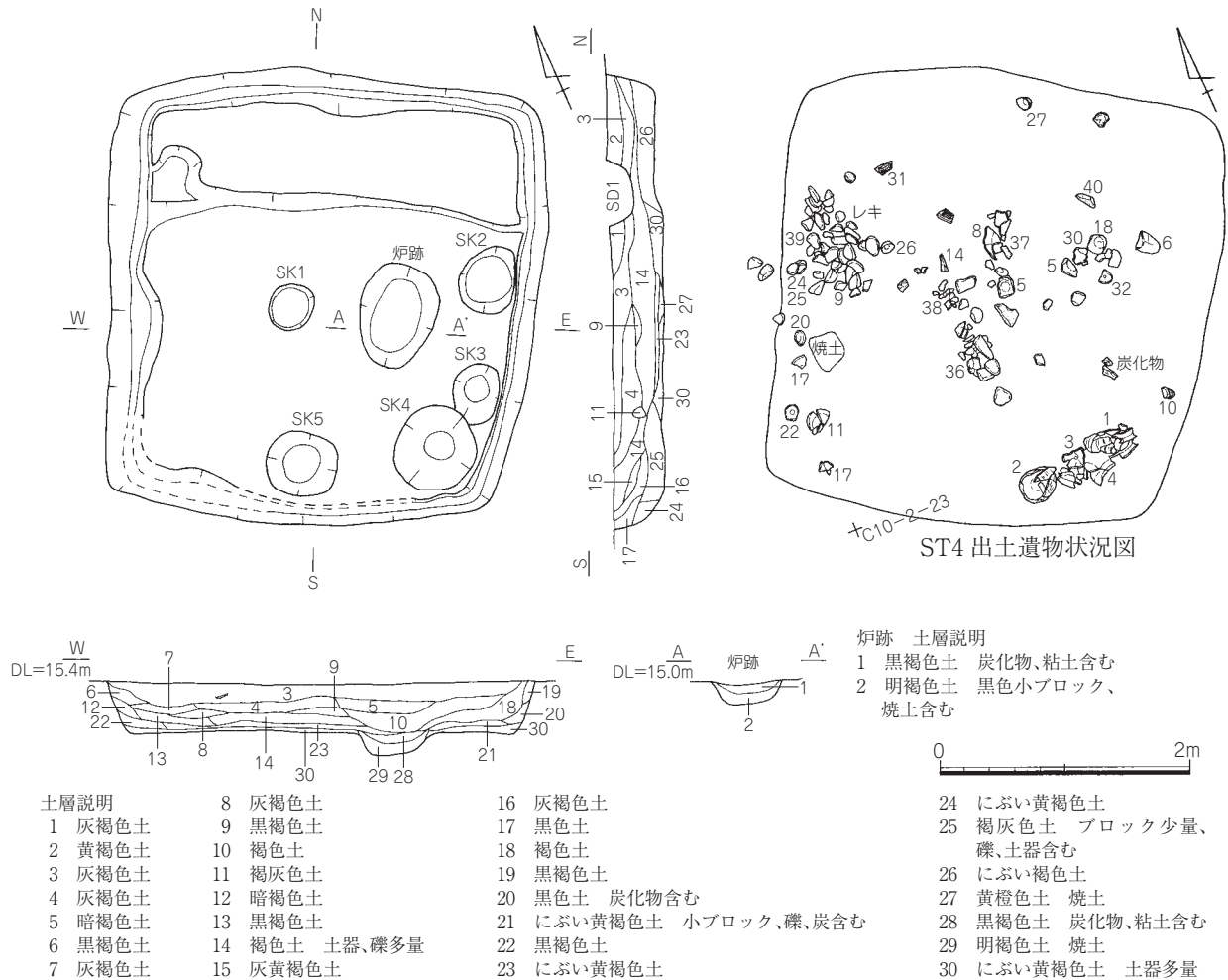
その他付帯施設:土坑5基

出土遺物:弥生土器甕、壺、鉢、高坏、石包丁、叩石

所見:調査区西端部北側に位置する。古代のSD1、C10-2-18P1に切られている。確認面は基本土層Ⅲ層暗褐色土上面で、床面は基本土層Ⅴ層黄褐色ローム混礫層に掘り込まれていた。平面形は方形を呈する。一辺の長さ約3.6mを測る小型の竪穴建物跡である。深さは41cmを測る。

覆土は上層に灰褐色土、次いで灰褐色粘質土と暗褐色粘質土で共に橙色小ブロックを含み、さらに褐色粘質土で橙色小ブロックを含み、下層はにぶい黄褐色粘質土で炭化物を含む。北東辺の壁際には、にぶい褐色土で黒褐色土が帯状に入るベッド状遺構を構成する。床面土層断面等の観察で貼床に相当する層はにぶい褐色土が認められた。床面はほぼ平坦面をなし、標高は14.84mである。

炉跡は1基検出している。中央からやや南東に位置する。形状は楕円形で、規模は長軸83cm、短軸62cm、深さ23cmを測る。覆土は上層が黒褐色で炭化物を含み、下層が明褐色土で黒色土ブロック及び焼土を含む。



第10図 IX ST4 遺構図

柱穴は検出していない。ベッド状遺構はにぶい褐色土による造り付けで北東部一辺のみで確認した。幅は76～79cm、高さは床面から14～17cm程度である。

竪穴建物跡内土坑5基を確認した。SK1はほぼ中央に位置し、規模は38×34cmで円形を呈し、深さは6cmで浅い。その他の土坑は南東壁に位置し、SK2は56×46cmで楕円形を呈し、深さ24cmを測る。SK3は49×39cmで楕円形を呈し、深さ20cmでやや浅い。SK4は径66cmで円形を呈し、深さ27cmを測り、弥生土器壺が出土した。SK5は55×51cmで円形を呈し、深さは26cmを測る。

周溝は壁際で全周している。幅は広いところで21cm、深さは深いところで14cmを測る。

北西中央の壁際では、多量の河原石を確認した。

所属時期は出土遺物からして弥生時代後期終末と考えられる。

出土遺物(第11～13図No1～40)

No.1から11は甕でその中で1から4はほぼ完形品の大型甕である。底部は丸底気味だが僅かに小さな平底である。口縁が緩く外傾し、胴部中程から下半に最大径を有する。整形は外面上半がタタキ、下半はタタキとハケである。内面は上半がハケ、下半がナデ調整のものが多い。4はやや異質で内外面にやや粗いミガキを施す。色調も他のものは暗褐色を呈するのに対し、赤橙色を呈する。下半には煤が付着する。4のみタタキ整形が認められない。5から7はやや小型の甕である。5、6は口縁が外傾し、体部に僅かに丸味を持ち長胴気味である。底部は小さく平底気味である。整形は外面がタタキ後半はハケ、内面はハケである。8から11は甕の胴部、底部破片である。8は体部下半で底部は小さな平底である。外面はタタキ、ハケ、内面はナデ整形である。9から11は小型甕である。共に小さな平底である。整形はやはり外面はタタキ、内面にハケを施すものである。

12から15は壺である。共に口縁が大きく開き、端部を拡張するものである。口径は20cm前後を測る。15は口縁に貝殻復縁を連続的に刺突する。整形は内外面共にハケを施す。壺はこのタイプのみである。

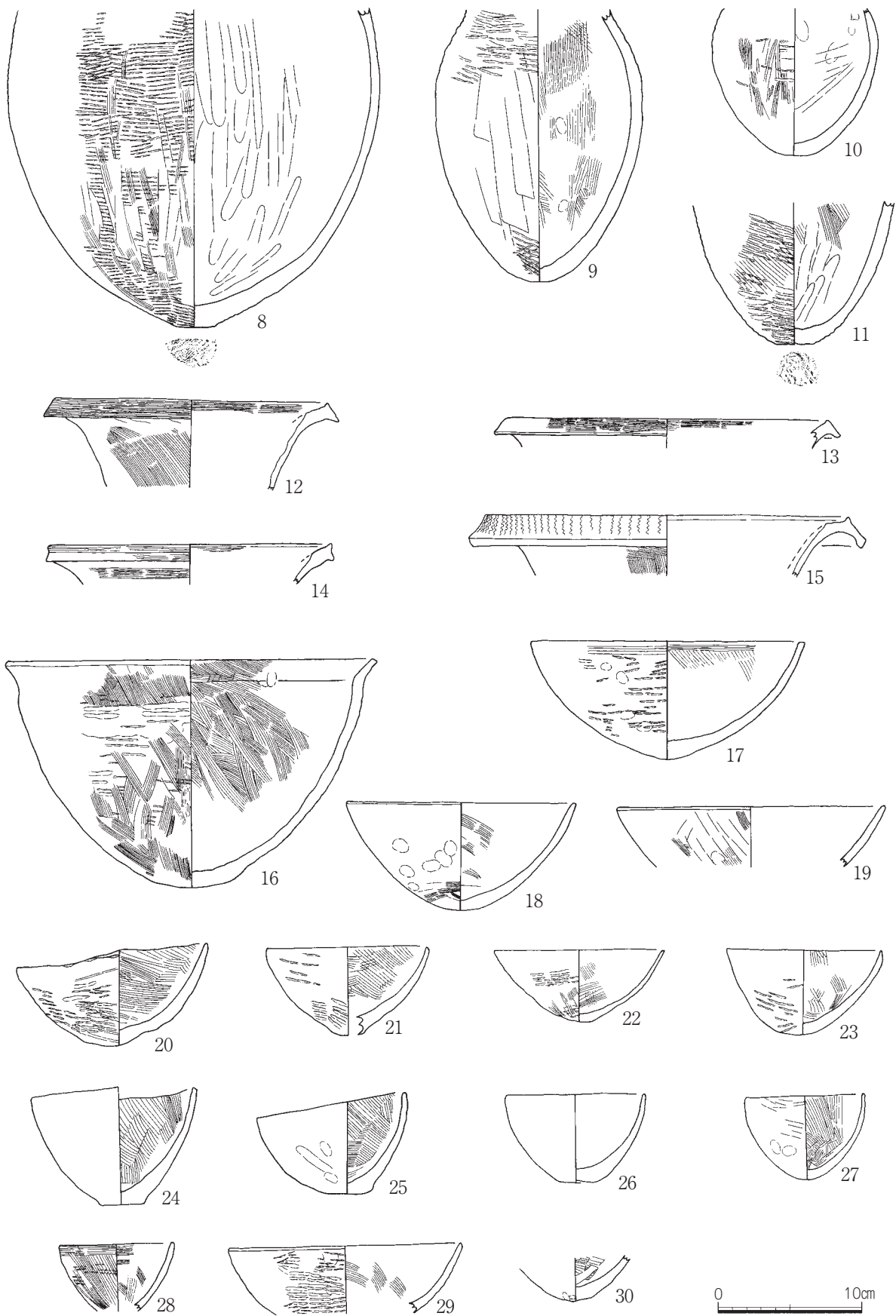
16から30は鉢である。16は大型のもので口径25.4cmを測る。口縁は僅かに屈曲し、体部下半がすぼまり、底部は平底気味である。17はやや大型のもので体部は開く。底部は尖底気味である。口縁内外面がヨコハケである。21から28はやや小型のもので口径10cm前後、器高6cm前後を測り、余り体部が開かないものである。27、28は更に小型で口径8cm程である。23以外は小さな平底か尖った平底のものである。整形は大部分が外面がタタキ、内面がハケのもので占められる。

31は高坏の坏部で浮文等の加飾を施す。外面は浮文以外に櫛描波状文も施している。内面はミガキである。32はボタン状の小さな鈕を有する蓋と考えられる。外面はミガキ整形である。33から36は支脚である。33、34は裾部破片、35は脚部、36は受口部突起の部分破片である。共に整形は指頭、ナデである。

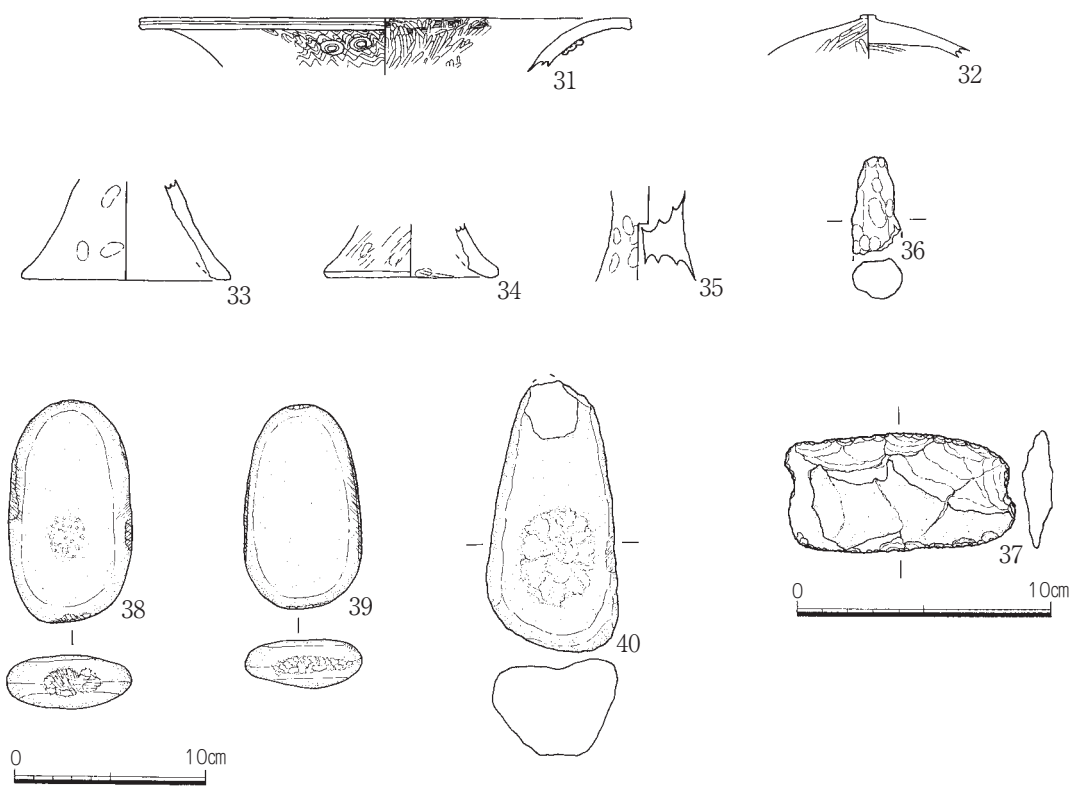
37から40は石器である。37は打製の石包丁である。両端部に抉入部を作出する。38から40は砂岩製の叩石である。38は側縁及び端部にも敲打痕が認められる。39は両端部に敲打痕が認められる。40はやや大きなもので一面に顕著な敲打痕が認められる。



第 11 图 IX ST4 遺物実測図 (1)



第 12 図 IX ST4 遺物実測図 (2)



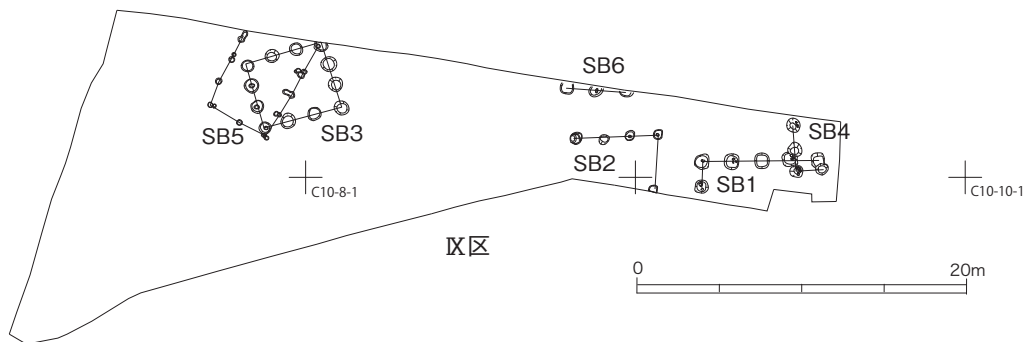
第13図 IX ST4 遺物実測図(3)

第3節 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は6棟検出している。調査区東側でSB1、2、4、6の4棟、西側部でSB3、5を検出した。SB2から須恵器坏で8C後半と考えられるものが出土している以外は他の掘立柱建物跡からは出土していないために明確にし得ないが、SB5以外は規模等からしてSB2とほぼ同時期と考えられる。柱穴の形状は円形を基本としており、一部方形のものも認められる。柱穴の掘り方の規模は径0.8m、深さ0.5～0.7mのものが多く、柱痕が認められた。桁行、梁行の分かるものはSB3が3×3間、SB5が4×2間である。他のものは調査区外へと広がるため不明である。SB5以外の軸方向はN-74°-E、N-4°-Wでほぼ北方向に直角に交わる方位を採る。しかしSB5のみは方位を違えており、また柱穴の規模も小さい。

第2表 IX区掘立柱建物跡一覧表

SB番号	グリッド	時期	桁行	梁行	面積(m ²)	柱穴形状	柱穴平均径(m)	柱穴平均深さ(m)	柱痕平均径(m)	柱痕平均深さ(m)	軸方向	遺物
SB1	C10-4-22他	古代	(4)	(1)		方形	0.88	0.53	0.15	(0.52)	N-90°-E	弥生細片
SB2	C10-3-25他	古代	3	(1)		円形・方形	0.7	0.44	0.18	(0.52)	N-87°-E	刀子、須恵器底部
SB3	C10-2-20他	古代	3	3	19.63	円形	0.8	0.57	0.17	(0.57)	N-74°-E	弥生細片
SB4	C10-4-23他	古代	(2)	(1)		円形	0.79	0.75	0.14	(0.71)	N-4°-W	弥生細片
SB5	C10-2-20他	古代	4	2	25.56	円形	0.35	0.56			N-28°-E	弥生鉢
SB6	C10-3-20他	古代	(2)			円形	0.8	0.5			N-85°-W	P2根石



第14図 IX区SB全体配置図

SB1 (第15図)

グリッド:C10-422他 切り合い関係:SD1に切られ、ST1、SB4を切る

時期:古代 主軸方向:N-90° -E

規模:桁行(4)間×梁行(1)間 桁行7.07m×梁行(1.52) m 柱間距離桁行1.68～1.85m (平均1.77m)

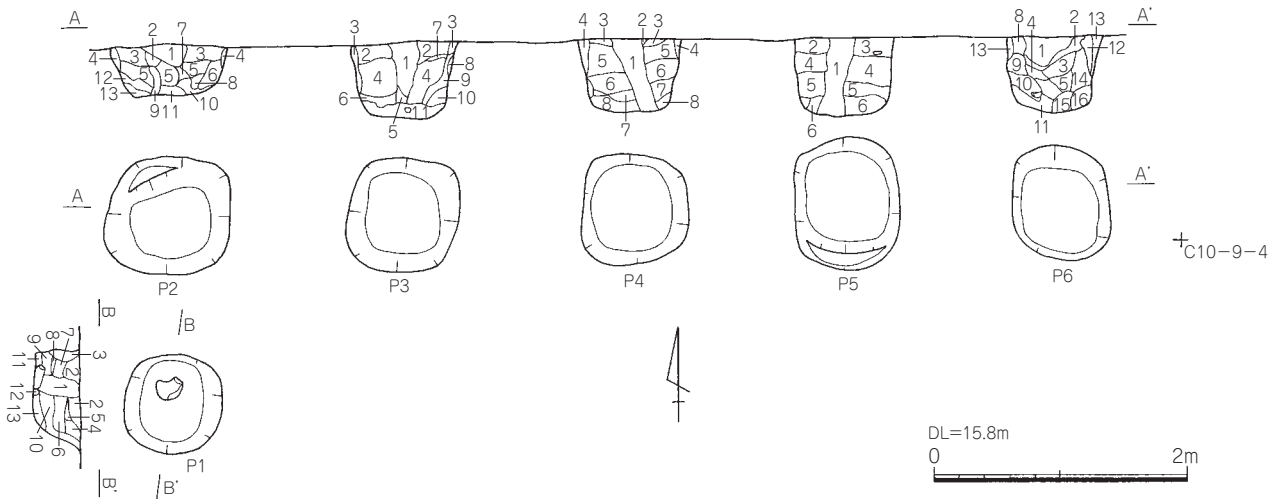
梁行1.52m 面積不明

柱穴数:(6) 柱形状:方形 柱痕:有 柱穴規模:0.91×0.85m 深さ平均0.53m

覆土:黒褐色土

出土遺物:弥生土器細片

所見:調査区東端部南側で検出した掘立柱建物跡で東西棟と考えられる。南東側が調査区外に広がるため規模等は不明であるが、一定の規則性を持って並ぶ柱穴が検出されたことから掘立柱建物跡



- | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----|---------------------|---------------------|----------|----------|---------------|----------|-------------|-------------|-----------|-------------|------------|-----------|-----------|-------------|---------|
| P1 | 1 にぶい黄褐色土 ブロック多量 | 2 黒褐色粘質土 | 3 黒褐色粘質土 | 4 黒褐色粘質土 | 5 にぶい黄褐色粘質土 | 6 黒褐色粘質土 | 7 黒褐色粘質土 | 8 にぶい黄褐色粘質土 | | | | | | | |
| P2 | 1 にぶい黄褐色土 | 2 黒褐色土 | 3 黒褐色土 | | | | | | | | | | | | |
| P3 | 1 にぶい黄褐色土 | 2 黒褐色粘質土 | 3 褐色粘質土 | 4 黒褐色粘質土 | 5 黒褐色粘質土 | 6 黒色粘質土 | 7 にぶい黄褐色粘質土 | 8 黒褐色粘質土 | 9 黒褐色粘質土 | 10 黒色粘質土 | 11 黄橙色土 地山 | | | | |
| P4 | 1 にぶい黄褐色粘質土 大ブロック多量 | 2 にぶい黄褐色粘質土 大ブロック多量 | 3 暗褐色粘質土 | 4 暗褐色粘質土 | 5 黒褐色粘質土 土器含む | 6 黒褐色粘質土 | 7 黒褐色粘質土 | 8 黒色粘質土 | | | | | | | |
| P5 | 1 にぶい黄褐色土 粘土質 | 2 黒褐色粘質土 | 3 黒褐色粘質土 | 4 黒褐色粘質土 | 5 黒褐色粘質土 | 6 黒色粘質土 | | | | | | | | | |
| P6 | 1 にぶい橙色土 大ブロック多量 | 2 にぶい褐色土 | 3 黒褐色粘質土 | 4 黒褐色粘質土 | 5 黒褐色粘質土 | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | 8 黒褐色粘質土 | 9 暗褐色粘質土 | 10 暗褐色粘質土 | 11 灰褐色シルト質土 | 12 黒褐色粘質土 | 13 暗褐色粘質土 | 14 黒褐色粘質土 | 15 黒褐色シルト質土 | 16 暗褐色土 |

第 15 図 IX SB1 遺構図

と想定した。P1～6が柱穴を構成するものと考えられる。P1はSD1に切れ、P2はST1を、P5はSB4P2、P3を、P6はSB4P4を切る。掘方は一辺76～98cmの方形を呈し、検出面からの深さは浅いものでP1、P2の38cm、その他の柱穴は58～63cmを測る。

覆土は暗褐色土・黒褐色土・黒色土を基調に5層ないし6層からなり、そのうち柱痕のあるP1、P3、P4、P5については、4層ないし5層からなり水平堆積している。P1、P4、P5の柱痕はやや傾斜している。P3は直径16cm前後の柱痕がほぼ垂直に残る。P6は土層観察により、柱を抜き取った可能性が考えられる。P1、P2では根石を検出した。

遺物は混入の弥生土器細片のみで掲載できる遺物は出土しなかった。所属時期は時期決定できる遺物が出土していないものの、柱穴の配置、規模からして古代と考えられる。

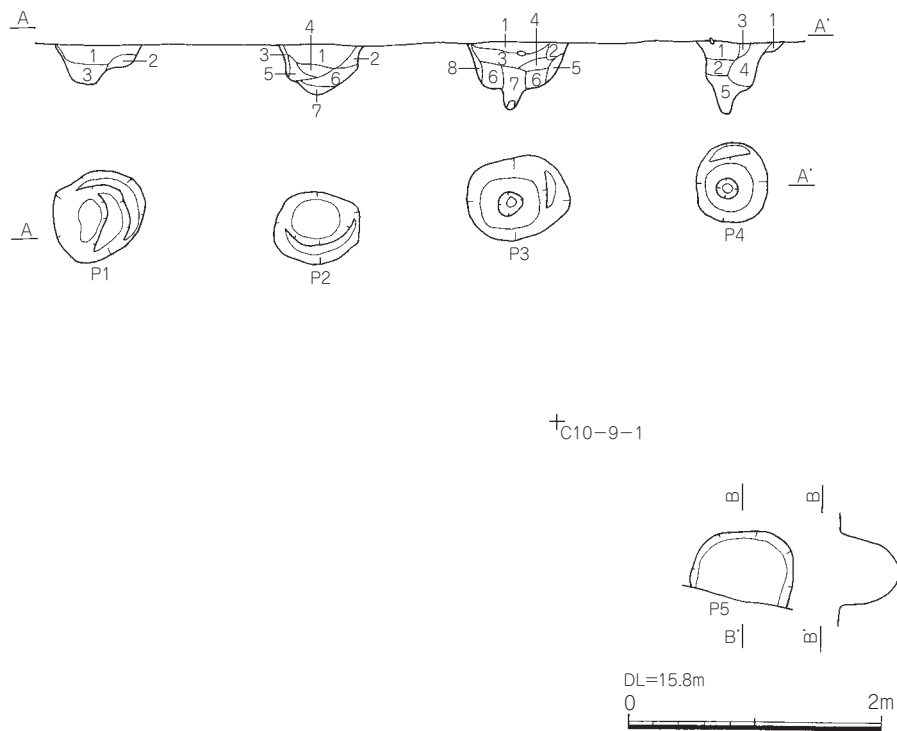
SB2 (第16、21図)

グリッド:C10-3-25他 切り合い関係:ST1、SD22を切る

時期:8C後半 主軸方向:N-87° -E

規模:桁行3間×梁行(1)間 桁行5.05m×梁行(3.16) m 柱間距離桁行1.55～1.80m (平均1.68m)

面積不明



- P1
 1 黒褐色粘土質シルト
 2 黒褐色粘土質シルト
 3 黒褐色粘土質シルト

- P2
 1 黒褐色粘土質シルト
 2 黒褐色粘土質シルト
 3 黒褐色粘土質シルト 黄褐
 色ブロック多量
 4 黒褐色粘土質シルト
 5 黒褐色粘土質シルト
 6 黒褐色粘土質シルト
 7 黄褐色粘質土

- P3
 1 黒褐色粘土質シルト
 2 黒褐色粘土質シルト
 3 黒褐色粘土質シルト
 4 黒褐色粘土質シルト
 5 オリーブ褐色粘土質シルト
 6 黒色粘土質シルト
 7 黒褐色粘土質シルト 柱痕
 8 ST2埋土

- P4
 1 黒褐色粘土質シルト
 2 黒褐色粘土質シルト
 3 黒褐色粘土質シルト
 4 黒色粘土質シルト 遺物含
 む
 5 黒褐色粘土質シルト

第16図 IX SB2 遺構図

柱穴数:5 柱形状:円形、方形 柱痕:有 柱穴規模:径平均0.70m 深さ平均0.44m

覆土:黒褐色土

出土遺物:須恵器坏、長頸壺、鉄製刀子

所見:調査区東部南側で検出した掘立柱建物跡で東西棟と考えられる。南側が調査区外に広がるため規模等は不明であるが、一定の規則性を持って並ぶ柱穴が検出されたことから掘立柱建物跡と想定した。P1～5が柱穴を構成するものと考えられる。P1はSK11と接している。P2～5はST1を切り、さらにP3はSD22を切る。掘方はP1、P2、P5が直径60～78cmの円形を呈し、P3、P4が57～78cmの方形を呈している。検出面からの深さはP1～3、P5が38～44cm、P4が59cmを測る。覆土は3～7層からなっている。柱痕はP3で直径17cm、P4で直径12cmを測るものが残っている。遺物はP1から須恵器の坏No.1の底部が、P3から刀子No.2と考えられる鉄製品が出土した。

所属時期は出土遺物から8C後半と考えられる。

出土遺物(第21図No.1～3)

No.1はP1出土の須恵器坏である。底部ヘラ切り後調整を施さない。高台はやや中程に「ハ」字状に付き、腰部やや丸味を持ち開く。内面底にロクロ目を残す。8C後半のものか。2はP5出土の須恵器長頸壺の頸部である。頸部は緩やかに外反し、口唇はやや丸味を持つ素口縁である。8Cのものか。3はP3出土の鉄製の刀子の柄部と考えられ、先端部は欠損する。断面は三角形を呈する。

SB3 (第17図)

グリッド:C10-2-20他 切り合い関係:SD1切られる、SD21、C10-3-21P8を切る

時期:古代 主軸方向:N-74°-E

規模:桁行3間×梁行3間 桁行4.87m×梁行4.03m 柱間距離桁行1.50～1.80m(平均1.62m) 梁行1.24～1.41m(平均1.34m) 面積19.63㎡

柱穴数:12 柱形状:円形 柱痕:有 柱穴規模:径平均0.80m 深さ平均0.57m

覆土:黒褐色土(P1～4、6、8～12)、黒色土(P5、7)

出土遺物:弥生土器細片

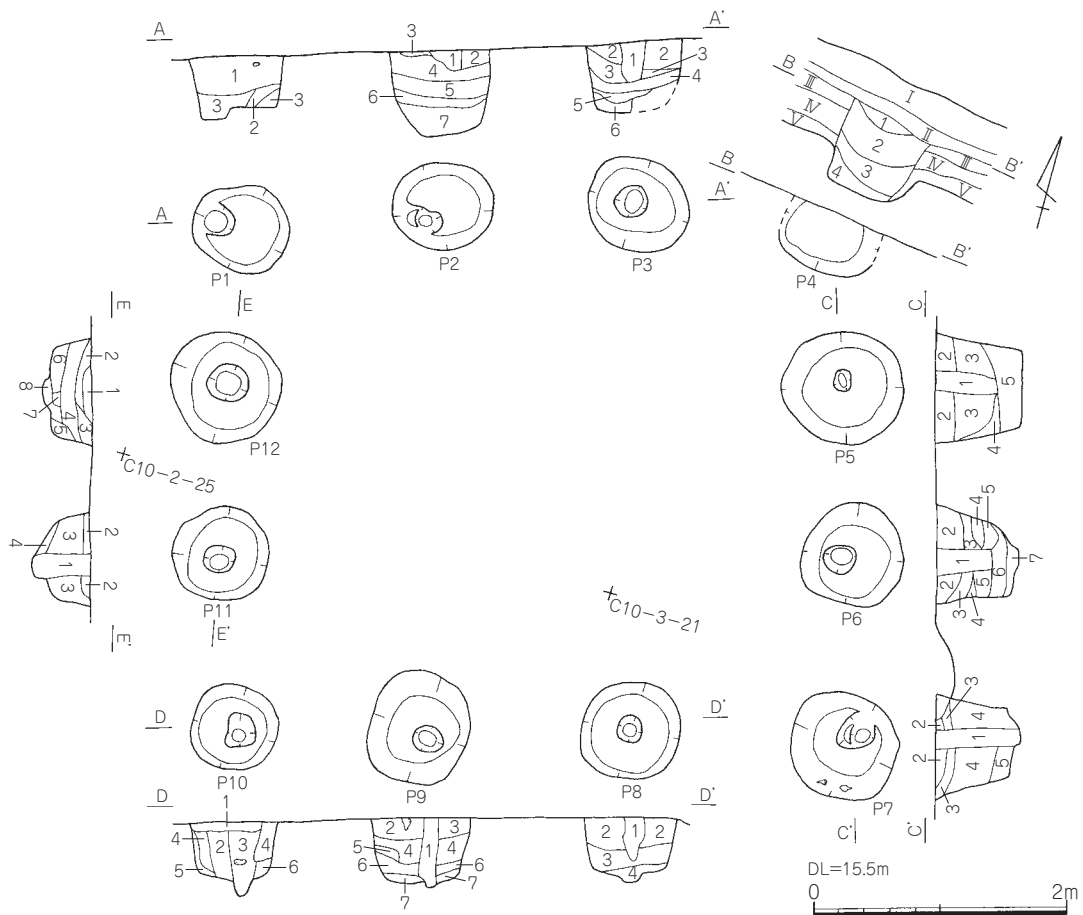
所見:調査区中央部やや西側で検出した掘立柱建物跡である。建物全体の半分程度がSB5と重なる。P1～12が柱穴を構成している。P7はSB3P4、SD21を切り、SD1(古代)に切られている。P8はC10-3-21P8を切り、P12はSD1に切られている。北側が調査区外に広がるため形状等を確定できない。掘方は直径70～91cmの円形を呈し、検出面からの深さは、浅いものでP1、P11、P12が38～47cm、つぎにP3、P4、P8、P9が50～57cm、さらにP5、P6、P10が62～67cm、P2が71cm、P7が78cmを測る。覆土はP5、P7の黒色土以外はすべて黒褐色土で、3層ないし8層からなりP1以外は水平堆積している。柱痕はP4を除いて、すべての柱穴で直径14～18cm大の底面を掘り込んだ状態で検出した。

遺物は混入の弥生土器細片のみで掲載できる遺物は出土しなかった。所属時期は時期決定できる遺物が出土していないものの、柱穴の配置、規模からして古代と考えられる。

SB4 (第18図)

グリッド:C10-4-23他 切り合い関係:SB1に切られる

時期:古代 主軸方向:N-4°-W



P1
 1 黒褐色土
 2 黄橙色土
 3 黒褐色土

P2
 1 黒褐色土
 2 黒褐色土
 3 黒褐色土
 4 にぶい黄褐色土 礫含む
 5 黒褐色土 礫含む
 6 黒褐色土
 7 黒褐色土

P3
 1 黒褐色土
 2 黒褐色土
 3 黒色土
 4 暗褐色土
 5 暗褐色土
 6 黄橙色土 黒ボクブロック少量

P4
 I 耕作土
 II 黒褐色土
 III 黒褐色土

IV にぶい黄褐色土
 V にぶい黄褐色土
 1 黒褐色土
 2 黒褐色土
 3 黒色土
 4 暗褐色土

P5
 1 黒色土
 2 黒色土
 3 黒色土
 4 黒色土
 5 黄褐色土

P6
 1 黒褐色土
 2 黒褐色土
 3 黒色土
 4 黒褐色土 黄褐色ブロック少量
 5 黒色土
 6 黒色土
 7 黄褐色土

P7
 1 黒色土
 2 黒色土
 3 黒色土
 4 黒色土
 5 黒色土 黄褐色ブロック多量

P8
 1 暗褐色土
 2 黒褐色土
 3 黒色土
 4 にぶい黄褐色土

P9
 1 暗褐色土
 2 黒褐色土
 3 黒褐色土
 4 にぶい黄褐色土
 5 黒褐色土
 6 黒褐色土
 7 黄橙色土

P10
 1 黒褐色土
 2 黒褐色土
 3 褐灰色土
 4 黒色土
 5 褐灰色土
 6 黄橙色土

P11
 1 褐灰色土
 2 褐色土
 3 黒褐色土
 4 黄褐色土

P12
 1 黒褐色土 SD1埋土
 2 黒褐色土
 3 黒褐色土
 4 黒褐色土
 5 黒褐色土
 6 褐色土 黄褐色ブロック多量
 7 黒褐色土
 8 褐色土

第 17 図 IX SB3 遺構図

規模:桁行(2)間×梁行(1)間 桁行(2.77)m×梁行(1.40)m 柱間距離桁行1.30～1.47m(平均1.39m)
梁行1.40m 面積不明

柱穴数:4 柱形状:円形 柱痕:有 柱穴規模:径平均0.79m 深さ平均0.75m

覆土:黒色土(P1、P3)、黒褐色土(P2、P4)

出土遺物:弥生土器細片

所見:調査区東端部で検出した掘立柱建物跡である。北東側が調査区外に広がるため規模等は不明であるが、一定の規則性を持って並ぶ柱穴が検出されたことから掘立柱建物跡を想定した。P1～4が柱穴を構成するものと考えられる。P1はSK12に、P2はSB1P5とSD3に、P3はSB1P5に、P4はSB1P6に切られる。柱穴の掘方は直径75～84cmの円形を呈している。検出面からの深さは66～86cmを測る。覆土はP1、P3が黒色土、P2、P4が黒褐色土で2層ないし6層からなり水平堆積している。柱痕はP1、P3、P4で検出し、平均径14cmを測る。P1とP4では15cm大の根石を検出した。P1は13～17cmの礫が投げ込まれている。

遺物は混入の弥生土器細片のみで掲載できる遺物は出土しなかったものの、時期は古代と考えられる。

SB5 (第19、21図)

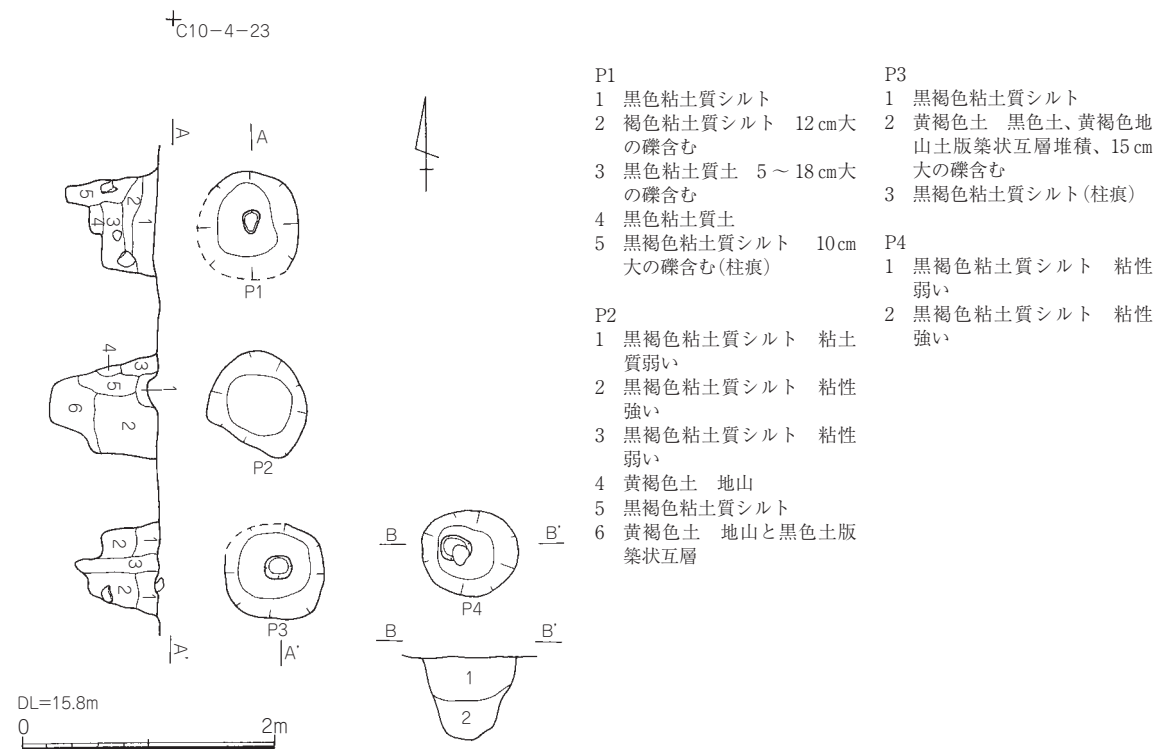
グリッド:C10-2-20他 切り合い関係:SB3、SD1に切られる

時期:古代 主軸方向:N-28°-E

規模:桁行4間×梁行2間 桁行6.39m×梁行4.00m 柱間距離桁行1.48～1.71m(平均1.59m) 梁行1.94m、2.06m(平均2.00m) 面積25.56㎡

柱穴数:10 柱形状:円形 柱痕:無 柱穴規模:径平均0.35m 深さ平均0.56m

覆土:黒褐色土



第18図 IX SB4 遺構図

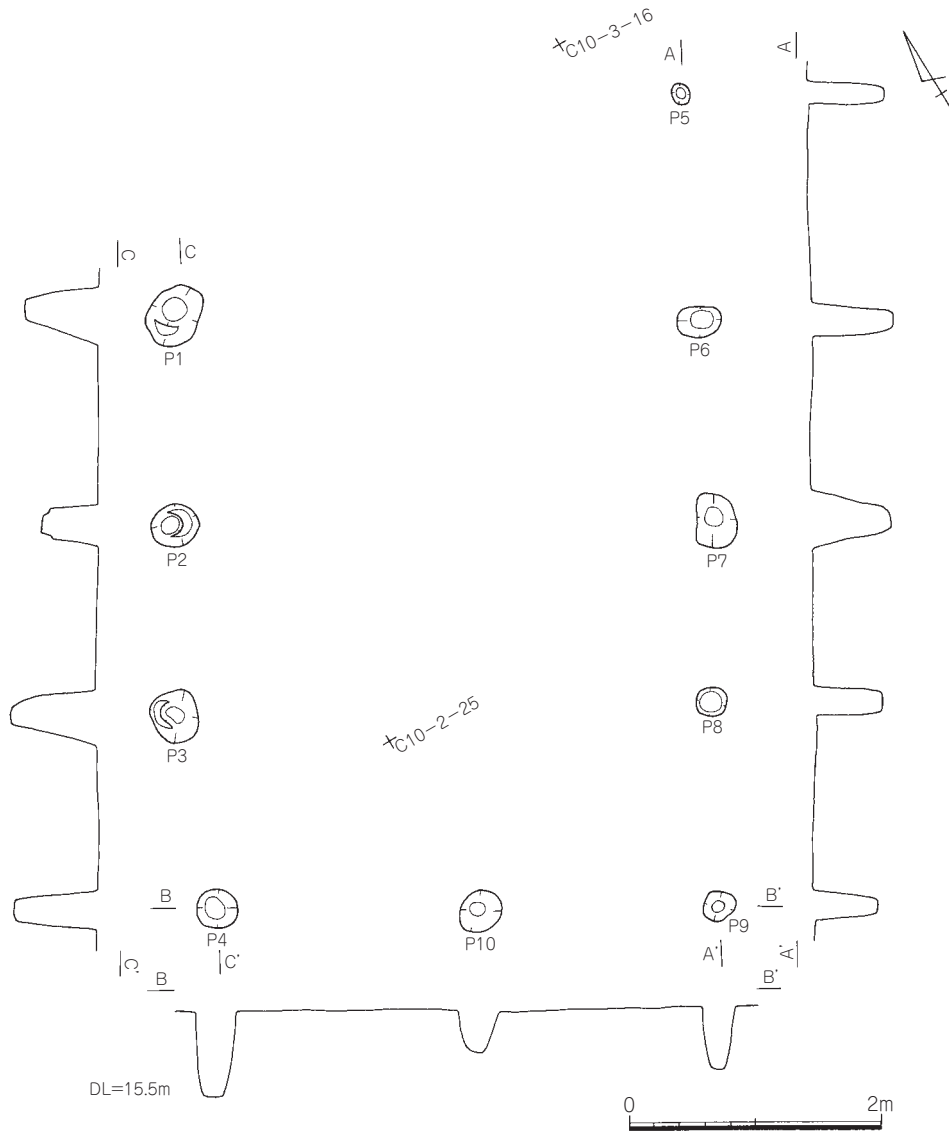
出土遺物:弥生土器鉢

所見：調査区中央部西寄りで検出した掘立柱建物跡である。建物全体の半分程度がSB3と重なる。北側が調査区外に広がるため規模等は不明である。P1～10が柱穴を構成するものと考えられる。P3、P8はSD1に切られ、P3はSB3P4に切られている。掘方は直径23～46cmの円形を呈し、検出面からの深さはP6が32cmと浅く、次にP9が46cm、その他の柱穴は51～68cmを測る。覆土はすべて黒褐色土である。柱痕は未検出である。

P2から弥生時代後期後半の鉢が出土している。所属時期は判然としない。

出土遺物(第21図No.1)

No.1は弥生土器鉢である。口径は16.8cmを測り、口縁は開き、整形は外面がタタキ、ハケ、内面はハケ、ミガキである。弥生時代後期後半のものと考えられる。



第19図 IX SB5 遺構図

SB6 (第20図)

グリッド:C10-3-20他 切り合い関係:なし

時期:古代 主軸方向:N-85° -W

規模:桁行(2)間×梁行- 桁行(3.66) m×梁行- 柱間距離桁行1.78m、1.88m (平均1.83m)

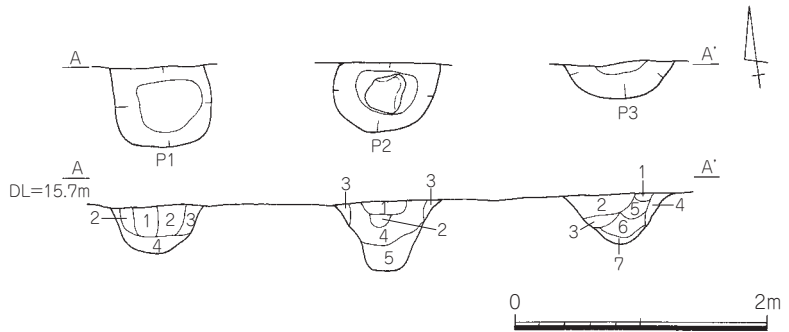
梁行- 面積不明

柱穴数:3 柱形状:円形 柱痕:無 柱穴規模:径平均0.80m 深さ平均0.50m

覆土:黒褐色土

出土遺物:弥生土器細片

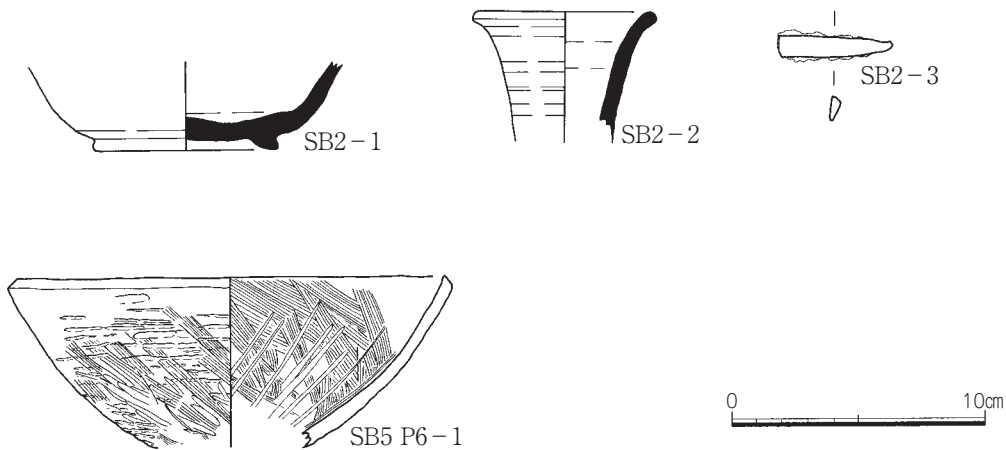
所見:調査区東部北端で検出した掘立柱建物跡で東西棟と考えられる。北側が調査区外に広がるため規模等は不明であるが、一定の規則性を持って並ぶ柱穴が検出されたことから掘立柱建物跡を想定した。P1～3が柱穴を構成するものと考えられるが、いずれも調査区外の北壁側に広がるため形状を確定できない。掘方はP1、P2が直径80cm前後で、P3は一部を検出したのみで全容はわからない。検出面からの深さは44～56cmを測る。覆土は4～7層からなっている。P2では30cm大の根石を検出した。柱痕は未検出である。



遺物は混入の弥生土器細片のみで掲載できる遺物は出土しなかった。所属時期は時期決定できる遺物が出土していないものの、柱穴の配置、規模からして古代と考えられる。

- | | |
|-----------------|-------------|
| P1 | 4 黒褐色粘土質シルト |
| 1 黒褐色粘土質シルト(柱痕) | 5 黒褐色粘土質シルト |
| 2 黒褐色粘土質シルト | |
| 3 黒褐色粘土質シルト | P3 |
| 4 黒褐色粘土質シルト | 1 黒褐色粘土質シルト |
| P2 | 2 黒褐色粘土質シルト |
| 1 黒褐色粘土質シルト | 3 黒褐色粘土質シルト |
| 2 黒褐色粘土質シルト | 4 黒褐色粘土質シルト |
| 3 黒褐色粘土質シルト 遺物含 | 5 黒褐色粘土質シルト |
| む | 6 黒褐色粘土質シルト |
| | 7 黒褐色粘土質シルト |

第20図 IX SB6 遺構図



第21図 IX区SB出土遺物実測図

第4節 土坑

土坑は17基検出した。形状は円形、長方形、楕円形、溝状のものが認められる。遺物の出土した土坑は少なく弥生土器細片が混入したものが多く認められた。その中でSK5からは纏まって弥生土器甕が出土し、SK7、8、11、17からも若干遺物が出土している。時期は大部分が弥生時代後期に含まれるものが多く、古墳時代前期初頭に含まれるものがSK7、11、古代はSK10が該当する。

第3表 IX区土坑一覧表

SK番号	グリッド	時期	形状	主軸方向	規模(m)	規模(m)	深さ(m)	遺物	切り合い
SK1	C10-2-25他	弥生後期後半	溝状	N-33° -E	2.56	0.68	0.37	弥生細片	C10-2-25P12切る
SK2	C10-7-5他	弥生後期後半	楕円形	N-40° -E	1.84	0.89	0.43	弥生細片	
SK3	C10-8-2	弥生後期後半	不明	N-45° -E	(0.63)	0.5	0.12	弥生細片	ST3切る、SD12切られる
SK4	C10-7-9	弥生後期後半	長方形	N-74° -W	0.92	0.49	0.1	弥生細片	
SK5	C10-7-8他	弥生後期後半	不整形	N-61° -W	0.8	0.54	0.27	弥生甕、壺	
SK6	C10-7-9	弥生後期後半	不明		1.08	(0.4)	0.09	弥生細片	SD8切る
SK7	C10-7-2	古墳前期	長楕円形	N-19° -W	1.4	0.44	0.27	土師甕、鉢	
SK8	C10-7-11	弥生後期後半	円形		0.66	(0.52)	0.19	弥生甕	
SK9	C10-7-11	弥生後期後半	溝状	N-72° -W	(0.84)	0.34	0.03	弥生細片	
SK10	C10-7-6他	古代?	不明		0.74	(0.4)	0.27	土師細片	
SK11	C10-3-24他	古墳前期	不明	N-16° -E	1.54	1.08	0.45	土師鉢	ST2切る、SD1切られる
SK12	C10-4-23	弥生後期後半	不明		1.44	(0.92)	0.07	弥生細片	SB4P1切られる
SK13	C10-8-1他	弥生後期後半	楕円形	N-13° -W	0.87	0.48	0.15	弥生細片	ST3切る
SK14	C10-2-20	弥生後期後半	不明		(0.56)	(0.3)	0.48	弥生細片	SD1切られる
SK15	C10-2-20	弥生後期後半	不明		(2.36)	(0.52)	0.41	弥生細片	
SK16	C10-4-21	弥生後期後半	楕円形	N-65° -E	1.06	0.54	0.1	弥生細片	
SK17	C10-2-18他	弥生後期後半	不明		(0.94)	(0.3)		弥生鉢	

SK1 (第22、23図)

グリッド:C10-2-25他 切り合い関係:C10-2-25P12を切る

時期:弥生時代後期後半 形状:溝状 断面形態:U字状 主軸方向:N-33° -E

規模:2.56×0.68m 深さ0.37m

覆土:黒色土

出土遺物:弥生土器細片

所見:調査区中央部西寄りで検出した溝状の土坑である。SK2の北東に隣接し、C10-2-25P12を切る。

所属時期は弥生時代後期後半の可能性がある。

出土遺物(第23図No.1)

No.1は広口壺で、口縁を拡張し、外面に鋸歯文を施す。

SK2

グリッド:C10-7-5他 切り合い関係:なし

時期:弥生時代後期後半 形状:楕円形 断面形態:皿状 主軸方向:N-40° -E

規模:1.84×0.89m 深さ0.43m

覆土:黒色土

出土遺物:弥生土器細片

所見:調査区中央部西寄りで検出した楕円形の土坑である。SK1の南西に隣接する。弥生土器細片のみで掲載できる遺物は出土しなかった。所属時期は弥生時代後期後半の可能性はある。

SK3

グリッド:C10-8-2 切り合い関係:ST3を切る、SD12に切られる

時期:弥生時代後期後半 形状:- 主軸方向:N-45° -E

規模:(0.63)×0.50m 深さ0.12m

覆土:黒色土

出土遺物:弥生土器細片

所見:調査区中央部南側で検出した形状不明の土坑である。ST3を切り、SD12に切られる。弥生土器細片のみで掲載できる遺物は出土しなかった。所属時期は弥生時代後期後半の可能性はある。

SK4

グリッド:C10-7-9 切り合い関係:なし

時期:弥生時代後期後半 形状:長方形 主軸方向:N-74° -W

規模:0.92×0.49m 深さ0.10m

覆土:黒色土

出土遺物:弥生土器細片

所見:調査区西部南端で検出した長方形の土坑である。SD8の南に隣接する。弥生土器細片のみで掲載できる遺物は出土しなかった。所属時期は弥生時代後期後半の可能性はある。

SK5 (第22、23図)

グリッド:C10-7-8他 切り合い関係:なし

時期:弥生時代後期後半 形状:不整形 断面形態:皿状 主軸方向:N-61° -W

規模:0.80×0.54m 深さ0.27m

覆土:黒色土

出土遺物:弥生土器甕、壺、鉢

所見:調査区西部南側で検出した不整形の土坑である。多量の弥生土器甕等が纏まって出土している。所属時期は出土遺物からして弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物(第23図No.1～7)

No.1から5は小型甕である。ほぼ完形品で占められており、長胴甕である。口径12cmから14cm、器高22cm前後、小さな底径は2cm程である。口縁は僅かに外傾し、長胴で最大径は中央部にあり、16cm前後を測る。底部は小さい平底である。整形は外面が口縁から胴部上半がタタキ、下半がハケ整形である。内面はハケで下半がナデである。5のみ口縁はタタキ後ナデ整形である。弥生時代後期後半と考えられる。

6は広口壺の口縁部破片である。口縁が大きく開く。口唇は平坦である。内外面共にハケ整形である。7は小型の鉢でほぼ完形品である。体部は余り開かず、底部は丸味のある平底である。外面ハ

ケ、ナデ、内面ハケ整形である。

SK6

グリッド:C10-7-9 切り合い関係:SD8を切る

時期:弥生時代後期後半 形状:— 主軸方向:—

規模:1.08×(0.40) m 深さ0.09m

覆土:黒色土

出土遺物:弥生土器細片

所見:調査区西部南端で検出した形状不明の土坑である。SD8の東部を切る。南側が調査区外に広がる。弥生土器細片のみで掲載できる遺物は出土しなかった。所属時期は弥生時代後期後半の可能性がある。

SK7 (第22、23図)

グリッド:C10-7-2 切り合い関係:なし

時期:古墳時代前期 形状:長楕円形 断面形態:皿状 主軸方向:N-19° -W

規模:1.40×0.44m 深さ0.27m

覆土:黒色土

出土遺物:土師器甕、鉢

所見:調査区西部で検出した長楕円形の土坑である。所属時期は出土遺物からして古墳時代前期初頭と考えられる。

出土遺物(第23図No.1、2)

No.1は土師器甕である。口縁は外傾し、内外面がハケ調整である。2は皿状の鉢で口縁が短く立ち上がり底部は丸味を持つ。内外面共に指頭圧痕である。共に古墳時代前期初頭と考えられる。

SK8 (第22、23図)

グリッド:C10-7-11 切り合い関係:なし

時期:弥生時代後期後半 形状:円形 主軸方向:—

規模:0.66×(0.52) m 深さ0.19m

覆土:黒色土

出土遺物:弥生土器甕

所見:調査区西端部南側で検出した円形の土坑である。SD16と隣接し、南側は調査区外に広がる。所属時期は出土遺物からして弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物(第23図No.1)

No.1は小型甕である。口縁は短く外傾する。外面タタキ、内面ハケ調整である。弥生時代後期後半と考えられる。

SK9

グリッド:C10-7-11 切り合い関係:なし

時期:弥生時代後期後半 形状:溝状 主軸方向:N-72° -W

規模:(0.84)×0.34m 深さ0.03m

覆土:黒色土

出土遺物:弥生土器細片

所見:調査区西端部南側で検出した溝状の土坑である。西側が調査区外に広がるため規模等は不明である。弥生土器細片のみで掲載できる遺物は出土しなかった。所属時期は弥生時代後期後半の可能性はある。

SK10

グリッド:C10-7-6他 切り合い関係:なし

時期:古代? 形状:- 断面形態:箱状 主軸方向:-

規模:0.74×(0.40) m 深さ0.27m

覆土:黒褐色土

出土遺物:土師器坏細片

所見:調査区西端部南側で検出した土坑である。形状は円形と考えられるが、西半部が調査区外に広がるため不明である。土師器坏細片が出土しているものの、掲載できなかった。所属時期は古代の可能性はある。

SK11 (第22、23図)

グリッド:C10-3-24他 切り合い関係:ST2を切る、SD1に切られる

時期:古墳時代前期 形状:- 断面形態:皿状 主軸方向:N-16° -E

規模:1.54×1.08m 深さ0.45m

覆土:黒褐色土

出土遺物:土師器鉢

所見:調査区東部南側で検出した土坑である。SB2P1と接し、ST2を切る。SD1に切られているため形状等は不明である。所属時期は出土遺物からして古墳時代前期初頭と考えられる。

出土遺物(第23図No.1)

No.1は土師器の小型鉢である。口縁は短く屈曲し、内外面ハケ、指頭を施す。古墳時代前期初頭のものか。

SK12

グリッド:C10-4-23 切り合い関係:SB4に切られる

時期:弥生時代後期後半 形状:- 主軸方向:-

規模:1.44×(0.92) m 深さ0.07m

覆土:黒褐色土

出土遺物:弥生土器細片

所見:調査区東端北側で検出した土坑である。古代のSB4P1に切られる。北側が調査区外に広がるため規模、形状等は不明である。弥生土器細片のみで掲載できる遺物は出土しなかった。所属時期

は弥生時代後期後半の可能性がある。

SK13

グリッド:C10-8-1他 切り合い関係:ST3を切る

時期:弥生時代後期後半 形状:楕円形 主軸方向:N-13° -W

規模:0.87×0.48m 深さ0.15m

覆土:黒褐色土

出土遺物:弥生土器細片

所見:調査区中央部で検出した楕円形の土坑である。ST3を切る。弥生土器細片のみで掲載できる遺物は出土しなかった。所属時期は弥生時代後期後半の可能性がある。

SK14

グリッド:C10-2-20 切り合い関係:SD1に切られる

時期:弥生時代後期後半 形状:- 主軸方向:-

規模:(0.56)×(0.30) m 深さ0.48m

覆土:黒褐色土

出土遺物:弥生土器細片

所見:調査区中央部西寄りで検出した土坑である。SD1に切られ、SB5P7との切り合いがあるため形状等は不明である。弥生土器細片のみで掲載できる遺物は出土しなかった。所属時期は弥生時代後期後半の可能性がある。

SK15

グリッド:C10-2-20 切り合い関係:なし

時期:弥生時代後期後半 形状:- 断面形態:皿状 主軸方向:-

規模:(2.36)×(0.52) m 深さ0.41m

覆土:黒褐色土

出土遺物:弥生土器細片

所見:調査区西部北端で検出した土坑である。北側が調査区外に広がるため規模等は不明である。SB3P3に隣接している。弥生土器細片のみで掲載できる遺物は出土しなかった。所属時期は弥生時代後期後半の可能性がある。

SK16

グリッド:C10-4-21 切り合い関係:なし

時期:弥生時代後期後半 形状:楕円形 主軸方向:N-65° -E

規模:1.06×0.54m 深さ0.10m

覆土:黒褐色土

出土遺物:弥生土器細片

所見:調査区東部で検出した楕円形の土坑である。SB2に隣接している。弥生土器細片のみで掲載

できる遺物は出土しなかった。所属時期は弥生時代後期後半の可能性はある。

SK17 (第23図)

グリッド;C10-2-18他 切り合い関係;なし

時期;弥生時代後期後半 形状;- 主軸方向;-

規模;(0.94)×(0.30) m 深さ-

覆土;-

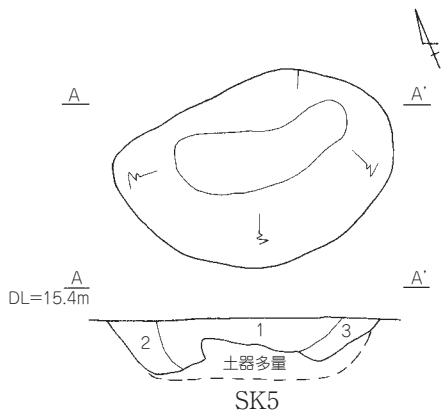
出土遺物;弥生土器鉢

所見;調査区西端部北側で検出した土坑である。他の遺構に切られているため形状等は不明である。

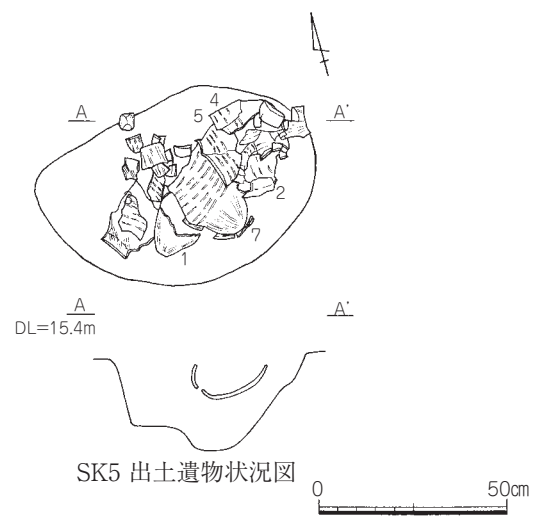
所属時期は出土遺物からして弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物(第23図No.1)

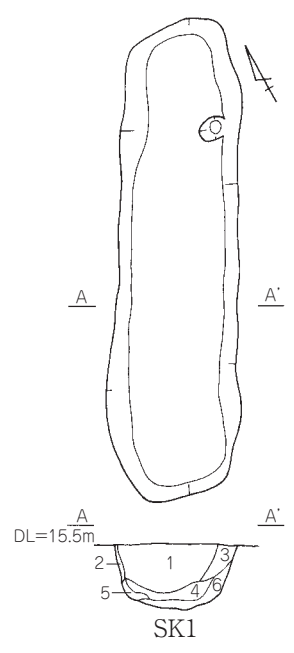
No.1 は鉢で口縁が直線的に開く。外面はタタキか、内面は口縁部がヨコハケで下半がミガキである。弥生時代後期後半か。



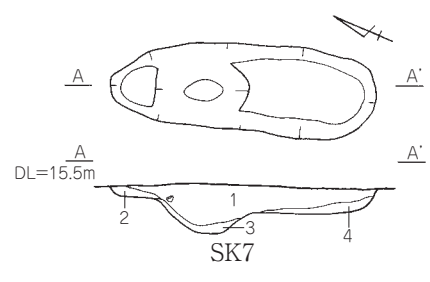
- 1 黒色土
- 2 褐色土 やや灰色
- 3 暗褐色土



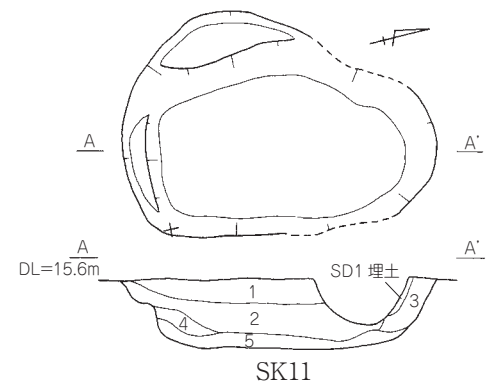
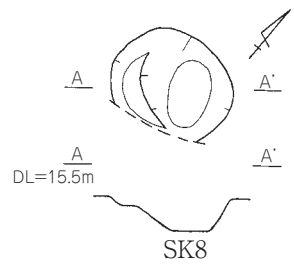
SK5 出土遺物状況図



- 1 黒色土 小ブロック混入
- 2 褐色土
- 3 黒褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 褐色土
- 6 黄褐色土

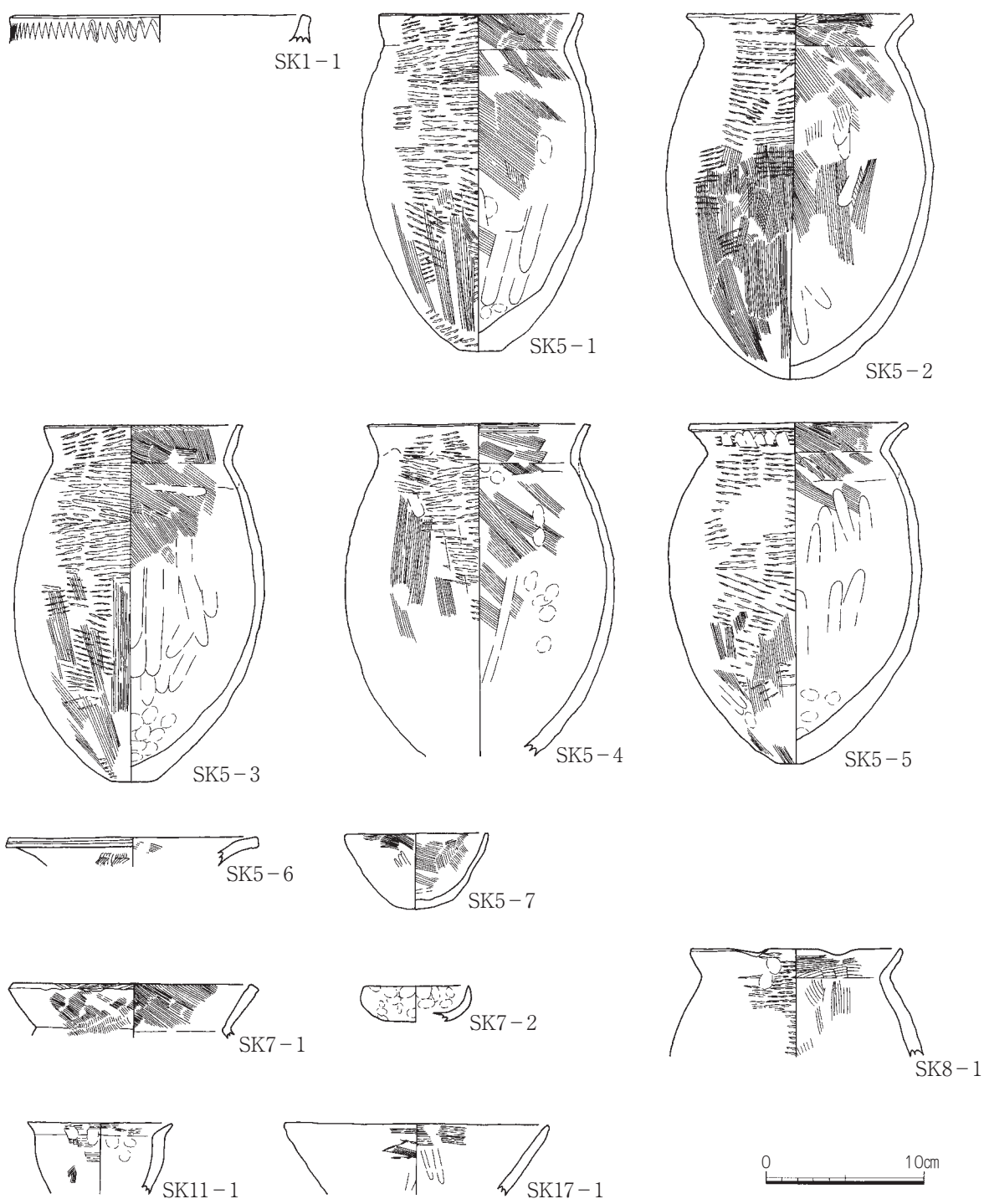


- 1 黒色土
- 2 褐色土
- 3 暗褐色土 黄褐色粘質土ブロック混入
- 4 褐色土 やや黄色



- 1 黒褐色粘土質シルト
- 2 黒褐色粘土質シルト 遺物若干含む
- 3 黒褐色粘土質シルト
- 4 黒色粘土質シルト
- 5 黒褐色粘土質シルト 粘性強い

第22図 IX区土坑遺構図



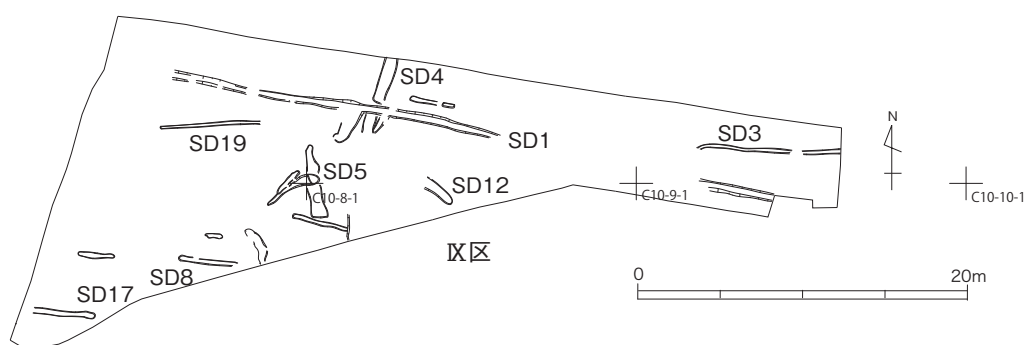
第 23 图 Ⅹ区土坑出土遗物实测图

第5節 溝状遺構

溝状遺構は22条検出している。調査区を東西に横切るものがSD1で大部分の遺構を切っている。東端では近世のSD2と重なり合い、古代から近世まで境として機能していたものと考えられる。それ以外のものについてはSD4、5、7、16が比較的幅が広いものでSD4はX区SD1と繋がる可能性がある。時期は弥生時代後期後半から終末のものがSD16、21、22、古代のものは幅の広いSD1、4、5、7と考えられる。他のものについては時期は特定できない。また南西隅の短いものについては畝状遺構の可能性もある。

第4表 Ⅹ区溝状遺構一覧表

SD番号	グリッド	時期	断面形態	主軸方向	規模 長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	遺物	切り合い
SD1	C10-2-18他	古代?	U字、皿状	N-78°-W	(40.8)	0.44 ~ 0.66	0.09 ~ 0.28	須恵坏蓋	ST1・2・4、SB1・3・5、SK11・14切る、SD2切られる
SD2	C10-9-1他	近世	皿状	N-82°-W	(6.74)	0.62 ~ 0.66	0.03 ~ 0.08	陶磁器	SD1切る
SD3	C10-4-22他	古代?	皿状	N-86°-W	(10.72)	0.18 ~ 0.32	0.05 ~ 0.13	弥生細片	ST1切る
SD4	C10-3-17他	古代?	皿状	N-9°-E	(10.76)	0.55 ~ 0.88	0.11 ~ 0.25	弥生細片	ST3、SD9・13切る、SD1切られる
SD5	C10-3-21他	古代?	皿状	N-8°-W	(5.86)	0.48 ~ 0.8	0.06 ~ 0.12	弥生細片	SD6・13切られる
SD6	C10-7-5	不明	皿状	N-54°-E	2.9	0.27 ~ 0.5	0.04 ~ 0.12	弥生細片	SD5切る、SD10切られる
SD7	C10-7-10他	古代?	皿状	N-14°-W	(1.84)	0.44 ~ 0.7	0.05 ~ 0.08	須恵壺	
SD8	C10-7-9	不明	皿状	N-83°-W	(3.38)	0.3	0.06	弥生細片	SK6切られる
SD9	C10-3-22他	古代?	皿状	N-82°-W	(3.16)	0.24 ~ 0.3	0.05 ~ 0.11	弥生細片	ST3切る、SD4切られる
SD10	C10-7-5	不明	皿状	N-46°-E	1.93	0.28 ~ 0.33	0.13	弥生細片	SD6切る
SD11	C10-7-10他	不明	皿状	N-78°-W	(0.88)	0.26 ~ 0.35	0.06	弥生細片	
SD12	C10-8-2他	不明	皿状	N-53°-W	2.76	0.6	0.11	弥生細片	ST3、SK3切る
SD13	C10-8-1他	古代?	皿状	N-76°-W	(3.48)	0.25 ~ 0.3	0.07	弥生細片	SD5切る、SD4切られる
SD14	C10-3-22他	不明	皿状	N-41°-W	1.31	0.4	0.07	弥生細片	ST3切る
SD15	C10-7-10	不明	皿状	N-14°-W	(0.52)	0.4	0.1	弥生細片	
SD16	C10-7-7他	弥生後期	皿状	N-16°-E	(5.33)	1.26 ~ 1.32	0.15 ~ 0.23	弥生甕、支脚	SD17・18切られる
SD17	C10-7-12他	古代?	皿状	N-84°-W	(4.4)	0.32	0.05	弥生細片	SD16切る
SD18	C10-7-7他	古代?	皿状	N-83°-W	(3.04)	0.32	0.04	弥生細片	SD16切る
SD19	C10-2-24他	古代?	皿状	N-87°-E	6.35	0.14 ~ 0.25	0.04 ~ 0.07	弥生細片	
SD20	C10-2-14他	古代?	皿状	N-89°-E	(2.94)	0.3	0.04	弥生細片	
SD21	C10-3-21他	弥生末	皿状	N-33°-E	3.84	0.5 ~ 0.8	0.07 ~ 0.11	弥生細片	SD1、SB3切られる
SD22	C10-3-25	弥生末	皿状	N-43°-E	2.52	0.37 ~ 0.42	0.05 ~ 0.23	弥生甕	ST1切る、SB2切られる



第24図 Ⅹ区SD・SU全体配置図

SD1 (第25、26図)

グリッド;C10-2-18他 切り合い関係;ST1・2・4、SB1・3・5、SK11・14を切る、SD2に切られる

時期;古代? 主軸方向;N-78° -W

規模;長さ(40.80) m×幅0.44～0.66m 深さ0.09～0.28m 断面形状;U字、皿状

覆土;黒色土

出土遺物;須恵器坏蓋

所見;調査区の北西から東部で検出した東西に延びる溝である。ST1、ST2、ST4の住居跡、SB1P1、SB3P7・P12、SB5P2・P7の掘立柱建物跡、SK11、SK14の土坑などを切り、SD2に切られる。東西の端が調査区外に広がるため全容は不明である。床面標高は東が高く、西端部と東端部とでは約40cmの差がある。所属時期は出土遺物からして7C後半と考えられる。

出土遺物(第26図No.1、2)

No.1は須恵器坏蓋である。小さなかえりが内側に付く。7C後半のものである。2は須恵器甕底部破片である。底部は平底で体部は直線的に開く。外面は平行タタキ、内面はナデである。他に弥生土器の細片が混入していた。

SD2

グリッド;C10-9-1他 切り合い関係;SD1を切る

時期;近世 主軸方向;N-82° -W

規模;長さ(6.74) m×幅0.62～0.66m 深さ0.03～0.08m 断面形状;皿状

覆土;灰褐色土

出土遺物;陶磁器

所見;調査区東部で検出した東西溝である。古代のSD1の上部に重なるように同一方向に構築されている。東側が調査区外に広がるため全容は不明である。所属時期は近世である。陶磁器の細片が出土している。

SD3

グリッド;C10-4-22他 切り合い関係;ST1を切る

時期;古代? 主軸方向;N-86° -W

規模;長さ(10.72) m×幅0.18～0.32m 深さ0.05～0.13m 断面形状;皿状

覆土;黒褐色土

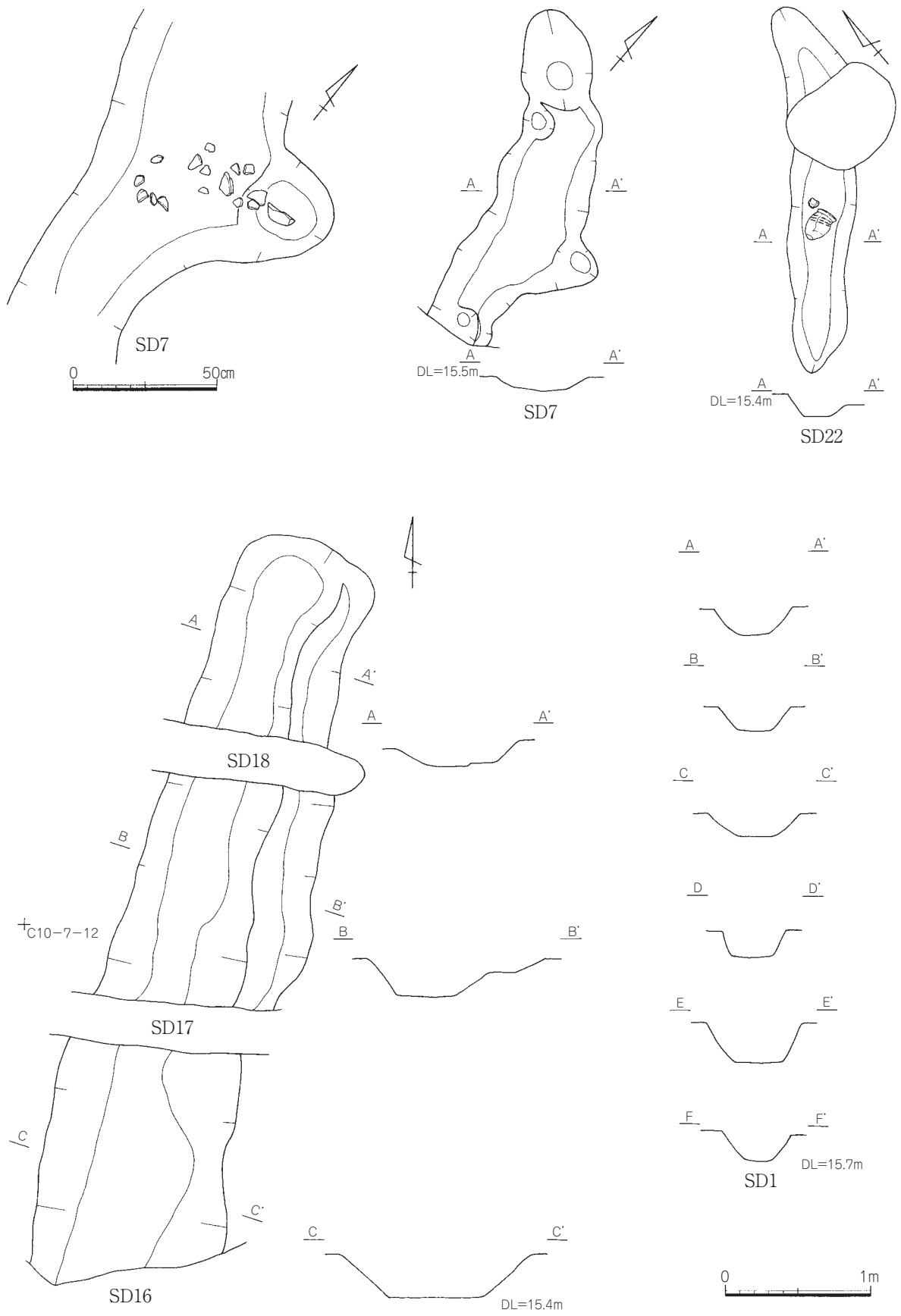
出土遺物;弥生土器細片

所見;調査区東部で検出した東西溝である。ST1を切り、西部分は南方向に屈曲している。東側が調査区外に広がるため全容は不明である。弥生土器細片のみで掲載できる遺物は出土しなかった。所属時期は古代の可能性はある。

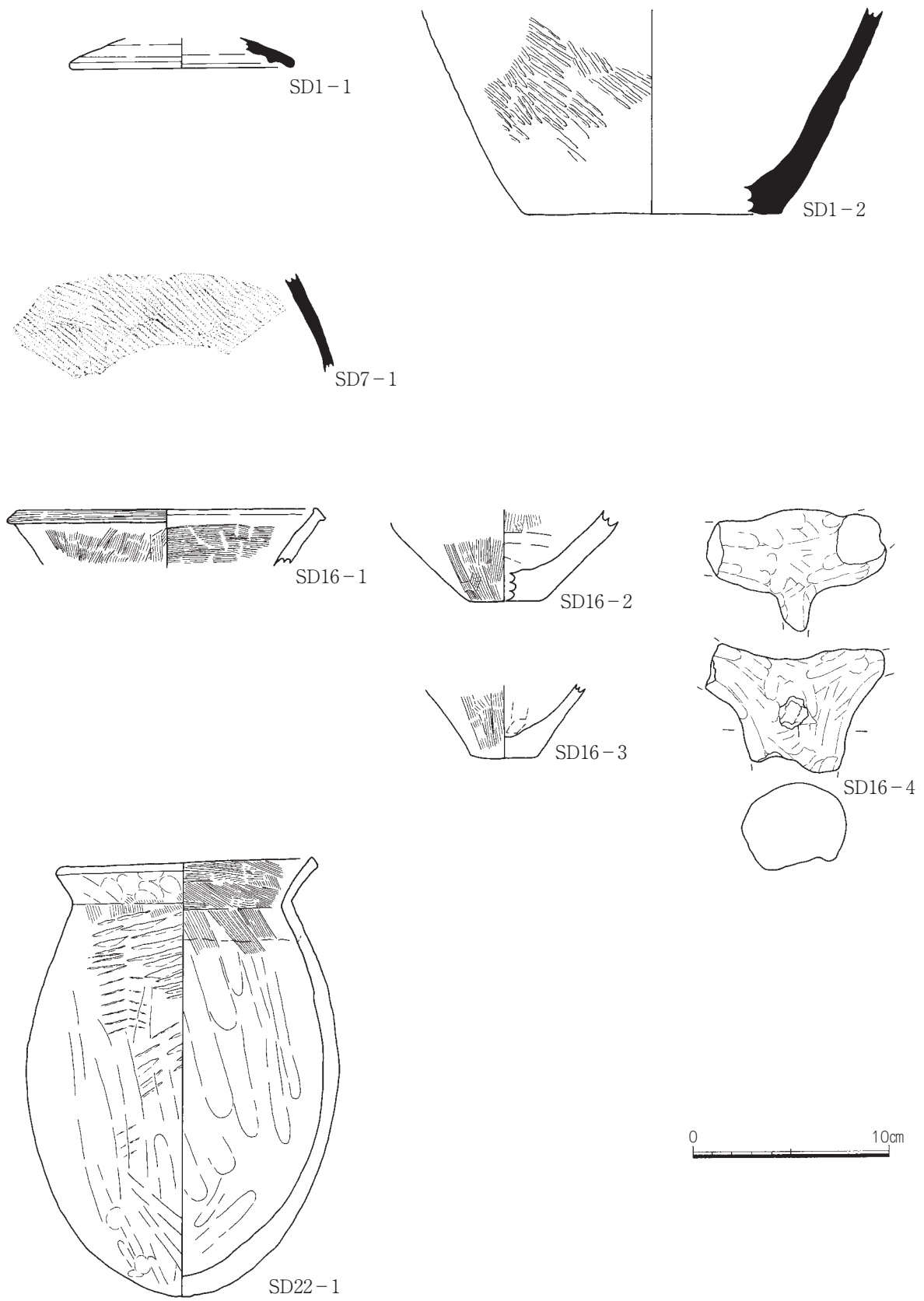
SD4

グリッド;C10-3-17他 切り合い関係;ST3、SD9・13を切る、SD1に切られる

時期;古代? 主軸方向;N-9° -E



第 25 图 IX区沟状遗構図



第 26 图 IX区溝状遺構出土遺物実測図

規模:長さ(10.76) m×幅0.55～0.88m 深さ0.11～0.25m 断面形状:皿状

覆土:黒褐色土

出土遺物:弥生土器細片

所見:調査区の中央部で検出した南北溝である。ST3、SD9、SD13を切り、SD1に切られる。弥生土器細片のみで掲載できる遺物は出土しなかった。所属時期は古代のSD1に切られており、また弥生のST3を切っているところから古代と考えられる。また北側のX区SD1と同一遺構の可能性があり、連結すると考えられる。

SD5

グリッド:C10-3-21他 切り合い関係:SD6・13に切られる

時期:古代? 主軸方向:N-8°-W

規模:長さ(5.86) m×幅0.48～0.80m 深さ0.06～0.12 m 断面形状:皿状

覆土:黒褐色土

出土遺物:弥生土器細片

所見:調査区中央部西寄りから南端まで検出した南北溝である。SD6、SD13に切られる。南側が調査区外に広がるため全容は不明である。弥生土器細片のみで掲載できる遺物は出土しなかった。所属時期は判然としないが形状、規模からして古代の可能性はある。

SD6

グリッド:C10-7-5 切り合い関係:SD5を切る、SD10に切られる

時期:不明 主軸方向:N-54°-E

規模:長さ2.90m×幅0.27～0.50m 深さ0.04～0.12m 断面形状:皿状

覆土:黒褐色土

出土遺物:弥生土器細片

所見:調査区中央部西寄りで検出した北東溝である。SD5を切り、SD6と平行して検出されたSD10に切られる。C10-7-5P4など柱穴3基に切られる。北部は東方向にやや曲がるとともに幅が広がる。弥生土器細片のみで掲載できる遺物は出土しなかった。所属時期は判然としない。

SD7 (第25、26図)

グリッド:C10-7-10他 切り合い関係:不明

時期:古代? 主軸方向:N-14°-W

規模:長さ(1.84) m×幅0.44～0.70m 深さ0.05～0.08m 断面形状:皿状

覆土:黒褐色土

出土遺物:須恵器壺

所見:調査区西部南端で検出した南北溝である。西側のSD15、東側のSD11と隣接する。C10-7-5P1など柱穴4基と切り合うが先後関係は不明である。南側が調査区外に広がるため全容は不明である。所属時期は出土遺物からして古代と考えられる。

出土遺物(第26図No.1)

No.1 は須恵器壺の胴部破片である。外面は平行タタキで自然釉がかかる。内面はナデである。器肉がやや薄い。

SD8

グリッド;C10-7-9 切り合い関係;SK6に切られる

時期;不明 主軸方向;N-83° -W

規模;長さ(3.38) m × 幅0.30m 深さ0.06m 断面形状;皿状

覆土;黒褐色土

出土遺物;弥生土器細片

所見;調査区西部南端で検出した東西溝である。SK6に切られる。SD8の西側には主軸方向と深さがほぼ同じ溝跡をいくつか検出しており、それらとともに畝状遺構を構成している可能性がある。東側が調査区外に広がるため全容は不明である。弥生土器細片のみで掲載できる遺物は出土しなかった。所属時期は判然としないが、古代の畝状遺構の可能性がある。

SD9

グリッド;C10-3-22他 切り合い関係;ST3を切る、SD4に切られる

時期;古代? 主軸方向;N-82° -W

規模;長さ(3.16) m × 幅0.24 ~ 0.30m 深さ0.05 ~ 0.11m 断面形状;皿状

覆土;黒褐色土

出土遺物;弥生土器細片

所見;調査区中央部で検出した東西溝である。ST3を切り、SD4に切られる。東端がSD14に隣接する。東部は南方向にやや曲がる。形態からは畝状遺構と考えられる。弥生土器細片のみで掲載できる遺物は出土しなかった。所属時期は古代の可能性のあるSD4に切れ、また弥生のST3を切っているところから、古代と考えられる。

SD10

グリッド;C10-7-5 切り合い関係;SD6を切る

時期;不明 主軸方向;N-46° -E

規模;長さ1.93m × 幅0.28 ~ 0.33m 深さ0.13m 断面形状;皿状

覆土;-

出土遺物;弥生土器細片

所見;調査区中央部西寄り検出した北東溝である。平行して検出したSD6を切る。弥生土器細片のみで掲載できる遺物は出土しなかった。所属時期は判然としない。

SD11

グリッド;C10-7-10他 切り合い関係;なし

時期;不明 主軸方向;N-78° -W

規模;長さ(0.88) m × 幅0.26 ~ 0.35m 深さ0.06m 断面形状;皿状

覆土:黒褐色土

出土遺物:弥生土器細片

所見:調査区西部南端で検出した東西溝である。西側のSD7と隣接する。南側が調査区外に広がるため全容は不明である。弥生土器細片のみで掲載できる遺物は出土しなかった。所属時期は判然としない。

SD12

グリッド:C10-8-2他 切り合い関係:ST3、SK3を切る

時期:不明 主軸方向:N-53° -W

規模:長さ2.76m×幅0.60m 深さ0.11m 断面形状:皿状

覆土:黒褐色土

出土遺物:弥生土器細片

所見:調査区中央南部で検出した北西溝である。ST3、SK3を切る。SD14の南側に隣接している。弥生土器細片のみで掲載できる遺物は出土しなかった。所属時期は判然としない。

SD13

グリッド:C10-8-1他 切り合い関係:SD5を切る、SD4に切られる

時期:古代? 主軸方向:N-76° -W

規模:長さ(3.48) m×幅0.25～0.30m 深さ0.07m 断面形状:皿状

覆土:黒褐色土

出土遺物:弥生土器細片

所見:調査区中央部西寄り南側で検出した東西溝である。南北溝のSD5を切り、SD4に切られる。形態からは畝状遺構と考えられる。弥生土器細片のみで掲載できる遺物は出土しなかった。所属時期は判然としないが、古代の畝状遺構の一部の可能性はある。

SD14

グリッド:C10-3-22他 切り合い関係:ST3を切る

時期:不明 主軸方向:N-41° -W

規模:長さ1.31m×幅0.40m 深さ0.07m 断面形状:皿状

覆土:黒褐色土

出土遺物:弥生土器細片

所見:調査区中央部で検出した北西溝である。SD9の東端に隣接する。ST3を切る。弥生土器細片のみで掲載できる遺物は出土しなかった。所属時期は判然としない。

SD15

グリッド:C10-7-10 切り合い関係:不明

時期:不明 主軸方向:N-14° -W

規模:長さ(0.52) m×幅0.40m 深さ0.10m 断面形状:皿状

覆土:黒褐色土

出土遺物:弥生土器細片

所見:調査区西部南端で検出した南北溝である。東側のSD7と隣接する。柱穴1基と切り合うが先後関係は不明である。南側が調査区外に広がるため全容は不明である。弥生土器細片のみで掲載できる遺物は出土しなかった。所属時期は判然としない。

SD16 (第25、26図)

グリッド:C10-7-7他 切り合い関係:SD17・18に切られる

時期:弥生時代後期 主軸方向:N-16° -E

規模:長さ(5.33) m×幅1.26～1.32m 深さ0.15～0.23m 断面形状:皿状

覆土:黒色土

出土遺物:弥生土器甕、支脚

所見:調査区南西部で検出した南北溝である。SD17、SD18に切られる。南側が調査区外に広がるため全容は不明である。所属時期は出土遺物からして弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物(第26図No.1～4)

No.1から3は弥生土器甕である。1は口縁部破片で口縁は強く屈曲する。内外面ハケを施す。2、3は底部破片で径3cm強の平底である。外面はハケ、内面はナデ整形である。4は土製支脚で受部突起を3個有する。内1つは小さい。整形はタタキを僅かに残す他はナデ整形である。

SD17

グリッド:C10-7-12他 切り合い関係:SD16を切る

時期:古代? 主軸方向:N-84° -W

規模:長さ(4.40) m×幅0.32m 深さ0.05m 断面形状:皿状

覆土:黒褐色土

出土遺物:弥生土器細片

所見:調査区南西部で検出した東西溝である。SD18と隣接し、SD16を切る。SD17の周辺には主軸方向と深さがほぼ同じ溝跡がいくつか検出されており、それらとともに畝状遺構を構成していると推測する。西側が調査区外に広がるため全容は不明である。弥生土器細片のみで掲載できる遺物は出土しなかった。所属時期は判然としないが、古代の畝状遺構の一部の可能性はある。

SD18

グリッド:C10-7-7他 切り合い関係:SD16を切る

時期:古代? 主軸方向:N-83° -W

規模:長さ(3.04) m×幅0.32m 深さ0.04m 断面形状:皿状

覆土:黒褐色土

出土遺物:弥生土器細片

所見:調査区南西部で検出した東西溝である。SD17と隣接し、SD16を切る。SD18の周辺には主軸方向と深さが同じ溝跡がいくつか検出されており、それらとともに畝状遺構を構成していると考え

られる。西側が調査区外に広がるため全容は不明である。弥生土器細片のみで掲載できる遺物は出土しなかった。所属時期は判然としないが、古代の畝状遺構の一部の可能性はある。

SD19

グリッド:C10-2-24他 切り合い関係:なし

時期:古代? 主軸方向:N-87° -E

規模:長さ6.35m×幅0.14～0.25m 深さ0.04～0.07m 断面形状:皿状

覆土:黒褐色土

出土遺物:弥生土器細片

所見:調査区西側のほぼ中央部で検出した東西溝である。SB5と重なっているが建物に付属するものではないと考えられる。形態からは畝状遺構と考えられる。弥生土器細片のみで掲載できる遺物は出土しなかった。所属時期は判然としないが、古代の畝状遺構の一部の可能性はある。

SD20

グリッド:C10-2-14他 切り合い関係:なし

時期:古代? 主軸方向:N-89° -E

規模:長さ(2.94) m×幅0.30m 深さ0.04m 断面形状:皿状

覆土:黒褐色土

出土遺物:弥生土器細片

所見:調査区北西部で検出した東西溝である。北東側の一部が調査区外に広がる。形態からは畝状遺構と考えられる。弥生土器細片のみで掲載できる遺物は出土しなかった。所属時期は判然としないが、古代の畝状遺構の一部の可能性はある。

SD21

グリッド:C10-3-21他 切り合い関係:SD1、SB3に切られる

時期:弥生時代後期終末 主軸方向:N-33° -E

規模:長さ3.84m×幅0.50～0.80m 深さ0.07～0.11m 断面形状:皿状

覆土:黒褐色土

出土遺物:弥生土器細片

所見:調査区中央部西寄りで検出した北東溝である。東西溝のSD1とSB3P7に切られる。弥生土器細片のみで掲載できる遺物は出土しなかった。所属時期は弥生時代後期終末の可能性はある。

SD22 (第25、26図)

グリッド:C10-3-25 切り合い関係:ST1を切る、SB2に切られる

時期:弥生時代後期終末 主軸方向:N-43° -E

規模:長さ2.52m×幅0.37～0.42m 深さ0.05～0.23m 断面形状:皿状

覆土:黒褐色土

出土遺物:弥生土器甕

所見;調査区東部で検出した北東溝である。SD1の北側に接し、ST1を切り、SB2P3に切られている。所属時期は出土遺物からして弥生時代後期終末と考えられる。

出土遺物(第26図No.1)

No.1は弥生土器の小型甕でほぼ完形品である。口縁は外傾し、胴部中央に最大径15.8 cmがあるものの、やや下膨れ状である。底部はほぼ丸底である。整形は口縁外面がナデ、頸部はハケ、胴部上半はタタキで下半がナデ整形である。内面は口縁及び頸部がハケで下半はナデ整形である。弥生時代後期終末と考えられる。

第6節 柱穴跡

Ⅹ区で検出した柱穴跡は約120基を数える。柱穴跡の分布は中央より西側で多く検出している。C10-2-23・24グリッドではある程度の並びのある柱穴跡を検出しているものの、掘立柱建物跡に認定できなかった。それ以外のものについては単発のものが多く、柵列等は検出できていない。柱穴跡の覆土は大きく分けて、黒色土、黒褐色土、褐色土に分類することができた。しかしながら覆土の違いにより時期差は把握できなかった。遺物は弥生土器細片が混入するものがほとんどで、遺物により時期決定をできたものは極めて少ない。時期は大きく分けて弥生時代後期後半、古代の2時期である。

重要なものについてのみ取り上げる。

第5表 Ⅹ区柱穴跡一覧表

P番号	時期	形状	規模(m)	規模(m)	深さ(m)	遺物	切り合い
C10-2-25P15	弥生後期後半	円形	径0.44		0.1	有り	
C10-2-25P16	古代	円形	径0.38		0.42	有り	
C10-3-22P1	弥生後期後半	円形	径0.60	0.44	0.42	有り	SD1切られる
C10-7-2P5	古代	不明	径(0.24)	(0.16)	0.13	有り	
C10-7-11P1	弥生後期後半	不明	径0.40	0.35	0.14	有り	SD17切られる
C10-9-1P2	古代	円形	径0.25		0.14	有り	ST1切る

C10-2-25P15 (第27、28図)

グリッド:C10-2-25 切り合い関係:なし

時期:弥生時代後期後半 形状:円形

規模:径0.44m × 深さ0.10m

覆土:黒色土

出土遺物:弥生土器鉢

所見:調査区中央部西寄りで検出した柱穴である。C10-2-25P16の西側に隣接する。所属時期は出土遺物からして弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物(第28図No.1)

No.1は弥生土器鉢で口径13.8cmを測る。口縁はやや開き、整形は外面がタタキ、ナデ、内面はハケ、ナデである。弥生時代後期後半と考えられる。

C10-2-25P16 (第27、28図)

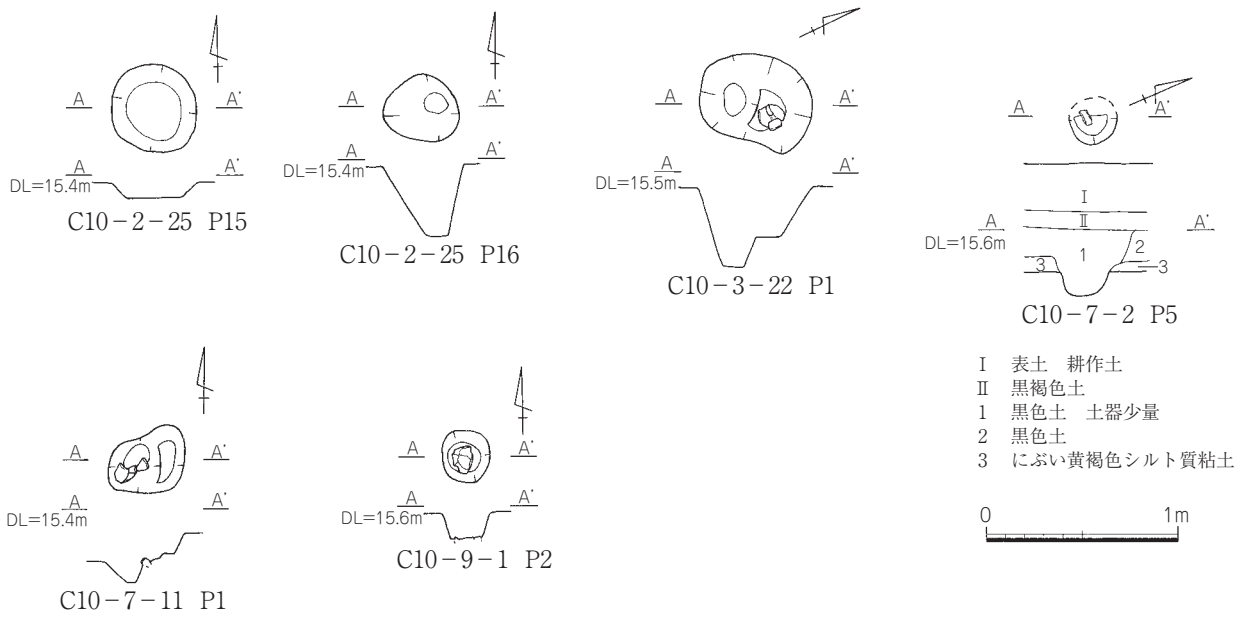
グリッド:C10-2-25 切り合い関係:なし

時期:古代 形状:円形

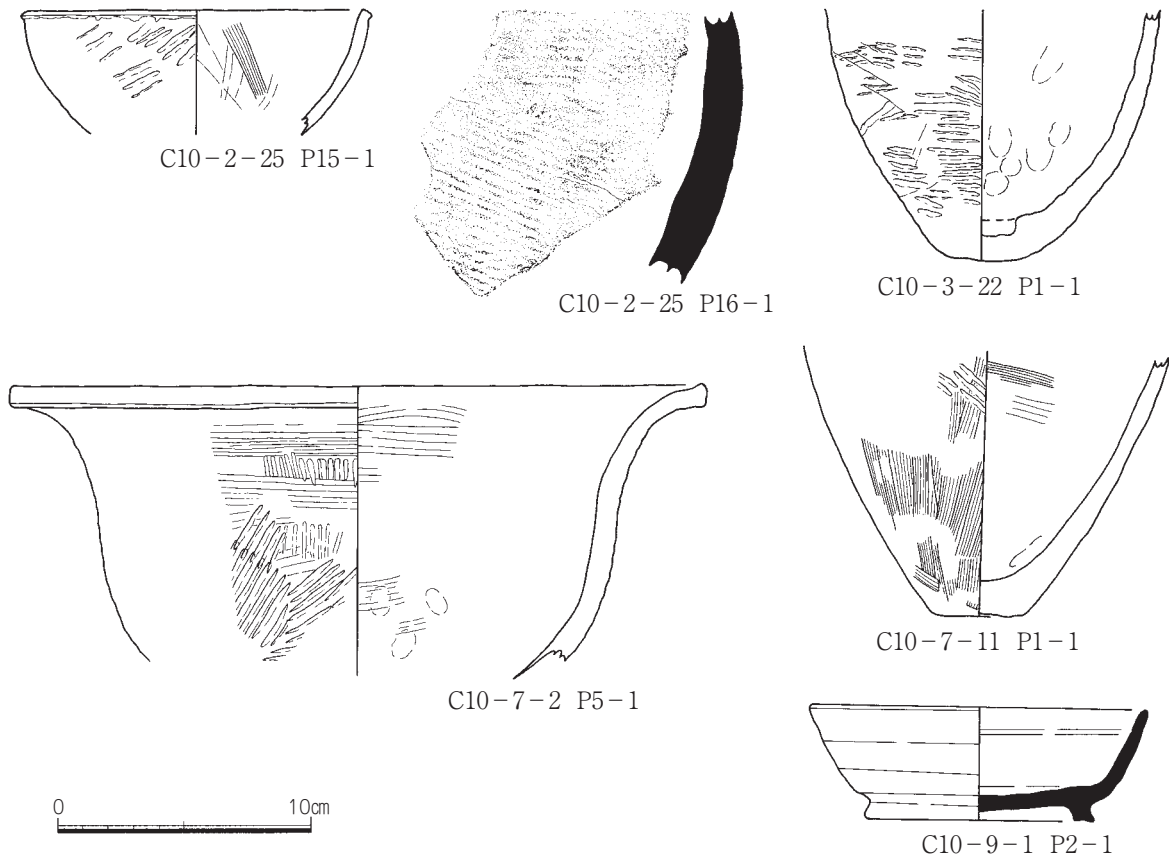
規模:径0.38m × 深さ0.42m

覆土:-

出土遺物:須恵器甕



第 27 図 IX区柱穴跡遺構図



第 28 図 IX区柱穴跡出土遺物実測図

所見：調査区中央部西寄り中央で検出した柱穴である。C10-2-25P15の東側に隣接する。所属時期は出土遺物からして古代と考えられる。

出土遺物(第28図No.1)

No.1は須恵器甕の胴部破片である。器肉が厚く1.5cmを測る。整形は外面が平行タタキ、内面がナデである。時期は小期は不明であるが古代と考えられる。

C10-3-22P1 (第27、28図)

グリッド:C10-3-22 切り合い関係:SD1に切られる

時期:弥生時代後期後半 形状:円形

規模:径0.60m×0.44m×深さ0.42m

覆土:黒色土

出土遺物:弥生土器甕

所見：調査区中央部で検出した柱穴である。SD1と切り合うが先後関係は不明である。所属時期は出土遺物からして弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物(第28図No.1)

No.1は長胴の小型甕、小さな平底で径2.7cmを測る。体部は余り開かない。整形は外面がタタキ、内面がナデである。弥生時代後期後半と考えられる。

C10-7-2P5 (第27、28図)

グリッド:C10-7-2 切り合い関係:なし

時期:古代 形状:- 断面形態:皿状

規模:径(0.24)m×(0.16)m×深さ0.13m

覆土:黒色土

出土遺物:土師器甕

所見:調査区西端部中央で検出した柱穴である。西側が調査区外に広がるため規模等は不明である。所属時期は出土遺物からして10C代と考えられる。

出土遺物(第28図No.1)

No.1は土師器甕である。口縁は緩やかに外反し、口唇は平坦で上端を僅かにつまみ上げる。最大径は口縁にある。胴部は緩やかに丸味を持つ。外面の整形は口頸部がヨコハケ、胴部にはタタキを顕著に残す。内面はハケである。胎土は砂粒、チャートを含む。古代10Cと考えられる。

C10-7-11P1 (第27、28図)

グリッド:C10-7-11 切り合い関係:SD17に切られる

時期:弥生時代後期後半 形状:-

規模:径0.40m×0.35m×深さ0.14m

覆土:黒褐色土

出土遺物:弥生土器甕

所見：調査区西端部南側で検出した柱穴である。SD17に切られる。所属時期は出土遺物からして弥

生時代後期後半と考えられる。

出土遺物(第28図No.1)

No.1は弥生土器甕の底部破片である。底部は小さく3.6cmを測る。体部は余り広がらず立ち上がる。整形は外面がタタキ、ハケ、内面がハケ、ナデである。弥生時代後期後半と考えられる。

C10-9-1P2 (第27、28図)

グリッド;C10-9-1 切り合い関係;ST1を切る

時期;8C前半 形状;円形

規模;径0.25m×深さ0.14m

覆土;黒褐色土

出土遺物;須恵器坏

所見;調査区東部南側で検出した柱穴である。ST1を切る。SD1の南側に隣接する。所属時期は出土遺物からして8C前半と考えられる。

出土遺物(第28図No.1)

No.1は須恵器坏身である。口径13.1cm、器高4.6cm、底径9cmを測る。断面四角の高台がやや「ハ」字状に付く。腰部は回転ヘラ切りである。体部は直線的にやや開く。内面底にややロクロ目を残す。胎土は破碎した白色角礫を少量含む。8C前半か。

第7節 包含層出土遺物

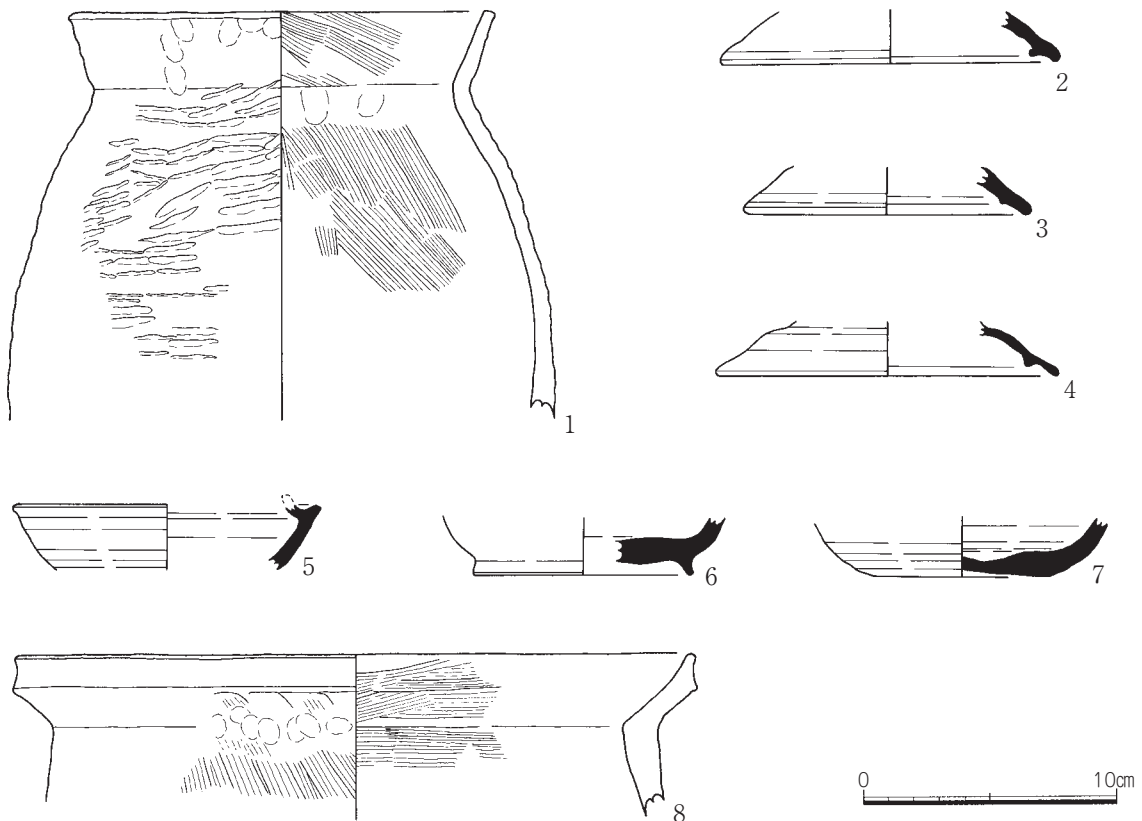
遺構外・包含層出土遺物(第29図No1～8)

No.1 から 8 は包含層、遺構内から出土しているものの明らかに混入品と考えられるものである。

No.1 は弥生土器甕である。口縁が僅かに開く長胴である。整形は外面口縁がナデ、胴部がタタキ、内面はハケである。弥生時代後期後半である。

2 から 7 は須恵器である。2 から 4 が坏蓋である。共に低いかえりが付き、7C後半と考えられる。5 は坏身である。受け部かえりが短く反る。7C前半と考えられる。6、7 は坏底部である。6 は断面丸味のある高台が底部端に付き、腰部は丸味を持つ。7 は底部がヘラ切りで腰部に丸味を持つ。内面底にロクロ目を残す。8Cから9Cか。

8 は土師器甕である。口縁は屈曲し、口唇端部をつまみ上げる。胴部は丸味を持たない。整形は外面が粗いハケ、内面もハケである。10Cのものか。



第29図 IX区包含層出土遺物実測図

第6表 IX区遺物観察表

図版番号	遺構名	遺物番号	種別	器種・部位	口径(cm)	器高	底径、重(g)	特徴	胎土、材質
第5図	ST1-中層	1	弥生土器	甕	(16)			口縁「く」字状に外傾、外面胴部タタキ、ハケ、内面ハケ	砂粒少量
第5図	ST1-中層	2	弥生土器	壺	(16)			口縁上下に拡張、外面櫛描波状文	砂粒少量
第5図	ST1-中層	3	弥生土器	壺	(25.9)			広口壺、口縁大きく開く、内外面ハケ	砂粒少量
第5図	ST1	4	弥生土器	壺	(24.9)			広口壺、口縁大きく開く、端部僅かに拡張、内外面ハケ	精良、砂粒微量
第5図	ST1-上層	5	弥生土器	鉢	(13.5)			体部僅かに丸味、外面タタキ、ナデ、内面ハケ、ナデ	精良、砂粒微量
第5図	ST1-中層	6	弥生土器	鉢	(15.3)			口縁僅かに内湾、口唇やや尖る、外面タタキ、ナデ、内面ナデ	砂粒少量
第5図	ST1-中層	7	弥生土器	鉢	(13.3)			口唇やや尖る、外面ナデ、内面粗いハケ	砂粒少量
第5図	ST1-上層	8	弥生土器	鉢	(15.8)			口縁僅かに内湾、口唇平坦、外面タタキ、粗いハケ、内面ハケ、ナデ	砂粒少量
第5図	ST1-SK2	9	弥生土器	鉢	(33.6)			大型、大きく開く、口唇平坦、外面タタキ、ナデ、内面ナデ	砂粒少量
第5図	ST1	10	弥生土器	甕・底部			0.8	甕底部？丸底、外面タタキ、内面ナデ	砂粒少量
第5図	ST1	11	弥生土器	甕・底部			(3)	甕底部？底部小さい平底、外面ハケ、内面ナデ	砂粒少量
第5図	ST1-上層	12	弥生土器	甕・底部			1.6	甕底部？やや丸底気味、外面底部タタキ、胴部ハケ、内面粗いハケ	砂粒少量
第5図	ST1-下層	13	弥生土器	鉢・底部			4.4	鉢平底、外面ナデ、内面ヘラケズリ	精良
第5図	ST1-上層	14	土製品	支脚・裾部			(11.0)	上部はすぼまり、裾はやや広がる、底面端部平坦、外面タタキ、内面ナデ、指頭	砂粒多量
第5図	ST1-No.1	15	土製品	支脚			径5.2、内径1.9	筒状、中空、外面タタキ、摩耗	砂粒少量
第5図	ST1-中層、上層	16	土製品	支脚			径5.2、内径1.8	筒状、中空、外面タタキ、ナデ	砂粒少量
第5図	ST1-No.1	17	石器	石包丁	長8.6 幅3.9 厚0.6		36.2g	表面礫皮、剥離面1次剥離、両端部僅かに抉入部作出、刃部、背部摩耗	砂岩
第5図	ST1-No.2	18	石器	砥石	長25.2 幅6.5 厚5.3		1638g	4面共に使用、1面は特に使用の為に中央部凹む	砂岩
第5図	ST1-上層	19	石器	叩石	長(6.6) 幅(5.7) 厚(2.9)		(138.7g)	破損、被熱、側縁部線状の敲打痕	砂岩
第5図	ST1	20	石器	磨石	長14.8 幅7.0 厚5.9		992g	杵状、先端部回りに朱附着	砂岩

図版番号	遺構名	遺物番号	種別	器種・部位	口径(cm)	器高	底径、重(g)	特徴	胎土、材質
第7図	ST2- No.2、10	1	弥生土器	鉢	(21.6)			口縁片口状になる、口縁外傾、外面タタキ、内面粗いハケ	砂粒微量
第7図	ST2-No.4	2	弥生土器	甕	(13.6)			口縁「く」字状に外傾、外面胴部タタキ、口縁ナデ、内面胴部指ナデ	砂粒少量
第7図	ST2-中層	3	弥生土器	甕	(15.9)			口縁外傾、口唇平坦、器肉やや薄い、外面タタキ、ナデ、内面ナデ	砂粒少量
第7図	ST2	4	弥生土器	壺				広口壺、口縁大きく開く、口唇平坦、外面ハケ、ナデ、内面ハケ	砂粒少量
第7図	ST2-No.6	5	弥生土器	鉢	(20.4)			直線的に外傾、口唇尖る、外面指頭、ナデ、内面ナデ、表面やや落剥	砂粒多量
第7図	ST2	6	弥生土器	鉢	(17.6)			僅かに内湾気味に開く、表面やや落剥、外面タタキ、ナデ、内面ハケ	砂粒少量
第7図	ST2-下層	7	弥生土器	鉢	(16.2)			僅かに内湾気味に開く、外面タタキ、ナデ、内面ハケ、ミガキ	砂粒少量
第7図	ST2-中層	8	弥生土器	鉢	9.6	3.3		小型、皿状、丸底、体部丸味、口縁外傾気味に立ち上がる、内外面指頭	砂粒少量
第7図	ST2- No.14	9	弥生土器	鉢	9.8	5.7	3.5	小型、平底、体部僅かに丸味、口縁直立気味、底部器肉厚い、外面タタキ、ナデ、内面指頭、ナデ	砂粒多量
第7図	ST2-No.8	10	弥生土器	鉢・底部			4.0	平底、体部やや丸味を持ち開く、やや落剥、摩耗、内外面ナデ	砂粒多量
第7図	ST2	11	弥生土器	鉢	(11.1)			小型、甕状、口縁外傾、外面タタキ、ハケ、ナデ、内面指ナデ、口縁内面ハケ	砂粒少量
第7図	ST2-中層	12	弥生土器	鉢	(9.5)	7.1		小型、甕状、丸底、体部下半丸味、口縁短く外傾、内外面指頭、ナデ	砂粒多量
第7図	ST2-Ⅲ層	13	弥生土器	高坏				大部分欠損、脚部接合充填、内外面ナデ	砂粒少量
第7図	ST2-下層	14	弥生土器	高坏・裾				裾部大きく開く、円形透かし孔、外面ミガキ、内面ハケ、ナデ	精良、砂粒微量
第7図	ST2-No.9	15	弥生土器	小壺	(5.2)	7.7	2	ミニチュア、甕形、丸底、体部長胴丸味、口縁外傾、外面体部タタキ、口縁ナデ、内面指ナデ	砂粒多量
第9図	ST3-No.2	1	弥生土器	甕	(21.4)	20.8	3.6	丸甕、口縁やや外傾、体部下半に丸味、丸底、外面タタキ、ナデ、内面口縁ハケ、内面ケズリ、ナデ	砂粒多量
第9図	ST3	2	弥生土器	甕	(22.3)			口縁外傾、外面タタキ、ハケ、内面ハケ	砂粒多量
第9図	ST3-下層	3	弥生土器	甕	(18.9)			やや小型、口縁外反、胴部張らず、外面タタキ、内面ハケ、ナデ、器肉やや薄い	砂粒少量
第9図	ST3-下層	4	弥生土器	甕	(17.4)			小型、口縁僅かに外傾、胴部張らず、外面タタキ、内面ハケ	砂粒微量
第9図	ST3	5	弥生土器	甕	(14.5)			小型、口縁僅か外反気味、胴部張らず、外面タタキ、内面ハケ	砂粒微量

図版番号	遺構名	遺物番号	種別	器種・部位	口径(cm)	器高	底径、重(g)	特徴	胎土、材質
第9図	ST3-上層	6	弥生土器	甕	(13)			小型、口縁短く僅か外傾、胴部張らず、外面タタキ、下半ハケ、内面ハケ	砂粒微量
第9図	ST3-No.7	7	弥生土器	壺	14.2	33.5		口縁直線的に開く、体部丸味、底部丸底、外面口縁ナデ、体部タタキ、下半ヘラケズリ、内面ナデ	砂粒多量
第9図	ST3-上層	8	弥生土器	壺	(22.4)			広口壺、口縁大きく開く、口縁端部僅かに受け口状になる、内外面ナデ	砂粒微量
第9図	ST3-SK1	9	弥生土器	壺	(16.8)			二重口縁か、口唇丸味、外面櫛描波状文、内面ナデ	砂粒微量
第9図	ST3-No.5、6	10	弥生土器	鉢	(28.4)	19.7		大型、口縁直立気味、一部片口状、体部丸味、丸底、外面上半タタキ、下半ハケ、ナデ、内面上半粗いハケ、下半ナデ	砂粒少量
第9図	ST3	11	弥生土器	鉢	(16.4)			体部やや丸味、外面タタキ、ナデ、内面粗いハケ、ナデ	砂粒少量
第9図	ST3-下層	12	弥生土器	鉢	(14)			体部やや丸味、外面タタキ、ナデ、内面粗いハケ、ナデ	砂粒微量
第9図	ST3-下層	13	弥生土器	鉢	(14.4)			口縁僅かに括れ、口唇やや尖る、内外面上半ハケ、下半ナデ	砂粒少量
第9図	ST3-上層	14	弥生土器	高坏				高坏脚部、裾部僅かに開く、外面ミガキ	砂粒少量
第9図	ST3	15	弥生土器	甕・底部				甕底部か、やや尖り気味の丸底、内外面ハケ	砂粒多量
第9図	ST3-上層	16	弥生土器	甕・底部			3.5	甕底部か、丸底、外面タタキ、ナデ、内面ナデ	砂粒多量
第9図	ST3-中層	17	弥生土器	鉢・底部			(5)	鉢底部か、平底、大きく開く、外面タタキ、内面ミガキ	砂粒微量
第9図	ST3-下層	18	弥生土器	鉢・底部			3.2	鉢底部か、小さな平底、外面タタキ、内面ハケ	砂粒微量
第9図	ST3-No.3	19	弥生土器	鉢・底部			3.8	鉢底部か、小さな平底、外面タタキ、内面ハケ、ナデ	砂粒微量
第9図	ST3-No.1	20	石器	叩石	長9.85 幅7.5 厚2.95		34.0g	扁平礫、中央部に敲打痕、側縁に線状の敲打痕、一先端部に朱付着	砂岩
第9図	ST3	21	石器	凹石	長12.5 幅11.2 厚(2.2)		365.1g	撥状の扁平礫、裏面は落剥する、表面中央部凹む	砂岩
第9図	ST3	22	石器	台石	長(40.4) 幅(21.2) 厚12.3		13500g	大礫、表面やや摩耗、僅かに被熱	砂岩
第11図	ST4-No.27、29、30	1	弥生土器	甕	20	34.2	4.4	長胴甕、ほぼ完形、口縁強く外傾、胴部中程に最大径24.6cm、丸底、外面口縁指頭、ナデ、胴部上半タタキ、下半タタキ、ハケ、内面粗いハケ	砂粒少量

図版番号	遺構名	遺物番号	種別	器種・部位	口径(cm)	器高	底径、重(g)	特徴	胎土、材質
第11図	ST4- No.26	2	弥生土器	甕	18.6	33.9	4.6	長胴甕、ほぼ完形、口縁僅かに外傾、胴部下半に最大径25.4cm、小さな平底、外面胴部上半タタキ、下半タタキ、ハケ、内面粗いハケ、ナデ	砂粒少量
第11図	ST4- No.27、29	3	弥生土器	甕	15.2	30.1	3.6	長胴甕、ほぼ完形、口縁僅かに外傾、胴部中程に最大径20.5cm、小さな平底、外面胴部上半タタキ、下半タタキ、ハケ、内面粗いハケ、ナデ	砂粒少量
第11図	ST4- No.28	4	弥生土器	甕	20.9	33.2	5	長胴甕、ほぼ完形、口縁緩く外傾、胴部中程に最大径26.2cm、僅かに平底、内外面ミガキ、ハケ、タタキ整形が認められない、体部下半に煤附着	砂粒微量
第11図	ST4- No.1、6	5	弥生土器	甕	(11.9)	18.4	(1.9)	口縁直線的に短く外傾、底部僅かに平底、外面上半タタキ、下半タタキ、ハケ、内面ハケ、ナデ	砂粒微量
第11図	ST4- No.30	6	弥生土器	甕	(13.5)	19.5	2.8	口縁僅かに外傾、胴部張らず、底部僅かに平底、外面上半ナデ、下半ハケ、内面ハケ	砂粒少量
第11図	ST4-SK2	7	弥生土器	甕	(21.6)			口縁緩やかに外傾、外面タタキ、ハケ、内面ハケ	砂粒微量
第12図	ST4-No.2	8	弥生土器	甕・底部			(3.2)	体部下半、小さな平底、外面タタキ、下半ハケ、ナデ、内面ナデ	砂粒少量
第12図	ST4- No.21	9	弥生土器	甕・底部			2	小型、長胴、僅かに平底、外面タタキ、ナデ、内面ハケ	砂粒少量
第12図	ST4- No.10、P1	10	弥生土器	甕・底部			2.4	小型、胴部やや張る、小さな平底、外面タタキ、ハケ、ナデ、内面指頭、ハケ	砂粒少量
第12図	ST4- No.22	11	弥生土器	甕・底部			(2.6)	小型、長胴、小さな平底、外面タタキ、内面ハケ、ナデ	砂粒少量
第12図	ST4	12	弥生土器	壺	(19)			広口壺、口縁拡張、口頸部開く、内外面ハケ	砂粒極微量
第12図	ST4	13	弥生土器	壺	(22.4)			広口壺、口縁下方に拡張、内外面ハケ	砂粒極微量
第12図	ST4- No.15	14	弥生土器	壺	(19.8)			広口壺、口縁拡張、内外面ハケ	砂粒微量
第12図	ST4	15	弥生土器	壺	(25.4)			広口壺、口縁下方に大きく拡張、口縁貝殻復縁刺突文、内外面ハケ	砂粒微量
第12図	ST4-下 層、中層	16	弥生土器	鉢	(25.4)	16	5.6	大型、口縁僅かに屈曲、体部下半すぼまる、底部平底気味、外面タタキ、ハケ、内面ナデ、ハケ	砂粒多量
第12図	ST4- No.19、23	17	弥生土器	鉢	(19.1)	8.2		やや大型、体部開く、底部尖底気味、外面タタキ、ナデ、内面ハケ、ナデ	砂粒少量
第12図	ST4-No.5	18	弥生土器	鉢	(15.8)	7.6		体部開く、丸底、内外面ハケ、ナデ	砂粒少量

図版番号	遺構名	遺物番号	種別	器種・部位	口径(cm)	器高	底径、重(g)	特徴	胎土、材質
第12図	ST4-SK3	19	弥生土器	鉢	(18.6)			体部開く、外面ハケ、内面落剥不明	砂粒少量
第12図	ST4-No.18	20	弥生土器	鉢	13.4	7.3		体部やや直立気味、口縁不平行、外面タタキ、下半ナデ、内面ハケ	砂粒多量
第12図	ST4-下層	21	弥生土器	鉢	(11.2)	6.2	(2.2)	体部やや開く、小さな尖った平底、外面タタキ、内面ハケ	砂粒少量
第12図	ST4-No.20	22	弥生土器	鉢	(11.8)	5	2.2	体部開く、小さな尖った平底、外面タタキ、ハケ、内面ハケ、ナデ	砂粒少量
第12図	ST4-中層、上層	23	弥生土器	鉢	10.6	5.9	2.2	小型、体部余り開かない、底部丸底気味、外面タタキ、ナデ、内面ハケ、ナデ	砂粒微量
第12図	ST4-No.32	24	弥生土器	鉢	11.4	8.3	3	小型、体部開かず、底部小さな平底、外面ナデ、内面ハケ	砂粒少量
第12図	ST4-No.32	25	弥生土器	鉢	10.5	7.2	3.4	小型、体部開かず、底部小さな平底、外面ナデ、内面ハケ	砂粒少量
第12図	ST4-No.14	26	弥生土器	鉢	(9.6)	6.2	2.2	小型、体部開かず、底部小さな平底、内外面ナデ	砂粒少量
第12図	ST4-No.3	27	弥生土器	鉢	(8.4)	5.9		小型、体部開かず、底部尖底気味、外面ハケ、ナデ、内面ハケ	砂粒微量
第12図	ST4-SK2、壁溝	28	弥生土器	鉢	(8)			小型、体部開かず口縁内外面ヨコハケ、内外面下半タテハケ	砂粒極微量
第12図	ST4-SK2	29	弥生土器	鉢	(16.2)			体部開く、外面タタキ顕著、内面ハケ、ナデ	砂粒微量
第12図	ST4-No.8	30	弥生土器	鉢・底部				鉢底部、丸底気味、外面ナデ、内面ハケ	砂粒微量
第13図	ST4-No.12	31	弥生土器	高坏	(25.6)			坏部、口縁大きく開く、下半屈曲、外面櫛描波状文、円形浮文の加飾、内面ハケ、ミガキ	砂粒微量
第13図	ST4-No.7	32	弥生土器	蓋				突起状の鈕? 外面ミガキ、内面ナデ	砂粒極微量
第13図	ST4-中層	33	土製品	支脚・裾部			(10.8)	脚部、中空、裾部緩やかに開く、外面指頭、ナデ	砂粒少量
第13図	ST4-中層	34	土製品	支脚・裾部			(8.6)	裾部、中空、やや開く、外面指頭、ナデ	砂粒少量
第13図	ST4-中層	35	土製品	支脚				脚部、中空、外面指頭、ナデ	砂粒少量
第13図	ST4-No.24	36	土製品	支脚				受部突起、指頭、ナデ	砂粒少量
第13図	ST4-No.1	37	石器	石包丁	長8.8 幅4.6 厚1.1		60.4g	打製石包丁、表面に自然面を残す、両端部挟入部を作出、背部、刃部細かい剥離、裏面大きく主要剥離面を残す	砂岩
第13図	ST4-No.7	38	石器	叩石	長11.6 幅6.5 厚2.8		336.1g	扁平な楕円礫、中央部、側縁に敲打痕、一端部に敲打痕顕著	砂岩

図版番号	遺構名	遺物番号	種別	器種・部位	口径(cm)	器高	底径、重(g)	特徴	胎土、材質
第13図	ST4-No.8	39	石器	叩石	長10.7 幅6.2 厚2.5		259.2g	扁平な楕円磔、両端部に敲打痕	砂岩
第13図	ST4-No.3	40	石器	叩石	長14.2 幅6.9 厚4.8		650g	一面に顕著な敲打痕	砂岩?
第21図	SB2-P1-No.1	1	須恵器	坏・底部			7.3	底部ヘラ切り、高台やや中程に「ハ」字状に付く、腰部やや丸味を持ち開く、内面底ロクロ目を残す	精良
第21図	SB2-P5	2	須恵器	長頸壺	(6.8)			頸部緩やかに外反、口唇やや丸味、素口縁	精良
第21図	SB2-P3-No.1	3	鉄製品	刀子	長(4.5) 幅(0.95) 厚(0.4)		2.8g	柄部か、断面三角形、先端部は欠損	鉄製
第21図	SB5-P6	1	弥生土器	鉢	(16.8)			口縁開く、外面タタキ、ハケ、内面ハケ、ミガキ	砂粒少量
第23図	SK1	1	弥生土器	壺	(19)			広口壺、口縁拡張、外面に鋸歯文、摩耗	砂粒微量
第23図	SK5-No.2、4	1	弥生土器	甕	12.5	21.3	2.6	小型、長胴甕、ほぼ完形、口縁僅かに外傾、胴部中央に最大径14.7cm、底部小さな平底、外面上半タタキ、下半ハケ、内面上半ハケ、下半ナデ	砂粒多量
第23図	SK5-No.2	2	弥生土器	甕	14.1	23	1.8	小型、長胴甕、ほぼ完形、口縁僅かに外傾、胴部中央に最大径16.8cm、底部小さな平底、外面上半タタキ、下半ハケ、内面上半ハケ、下半ナデ	砂粒多量
第23図	SK5-No.3、4	3	弥生土器	甕	12.2	22.5	2.9	小型、長胴甕、ほぼ完形、口縁僅かに外傾、胴部中央に最大径15.8cm、底部小さな平底、外面上半タタキ、下半ハケ、内面上半ハケ、下半ナデ	砂粒多量
第23図	SK5-No.1	4	弥生土器	甕	13.4			小型、長胴甕、半完形、口縁僅かに外傾、胴部中央最大径17cm、外面上半タタキ、下半ハケ、内面上半ハケ、下半ナデ	砂粒多量
第23図	SK5-No.1	5	弥生土器	甕	13.7	21.5	1.8	小型、長胴甕、ほぼ完形、口縁僅かに外傾、胴部中央最大径16.0cm、底部小さな平底、外面口縁タタキ後ナデ、胴部上半タタキ、下半ハケ、内面上半ハケ、下半ナデ	砂粒多量
第23図	SK5	6	弥生土器	壺	(16)			広口壺、口縁大きく開く、口唇平坦、内外面ハケ	砂粒微量
第23図	SK5-No.2	7	弥生土器	鉢	8.9	4.8	4	小型、ほぼ完形、体部開かず、底部丸味のある平底、外面ハケ、ナデ、内面ハケ	砂粒微量
第23図	SK7	1	土師器	甕	(15.1)			口縁外傾する、口唇平坦、内外面ハケ	砂粒少量
第23図	SK7	2	土師器	鉢	(6.6)			皿状、口縁短く、底部丸味、内外面指頭	砂粒少量

図版番号	遺構名	遺物番号	種別	器種・部位	口径(cm)	器高	底径、重(g)	特徴	胎土、材質
第23図	SK8	1	弥生土器	甕	(13.2)			小型、口縁短く外傾、外面タタキ、内面ハケ	砂粒少量
第23図	SK11	1	土師器	鉢	(9.2)			小型、口縁短く屈曲、内外面ハケ、指頭	砂粒少量
第23図	SK17	1	弥生土器	鉢	(16.6)			口縁直線的に開く、外面タタキ?、ナデ、内面ヨコハケ、ミガキ	砂粒少量
第26図	SD1-No.3	1	須恵器	蓋	11.2			小さなかえりが内側に付く	精良
第26図	SD1	2	須恵器	甕・底部			(13.2)	底部破片、平底、体部直線的に開く、外面平行タタキ、内面ナデ	砂粒少量
第26図	SD7	1	須恵器	壺・胴部				外面平行タタキ、自然釉がかかる、内面ナデ、器肉がやや薄い	精良
第26図	SD16	1	弥生土器	甕	(15.2)			口縁屈曲、内外面ハケ	砂粒微量
第26図	SD16	2	弥生土器	甕・底部			(3.6)	平底、体部開く、外面ハケ、内面ハケ、ナデ	砂粒多量
第26図	SD16-No.2	3	弥生土器	甕・底部			3.4	小さな平底、体部余り開かない、外面ハケ、内面ナデ、ヘラケズリ	砂粒少量
第26図	SD16-No.1	4	土製品	支脚				受部突起2個と小突起1個、タタキ極僅かに残る、ナデ	砂粒少量
第26図	SD22-No.1	1	弥生土器	甕	12.7	22.2	1.5	小型、長胴甕、ほぼ完形、口縁外傾、胴部中央最大径15.8cm、底部小さな丸底、外面口縁ナデ、頸部ハケ、胴部上半タタキ、下半ナデ、内面口縁ハケ、胴部下半ナデ	砂粒多量
第28図	C10-2-25-P15	1	弥生土器	鉢	(13.8)			口縁やや開く、外面タタキ、ナデ、内面ハケ、ナデ	砂粒少量
第28図	C10-2-25-P16	1	須恵器	甕				外面平行タタキ、内面ナデ、器肉厚い1.5cm	微砂粒少量
第28図	C10-3-22-P1	1	弥生土器	甕・底部			2.7	小型甕、小さな平底、体部は開かず、長胴、外面タタキ、内面ナデ	砂粒多量
第28図	C10-7-2-P5	1	土師器	甕	(27)			口縁緩やかに外反、口唇平坦、上端を僅かにつまみ上げる、最大径口縁、胴部緩やかに丸味を持つ、外面口頸部ヨコハケ、胴部タタキ、内面ハケ	砂粒多量
第28図	C10-7-11-P1	1	弥生土器	甕・底部			3.6	小さな平底、体部余り開かず立ち上がる、外面タタキ、ハケ、内面ハケ、ナデ	砂粒多量
第28図	C10-9-1-P2	1	須恵器	坏	13.1	4.6	9	断面四角高台がやや「ハ」字状に付く、腰部回転ヘラ切り、体部直線的にやや開く、内面底ややロクロ目を残す	破碎白色角礫少量
第29図	包含層-SD1	1	弥生土器	甕	(16)			口縁僅かに開く、長胴、外面口縁ナデ、胴部タタキ、内面ハケ	砂粒少量
第29図	包含層-ST1	2	須恵器	坏蓋	(13.2)			低いかえりが端部よりやや内側に付く	精良
第29図	包含層	3	須恵器	坏蓋	(9)			低いかえりが端部よりやや内側に付く	精良

図版番号	遺構名	遺物番号	種別	器種・部位	口径(cm)	器高	底径、重(g)	特徴	胎土、材質
第29図	包含層-Ⅲ層	4	須恵器	坏蓋	(13.4)			低い丸味のあるかえりが端部よりやや内側に付く	精良
第29図	包含層-Ⅲ層	5	須恵器	坏身	(12.2)			受部かえりが短く反る	精良
第29図	包含層-Ⅲ層	6	須恵器	坏・底部			(8.6)	断面丸味のある高台が底部端に付く、腰部は丸味	精良
第29図	包含層-表採	7	須恵器	坏・底部			(7)	底部へラ切り、腰部丸味、内面底ロクロ目	精良
第29図	包含層-C10-7-Ⅲ層	8	土師器	甕	(26.4)			口縁屈曲、口唇端部つまみ上げる、胴部丸味を持たない、外面粗いハケ、内面ハケ	微砂粒多量

第Ⅱ章 X区の調査成果

第1節 X区の概要

本調査区は今次調査区の東端部でⅩ区の北側に位置し、弥生時代から近世の遺構を検出している。弥生時代後期の集落跡については、本調査区がほぼ東限と考えられ、弥生時代竪穴建物跡2軒を検出している。竪穴建物跡平面形は多角形と方形である。いずれも規模は一辺が5m程度の中型で壁際にベッド状遺構を有する竪穴建物跡である。多角形の竪穴建物跡は南側、北側にそれぞれ張り出し部を持つ。また壺棺墓2基を検出している。中央部北端で検出したSG1の壺棺は、高知県内では最大級の大きさのもので逆位に埋置している。壺棺墓はⅦ区で2基、Ⅷ区で18基検出しており、本調査区の壺棺墓は集落全体の東端に位置するものである。この他には土坑、性格不明遺構を検出しているものの、数は少ない。

古墳時代については、土坑を僅かに検出したに留まる。

古代は掘立柱建物跡3棟を検出している。掘立柱建物跡は他に2棟検出しているが、所属時期を決定することができなかった。この他には溝跡5条、畝状遺構を多数検出している。

近世は土坑、性格不明遺構を検出している。土坑のうち4基はいわゆるハンダ土坑である。

執筆担当者:近藤孝文 前田光雄

調査担当者:山本哲也 安岡猛

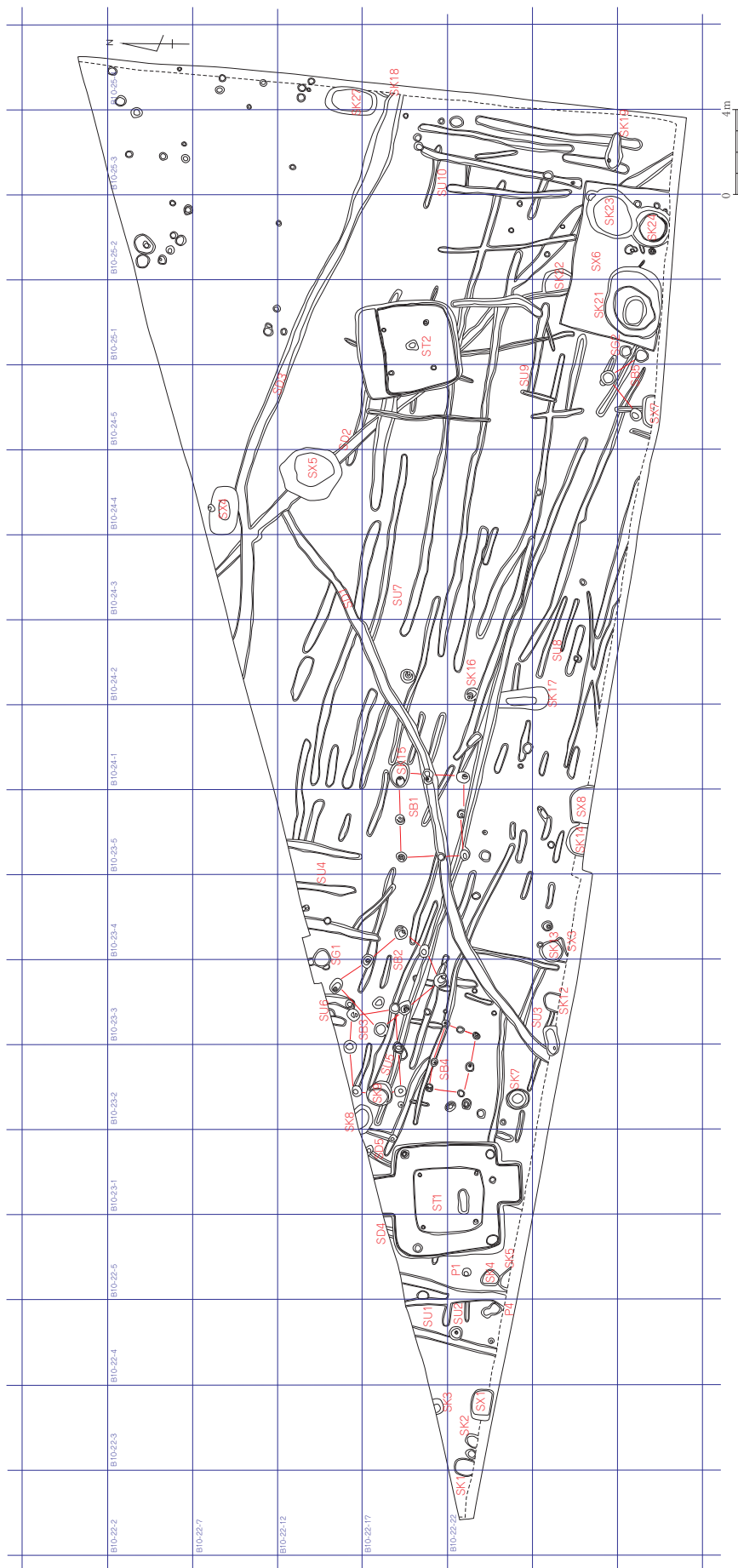
調査期間:平成20年5月9日～平成20年8月4日

面積:2,032㎡

時代:弥生時代後期～近世

検出遺構:弥生時代竪穴建物跡2軒・壺棺墓2基・土坑6基・性格不明遺構2基、古墳時代土坑2基、古代掘立柱建物跡5棟・溝跡5条・畝状遺構51条(10組)、近世土坑8基・性格不明遺構1基、柱穴跡約60基

遺物総点数:約5,450点



第 30 图 X区遺構全体図

第2節 竪穴建物跡

本調査区では2軒の竪穴建物跡を検出した。時期はいずれも弥生時代後期後半である。ST1は南辺、北辺に張出し部を設けた多角形である。県内外において張出し部を設けた竪穴建物跡は何軒も見られるが、ST1と同様のものは確認していないため全体像を解明することは困難である。ベッド状遺構が地山削り出しであること、張出し部との高さが同じで平坦でつながっていることがヒントになると考えるが、今後の研究に期待したい。

ST2は調査区の東部に位置し、折年遺跡における集落の竪穴建物跡の東限と考えられる。ベッド状遺構は北辺部のみ構築されている。特徴的なことは、一つには炉跡が不整形で比較的小規模なことである。Ⅸ・Ⅹ区における他の竪穴建物跡の炉跡とは様子が異なる。もう一つは出土遺物の壺に山形斜格子文、波状文と円形刺突を施していることである。

第7表 X区竪穴建物跡一覧表

ST番号	グリッド	時期	形状	主軸方向	規模(m)	規模(m)	深さ(m)	付帯施設	遺物	切り合い
ST1	B10-23-16他	弥生後期後半	多角形	N-1° -W	(6.82)	5.34	0.52	ベッド	弥生土器	SK6、SD4・5切られる
ST2	B10-25-16他	弥生後期後半	方形	N-14° -W	5.08	4.36	0.4	ベッド	弥生土器	SD2・4切られる

ST1 (第31～33図)

グリッド: B10-23-16他 切り合い関係: SK6、SD4・5に切られる

時期: 弥生時代後期後半 形状: 多角形 主軸方向: N-1° -W

規模: (6.82) × 5.34m 深さ0.52m

覆土: 灰褐色土主体

柱穴: 数9 主柱穴数4 主柱穴P1～4

炉跡: 形状 楕円形 規模116×48cm 深さ10cm 覆土 褐色シルト質細粒砂(炭化物及び焼土を含む。黄橙色土ブロック)

ベッド: 幅68～106cm 高さ8～16cm

周溝: 1条 幅7～8cm 深さ3～5cm

その他付帯施設: 付属屋(張出し部)

出土遺物: 弥生土器壺、甕、鉢、高坏、支脚、土製円盤、磨石

所見: 調査区西部に位置する。北側は一部調査区外にあるがほぼ全体を検出している。弥生時代後期後半の壺棺墓が北東約8mで確認されている。古代と考えられるSD4、SD5に切られている。

確認面は基本土層Ⅲ層暗褐色土上面で、床面は基本土層Ⅴ層黄褐色ローム混礫層に掘り込まれていた。

平面形は多角形を呈し、住居の南辺、北辺にそれぞれ方形の張出し部を設けている。北辺の張出し部は一部調査区外に広がる。張出し部を付設した住居としては、県内では住居平面が円形の下ノ坪遺跡や田村遺跡群で、県外では住居平面が方形のものが宮崎県把言田遺跡などで報告されて

いる。平面形は一辺の長さ5.3mを測る中型の竪穴建物跡であるが、張出し部を加えた南北の長さは6.8mを超える。深さは52cmを測る。

覆土は上層に灰褐色土、次いで灰褐色シルト質細粒砂で明褐色小ブロックを含み、さらに褐色シルト質細粒砂で明褐色シルト質細粒砂を斑紋状に含み、下層は褐色シルト質細粒砂に炭化物及び焼土を含む。壁際には地山でベッド状遺構を構成する。床面土層断面等の観察で地山に相当する層は黄褐色土粘質土が認められた。床面はほぼ平坦面をなし、標高は14.95mである。

炉跡は中央からやや南に位置するところで1基検出している。形状は楕円形で、規模は長軸116cm、短軸48cm、深さ10cm程度である。覆土は褐色シルト質細粒砂で炭化物及び焼土を含み、黄橙色土ブロックがある。6～11cm大の礫を数個検出した。

張出し部の南辺のものは、壁際から0.97m程外へ張出し、長辺は2.09m、高さは床面から13cmを測る。建物の中心から東側に55cm片寄って構築している。また北辺のものは、北側が調査区外に広がるため壁際から外への張出し幅は不明であるが、長辺は1.98m、高さは床面から0.19mを測る。この張出し部も中心から東側に25cm片寄って構築している。なお、この張出し部は付属屋と考えられるが、県内では類例がないので機能は判然としない。

柱穴は9基検出し、このうち支柱穴はベッド際内側四隅で4基検出した。規模は直径18～22cm、深さ14～31cmを測る。その他壁際の四隅で直径40cm大の柱穴4基を検出しており、位置や規模からして束柱の可能性が考えられる。

ベッド状遺構は地山削り出しで構成し、四辺で確認した。また、張出し部もベッド状遺構とつながっている。幅は68～106cmで、高さは床面から8～16cm程度である。

壁際で周溝を検出している。ベッド状遺構を掘り込み構築され、調査区内は全周している。幅は広いところで8cm、深さは深いところで5cmを測る。

所属時期は出土遺物からして弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物(第32、33図No.1～32)

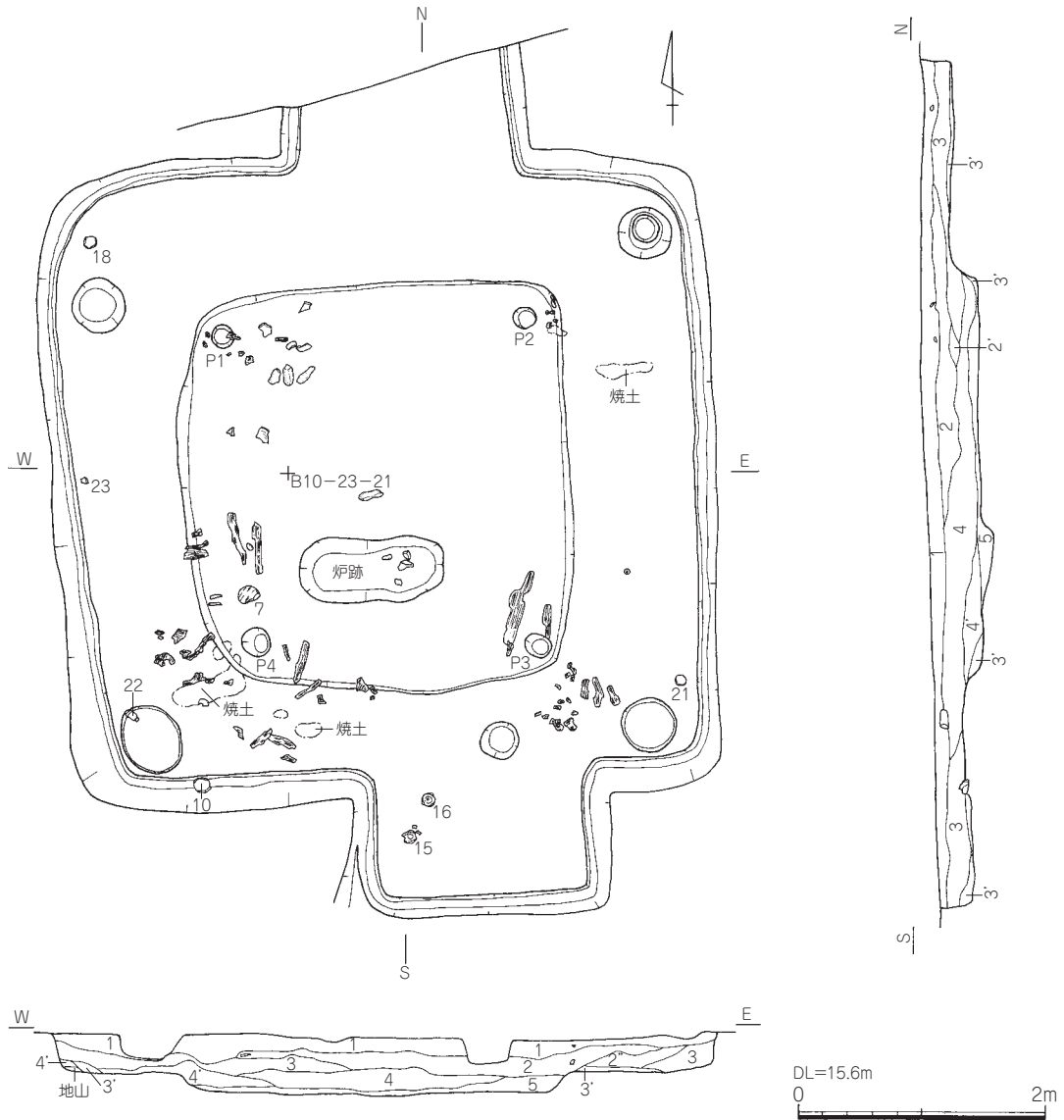
No.1から4は壺である。1は二重口縁壺、他は広口壺である。1は口縁は受け口状に二重となる。2から4は同タイプの広口壺で、口縁が強く外反する。4は口径14.0cmでやや小型である。3は口縁部が凹線状となっている。整形は内外面共にハケ整形である。5、6は甕で、甕の底部と考えられるものは8から10、及び22である。7については壺の可能性がある。5、6はやや小型の甕で、口径14cm強を測る。口縁が外傾し、体部は余り張らない。外面がタタキ、内面がハケ整形である。底部と考えられるものは、平底、平底気味の丸底が多く、10は内外面共にハケ整形で平底はしっかりしている。

11から21、及び底部の23から26は鉢である。幾つかのタイプに分かれ、また大きさも幾つかに分かれる。11は片口部を有する口径31cmを測る大型のもので、体部はほとんど開かず立ち上がる。外面整形はタタキである。12はほぼ完形品で住居内柱穴P2からの出土である。口径23.7cmを測る大型品である。口縁は外反し、体部は丸味を持ち底部は丸底である。内外面共にハケ整形で、内面にはミガキを施す。13はやや大型のもので口径17.6cmを測る。丸底で、体部、口縁は開く。整形は外面がタタキ、内面がハケである。14も同様のものやや一回り小さく口径13.4cmを測る。底部は平底気味である。15から17は丸底か尖底気味で深い器形のものである。15、16の口径は11cm強で、17は若干小さく9.5cmである。整形は内外面共にハケで、17は一部タタキを残す。18から21は小型のものである。18、20は碗状の器形のもので、19は箱形、21は皿状のものである。底部は丸底気味のもの

である。整形は指頭及びナデが主で、19はハケ整形である。18、20、21は外面にひび割れが入るもので手づくね成形か型取りの可能性ある。23から26は鉢の底部と考えられるものである。24、25は箱形の器形に近く、平底である。24は外面にタタキ整形を残す。

27は高坏の坏部である。腰部はやや屈曲し、口縁は大きく開く。口径22.8cmを測る大型品である。整形は落剥気味で不明である。

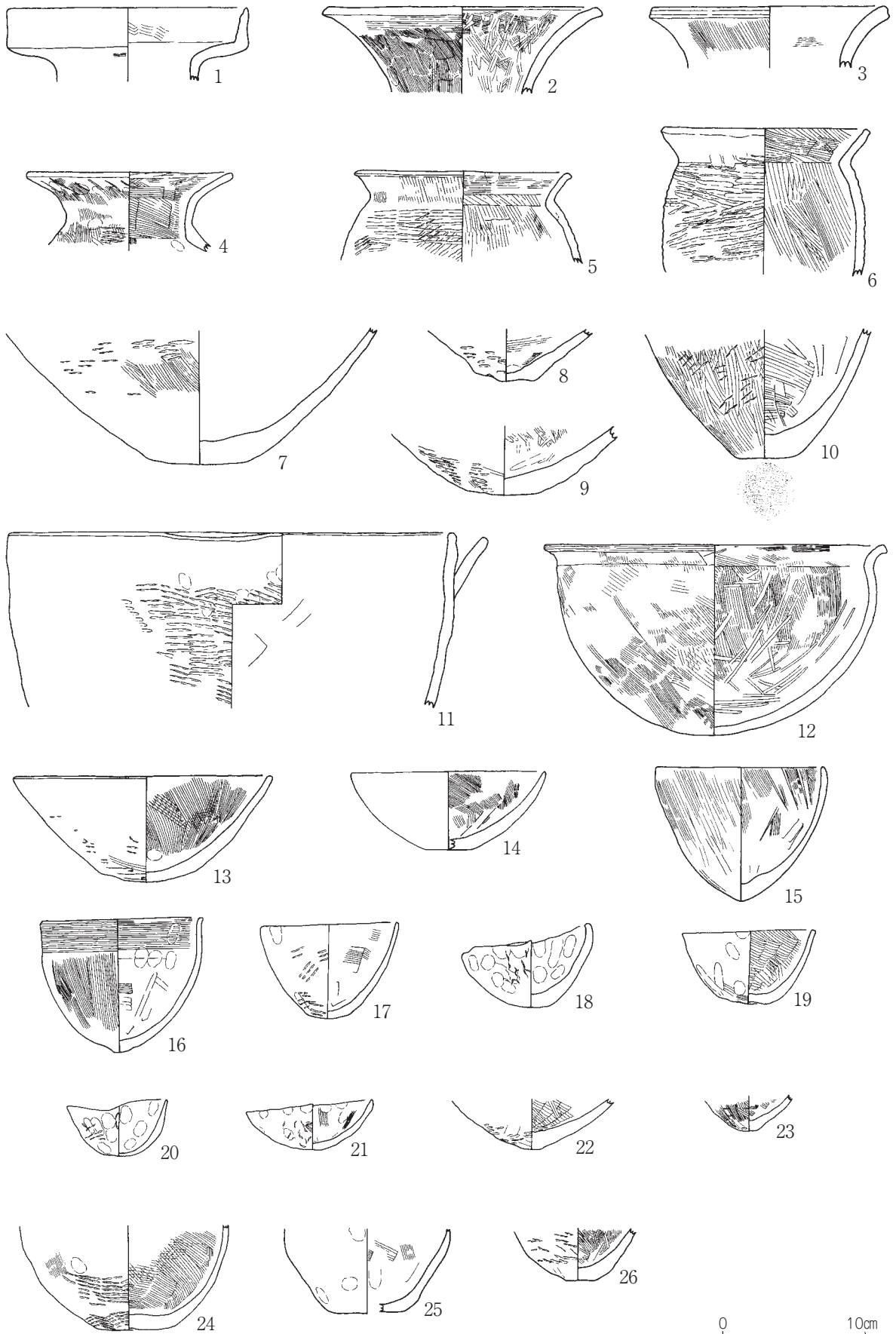
28は土製円盤で径6.1cmを測り、中央部に径0.9cmの孔を穿つ。29から31は支脚である。29はほぼ



土層説明

- | | |
|------------------------|--------------------------|
| 1 灰褐色シルト質細粒砂 | 3' 灰褐色シルト質細粒砂 |
| 2 灰褐色シルト質細粒砂 | 4 褐色シルト質細粒砂 |
| 2' 灰褐色シルト質細粒砂 炭化物、焼土含む | 4' 褐色シルト質細粒砂 |
| 2'' 灰褐色シルト質細粒砂 炭化材多量 | 5 褐色シルト質細粒砂 炭化材、焼土ブロック多量 |
| 3 にぶい褐色シルト質 | |

第31図 X ST1 遺構図



第 32 図 X ST1 遺物実測図 (1)

完形品で受け部の突起を2ヶ所有する。30、31は突起部分の破片である。整形は指頭、ナデである。
32は磨石で楕円礫で一部に擦痕が認められる。他は敲打を施している。砂岩製である。

ST2 (第34、35図)

グリッド;B10-25-16他 切り合い関係;SD2・4に切られる

時期;弥生時代後期後半 形状;方形 主軸方向;N-14° -W

規模;5.08×4.36m 深さ0.4m

覆土;灰褐色土主体

柱穴;数4 主柱穴数4 主柱穴P1～4

炉跡;形状 不整形 規模60×45cm 深さ20cm 覆土 灰褐色シルト質細粒砂

ベッド;幅97～104cm 高さ7～21cm

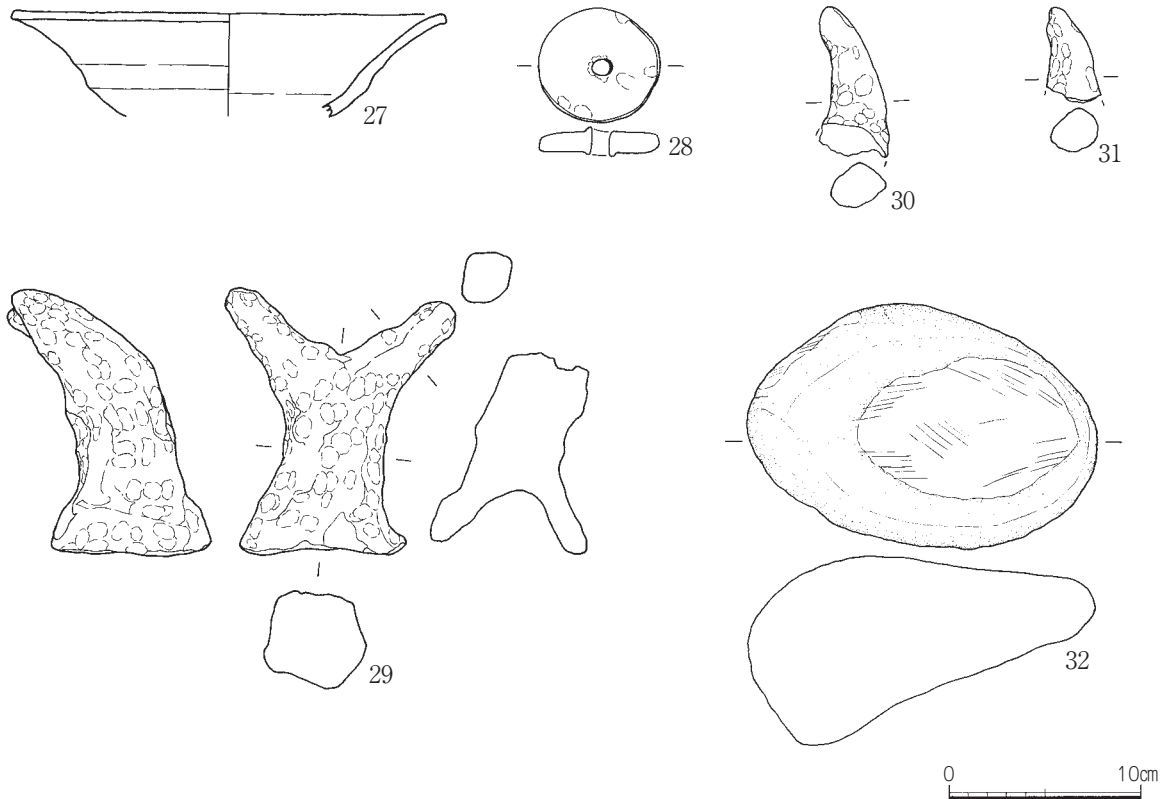
周溝;1条 幅6～15cm 深さ2～6cm

その他付帯施設;-

出土遺物;弥生土器壺、甕、鉢、高坏、支脚

所見;調査区東部中央に位置する。古代のSD2、SD4に切られている。確認面は基本土層Ⅲ層暗褐色土上面で、床面は基本土層Ⅴ層黄褐色ローム混礫層に掘り込まれていた。平面形は方形を呈する。規模は5.08×4.36mを測る小型の竪穴建物跡である。深さは40cmを測る。

覆土は上層には灰褐色シルト質細粒砂で暗褐色シルト質細粒砂の小ブロック、次いで灰褐色シルト質細粒砂で明褐色土の小ブロック、さらに灰褐色シルト質細粒砂で明褐色土が混入する層がある。



第33図 X ST1 遺物実測図(2)

下層は褐色土、灰褐色土、褐灰色土が各層を形成している。北辺の壁際にはベッド状遺構を構成する。床面土層断面等の観察で貼床に相当する層は灰褐色土、明褐色土、灰褐色土の版築が認められた。床面はほぼ平坦面をなし、標高は15.25mである。

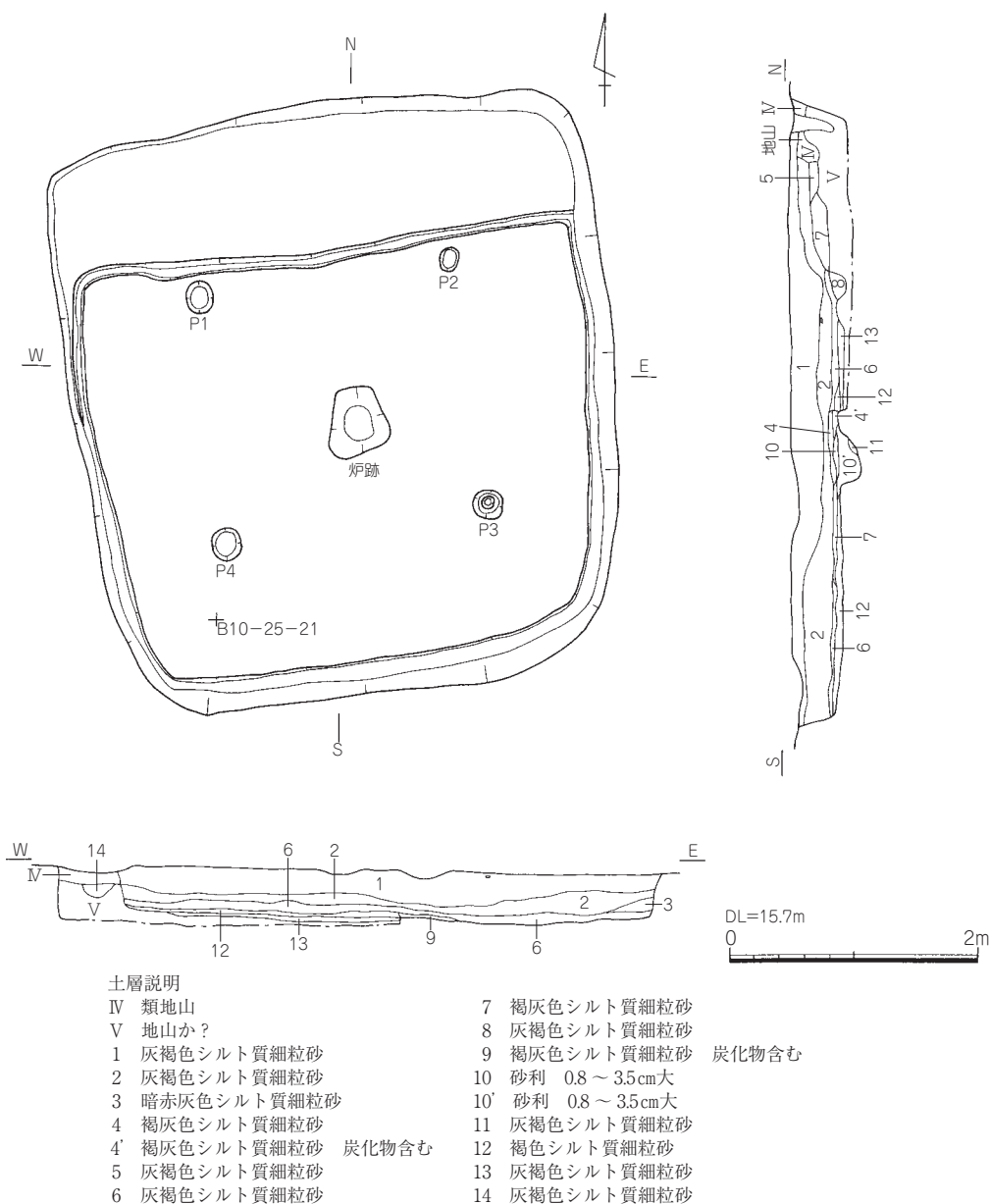
炉跡は中央で1基検出している。形状は不整形で、規模は長径60cm、短径45cm、深さ20cmを測る。覆土は灰褐色シルト質細粒砂で明褐色シルト質細粒砂混じりの玉石、砂利、炭化物を含む。

柱穴は支柱穴を4基検出しており、直径19～25cm、深さ35cmを測る。

ベッド状遺構は造り付けで北部一辺のみで確認した。幅は97～104cm、高さは床面から7～21cm程度である。

周溝は床面を取り囲むように巡らされている。幅は広いところで15cm、深さは深いところで6cmを測る。

所属時期は出土遺物からして弥生時代後期後半と考えられる。



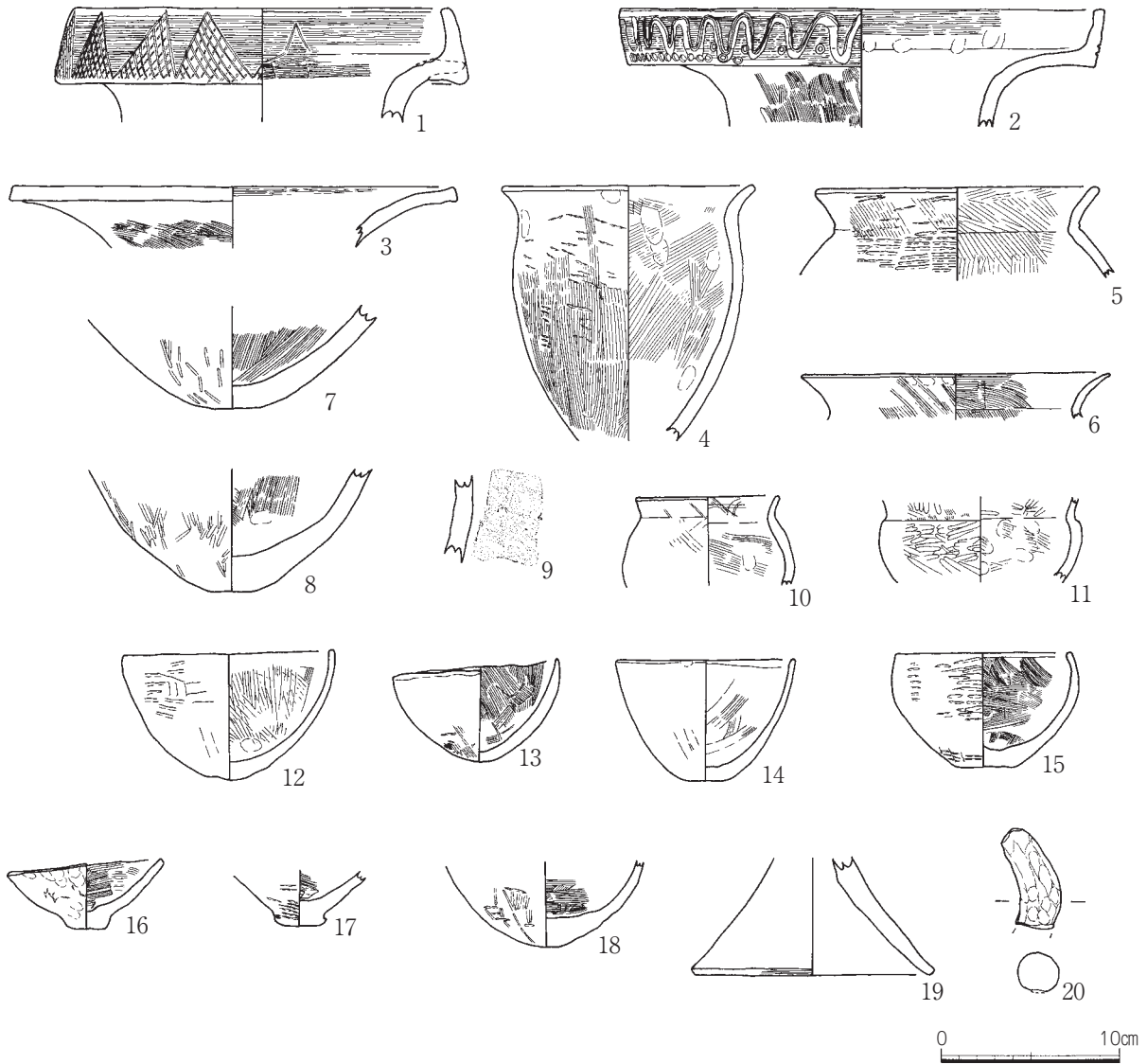
第34図 X ST2 遺構図

出土遺物(第35図No.1～20)

No.1 から3は壺である。1、2は二重口縁壺、3は広口壺である。1は口縁に山形斜格子文、2は波状文と円形刺突を施す。3の広口壺の口縁は大きく外反し、内外面共にハケ調整である。11も小型の丸底壺の可能性ある。肩部が段状になり、体部に丸味を持つ。外面は丁寧なミガキ調整である。

4から9は甕と考えられる。4、5は小型甕で4の口縁は僅かに短く外反する。5の口縁は外傾する。6は器肉の薄いもので口縁は外反する。整形は外面にタタキ痕、ハケ、内面はハケ整形である。7、8は底部で7は丸底で体部が大きく開く。8は小さな平底である。整形は外面にナデで若干ミガキになる。内面はハケである。9は胴部下半と考えられ、木葉痕が認められる。

10、12から18は鉢である。10は甕形の小型鉢で、口縁は外傾し、体部やや丸味を持ち、内外面共にハケ整形である。12、13は碗状のもので13は小型鉢である。共に丸底で外面がタタキ、内面がハケ整形である。14はやや器形が深いもので、平底である。ナデ整形で内面にはハケも施す。15は口縁が内湾気味のもので平底である。外面がタタキ整形、内面がハケである。16は皿状で浅いものであ



第35図 X ST2 遺物実測図

る。底部は尖り気味の平底である。外面が指頭、ナデ、内面はハケ整形である。外面には小さなひび割れが入る。17、18は底部破片で、17は小さな平底、18は丸底である。整形は共に外面がタタキ、内面がハケ整形である。

19は高坏の裾部である。裾は大きく開く。整形は落剥のため不明である。

20は支脚の受け部突起である。指頭、ナデ整形である。

第3節 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は5棟検出している。調査区東南部でSB5を、中央寄りでSB1を、西部でSB2、3、4を検出した。本調査区の掘立柱建物跡の特徴は、SB5を除いて、梁行の片方の柱穴1基が不足していることである。時期は規模、配置からしてSB1、3、5は古代と考えられるが、SB2、4については判然としない。ただし、SB2、4も他の掘立柱建物跡と同様に梁行の片方の柱穴1基が不足していることから古代の可能性はある。柱穴の形状は円形である。掘方の規模はSB2、5が径60cmを超え、SB1、3が径50cm前後、SB4が35cm前後である。柱痕は径15cm前後のものをSB1、2、4で検出した。

掘立柱建物跡全体の規模等はまちまちで、面積が最大のもはSB2で11.48㎡、最小のもはSB4で5.18㎡である。軸方向はSB1とSB3がほぼ同じで北方向に垂直に交わる。

第8表 X区掘立柱建物跡一覧表

SB番号	グリッド	時期	桁行	梁行	面積(㎡)	柱穴形状	柱穴平均径(m)	柱穴平均深さ(m)	柱痕平均径(m)	柱痕平均深さ(m)	軸方向	遺物
SB1	B10-23-20他	古代?	2	2	11.45	円形	0.48	0.3	0.15	0.3	N-90° -E	弥生細片
SB2	B10-23-18他	不明	2	2	11.48	円形	0.6	0.33	0.16	0.38	N-39° -W	弥生細片
SB3	B10-23-17他	古代?	2	2	8.08	円形	0.54	0.4			N-87° -E	弥生細片
SB4	B10-23-17他	不明	2	2	5.18	円形	0.34	0.28	0.12	0.32	N-75° -W	弥生細片
SB5	C10-4-5他	古代?	(1)	(1)	-	円形	0.64	0.55			N-55° -E	弥生細片

SB1 (第36図)

グリッド:B10-23-20他 切り合い関係:SD1を切る、SK15に切られる

時期:古代? 主軸方向:N-90° -E

規模:桁行2間×梁行2間 桁行3.73m×梁行3.07m 柱間距離桁行1.85～1.95m(平均1.89m) 梁行1.13～1.94m(平均1.54m) 面積11.45㎡

柱穴数:8 柱形状:円形 柱痕:有

柱穴規模:径平均0.48m 深さ平均0.30m

覆土:-

出土遺物:弥生土器細片

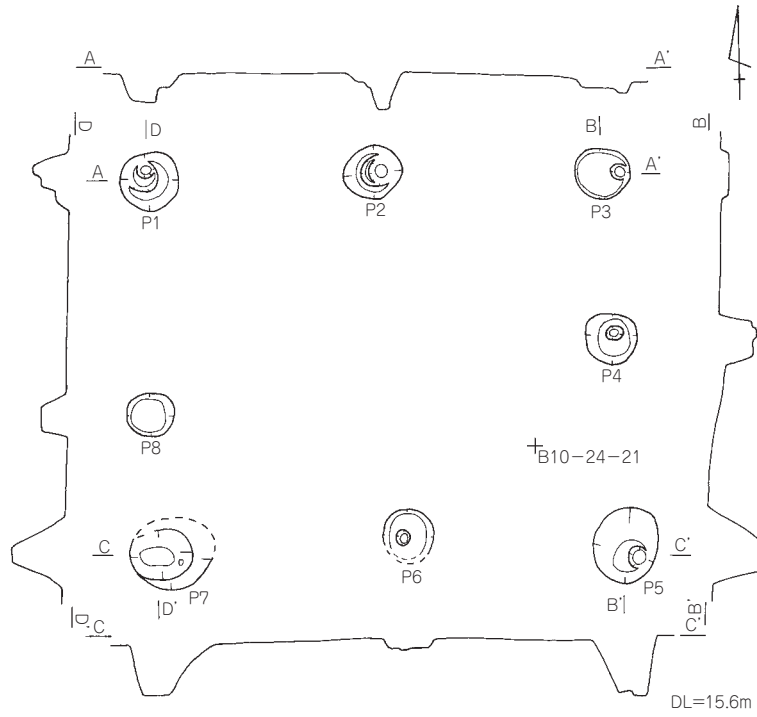
所見:調査区中央部で検出した東西棟建物である。P1～8が柱穴を構成する。P4・P8はSD1を切り、P3はSK15に切られる。掘方は38～62cmの円形を呈する。検出面からの深さは、浅いものがP6の8cm、そのほかの柱穴は20～44cmを測る。柱痕はP1～6で検出し平均直径15cm、深さ30cmを測る。

遺物は混入の弥生土器細片のみで掲載できる遺物は出土しなかった。所属時期は時期決定できる遺物が出土していないものの、柱穴の配置、規模からして古代の可能性はある。

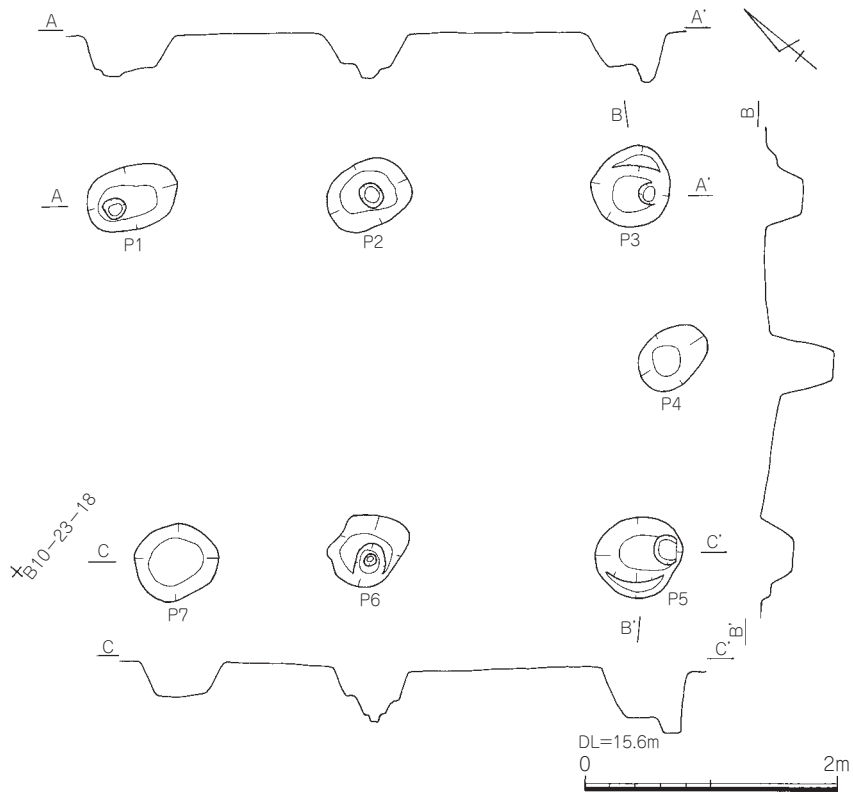
SB2 (第37図)

グリッド:B10-23-18他 切り合い関係:SU5に切られる

時期:不明 主軸方向:N-39° -W



第 36 図 X SB1 遺構図



第 37 図 X SB2 遺構図

規模:桁行2間×梁行2間 桁行4.0m×梁行2.87m 柱間距離桁行1.62～2.08m(平均2.0m) 梁行1.35、1.52m(平均1.44m) 面積11.48㎡

柱穴数:7 柱形状:円形 柱痕:有

柱穴規模:径平均0.60m 深さ平均0.33m

覆土:にぶい赤褐色土

出土遺物:弥生土器細片

所見:調査区西部北側で検出した北西棟建物である。P1～7が柱穴を構成する。SB4の北東に隣接し、西側の一部がSB3と重なっている。P6はSB3P4と切り合うが先後関係は不明である。P2、P4、P5、P6はSU5(畝状遺構)に切られる。掘方は円形を呈し、P4は2条の畝状遺構に切られているため直径50cmと短い、そのほかの柱穴は直径61～68cmを測る。検出面からの深さは、P7は26cm、P1～3は33～38cm、P5、P6は約41cm、P4は52cmを測る。北西側の梁行の柱穴1基は未検出である。柱痕はP1～3、P5、P6で検出し平均直径16cm、深さ38cmを測る。

遺物は混入の弥生土器細片のみで掲載できる遺物は出土しなかった。所属時期は時期決定できる遺物が出土していないため、判然としない。

SB3 (第38図)

グリッド:B10-23-17他 切り合い関係:SU5に切られる

時期:古代? 主軸方向:N-87° -E

規模:桁行2間×梁行2間 桁行3.94m×梁行2.05m 柱間距離桁行1.51～2.06m(平均1.88m) 梁行0.94、1.11m(平均1.03m) 面積8.08㎡

柱穴数:7 柱形状:円形 柱痕:無

柱穴規模:径平均0.54m 深さ平均0.40m

覆土:褐色土、にぶい赤褐色土

出土遺物:弥生土器細片

所見:調査区西部北側で検出した東西棟建物である。P1～7が柱穴を構成する。SB4の北側に隣接し、東側の一部がSB2と重なっている。P4はSB2P6と、P7はSK9と切り合うが先後関係は不明である。P4、P5はSU5に切られる。掘方は直径45～60cmの円形を呈する。検出面からの深さは、浅いものでP1、P2、P4の32～35cm、P3、P5、P6、P7は40～51cmを測る。東側の梁行の柱穴1基は未検出である。柱痕は未検出である。

遺物は混入の弥生土器細片のみで掲載できる遺物は出土しなかった。所属時期は時期決定できる遺物が出土していないものの、柱穴の配置、規模からして古代の可能性はある。

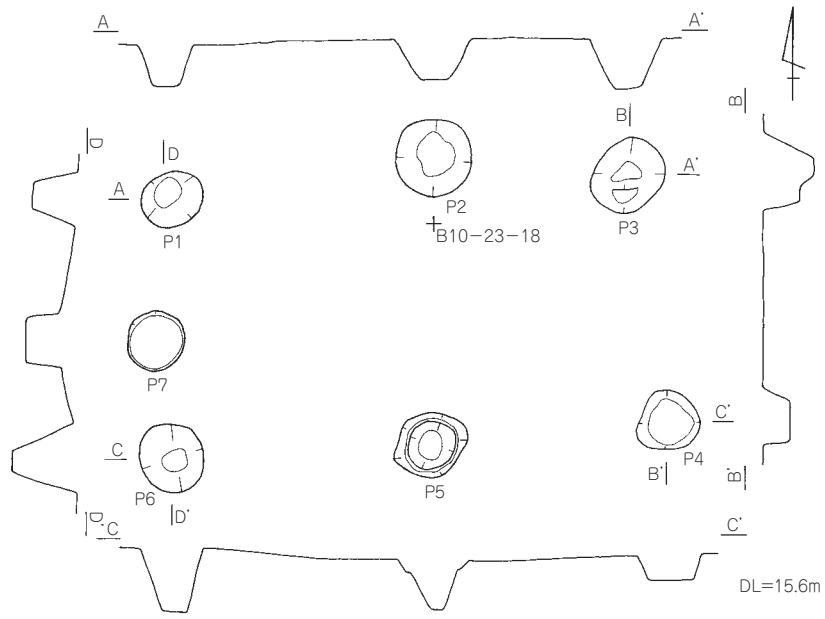
SB4 (第39図)

グリッド:B10-23-17他 切り合い関係:SU5に切られる

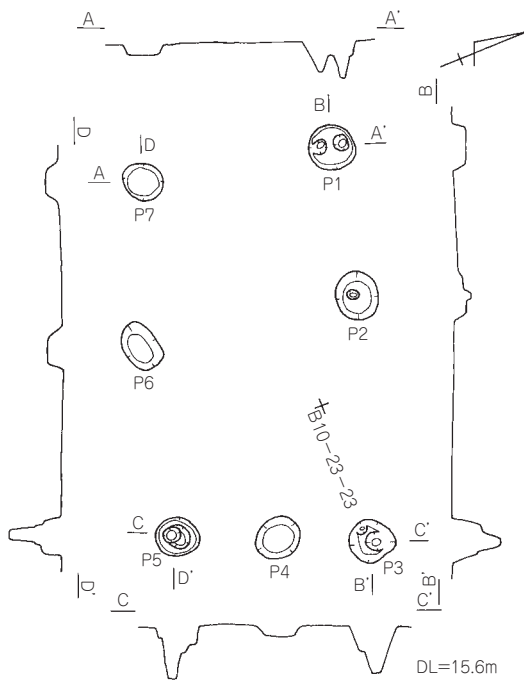
時期:不明 主軸方向:N-75° -W

規模:桁行2間×梁行2間 桁行3.12m×梁行1.66m 柱間距離桁行1.22～1.90m(平均1.48m) 梁行0.83m(平均0.83m) 面積5.18㎡

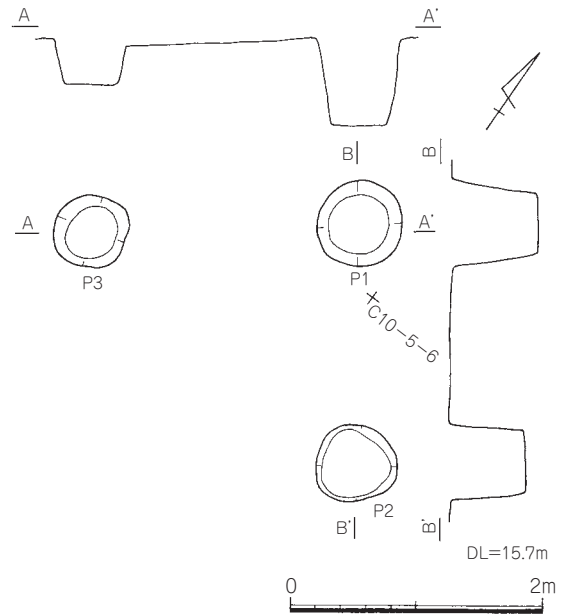
柱穴数:7 柱形状:円形 柱痕:有



第 38 图 X SB3 遺構図



第 39 图 X SB4 遺構図



第 40 图 X SB5 遺構図

柱穴規模:径平均0.34m 深さ平均0.28m

覆土:褐色土

出土遺物:弥生土器細片

所見:調査区西部中央で検出した東西棟建物である。P1～7が柱穴を構成する。SB2の南西、SB3の南側に隣接する。P2、P3はSU5に切られる。掘方は直径25～38cmの円形を呈する。検出面からの深さは、浅いものでP4の8cm、次にP2、P6は16cm、P1、P3、P5、P7は33～44cmを測る。西側の梁行の柱穴1基は未検出である。柱痕はP4、P6、P7を除いて検出した。柱痕の平均直径は12cm、深さは平均32cmを測る。

遺物は混入の弥生土器細片のみで掲載できる遺物は出土しなかった。所属時期は時期決定できる遺物が出土しておらず、判然としない。

SB5 (第40図)

グリッド:C10-45他 切り合い関係:SU5・9に切られる

時期:古代? 主軸方向:N-55° -E

規模:桁行(1)間×梁行(1)間 桁行(2.10) m×梁行(1.85) m 柱間距離桁行2.10m 梁行1.85m 面積-

柱穴数:(3) 柱形状:円形 柱痕:無

柱穴規模:径平均0.64m 深さ平均0.55m

覆土:-

出土遺物:弥生土器細片

所見:調査区東部南端で検出した北東棟建物と考えられる。南側が調査区外に広がるため、規模等は不明であるが、一定の規則性を持って並ぶ柱穴が検出されたことから掘立柱建物跡を想定した。P1～3が柱穴を構成するものと考えられる。SX6の西側に隣接する。P1、P2はSU5に、P3はSU9に切られる。掘方は直径60～65cmの円形を呈している。検出面からの深さは、P3は39cmと浅いが、P1は67cm、P2は60cmを測る。柱痕は未検出である。

遺物は混入の弥生土器細片のみで掲載できる遺物は出土しなかった。所属時期は時期決定できる遺物が出土していないものの、柱穴の配置、規模からして古代と考えられる。

第4節 壺棺墓

壺棺墓は2基検出している。平面形が共に円形の埋納土坑で、時期は弥生時代後期後半と考えられる。壺棺の大きさからして、SG1は幼児、SG2は乳児を納めたのではないかと推測する。壺棺墓は祈年遺跡全体で22基検出したが、長岡台地上では伏原遺跡(14基)、ひびのきサウジ遺跡(9基)、東崎遺跡(2基)、五軒屋敷遺跡(2基)で検出している。出土した壺棺はいずれの遺跡も本遺跡の壺棺と類似している。

第9表 X区壺棺墓一覧表

SG番号	グリッド	時期	形状	規模(m)	深さ(m)	遺物
SG1	B10-23-14他	弥生後期後半	円形	径0.86	0.48	弥生壺
SG2	C10-5-6	弥生後期後半	円形	径0.66	0.16	弥生壺

SG1 (第41、43図)

グリッド:B10-23-14他 切り合い関係:なし

時期:弥生時代後期後半

埋納土坑規模:直径0.86m 深さ0.48m 形状:円形 断面形態:箱状 主軸方向:-

覆土:1 灰褐色シルト質細粒砂(明褐色土小ブロック) 2 暗褐色シルト質細粒砂(灰褐色土混じり)

出土遺物:弥生土器壺

所見:調査区中央部西寄り北端で検出した壺棺墓である。ST1の北東側約8mで検出された。土器の形態、法量などから乳幼児の埋納土坑と考えられる。所属時期は出土遺物からして弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物(第43図 SG1-1)

No.1は壺である。本遺跡内で最大のものである。口縁端部が欠損するが、法量は口径17.0cm、器高71.0cm、底径10.2cmを測る。口縁は短く外反し、端部は欠損する。頸部には刻み突帯を施す。肩部は張り、胴部上半に最大径を有し53.2cmを測る。下半はすぼまり、底部は平底である。整形は外面がタキ、ハケ、内面がハケ整形である。弥生時代後期後半の所産と考えられる。

SG2 (第42、43図)

グリッド:C10-5-6 切り合い関係:なし

時期:弥生時代後期後半

埋納土坑規模:直径0.66m 深さ0.16m 形状:円形 主軸方向:-

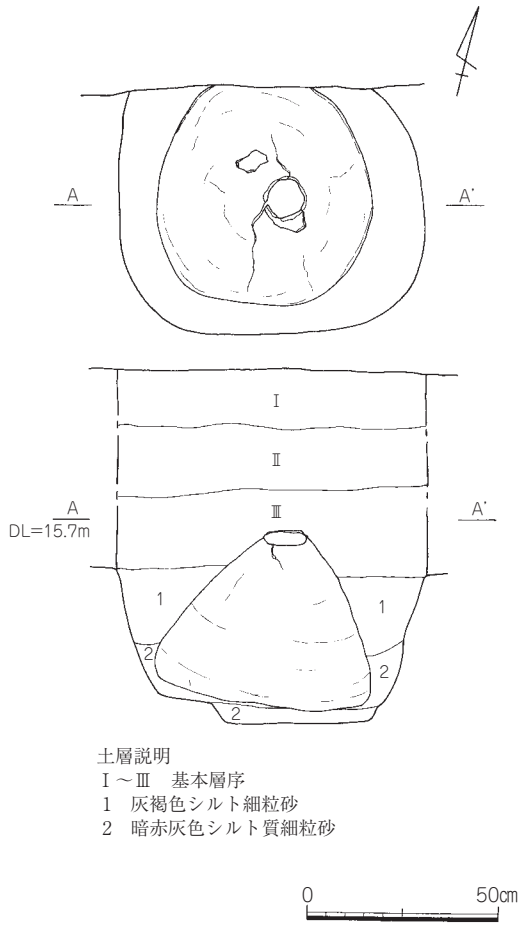
覆土:-

出土遺物:弥生土器壺

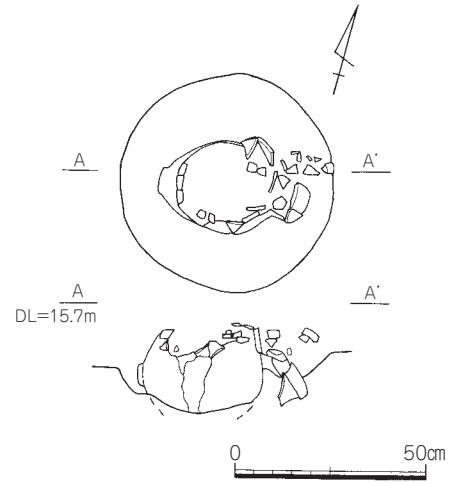
所見:調査区東部南側で検出した壺棺墓である。SX6の西側に隣接する。土器の形態、法量などから乳幼児の埋納土坑と考えられる。所属時期は出土遺物からして、弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物(第43図 SG2-1)

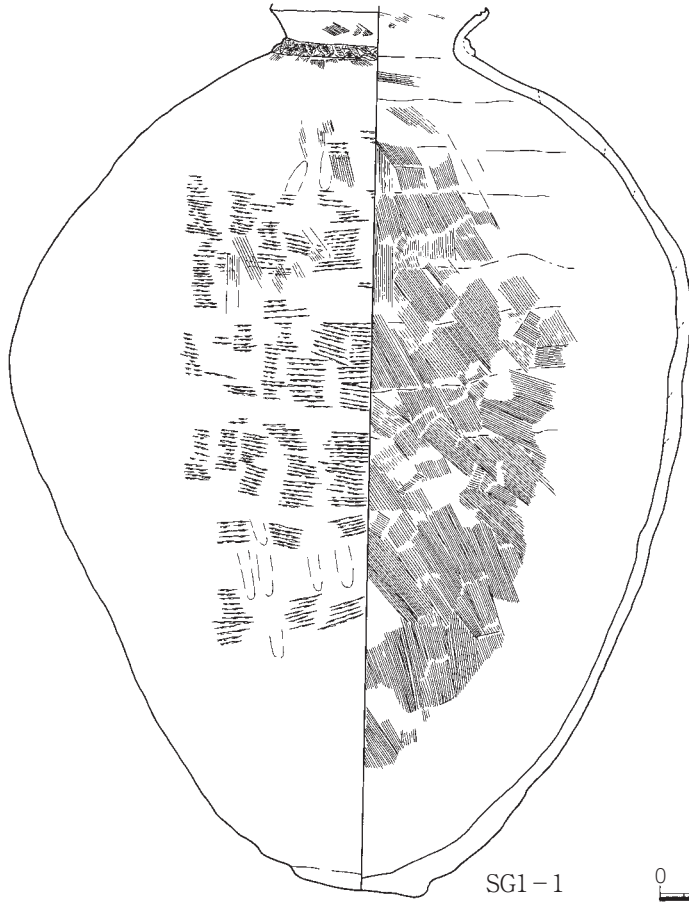
No.1 は広口壺である。口縁が外反し、胴部は丸味を持ち、下膨れである。最大径は胴部中央にあり25.5cmを測る。平底である。整形は外面口縁がハケ、胴部はタタキ、ハケ、内面がハケである。弥生時代後期後半の所産と考えられる。



第41図 X SG1 遺構図

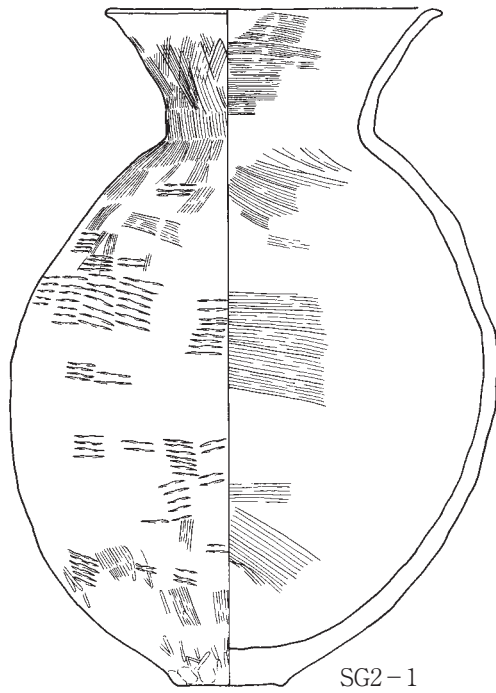


第42図 X SG2 遺構図



SG1-1

0 20cm



SG2-1

0 10cm

第 43 图 X区 SG 遺物実測図

第5節 土坑

土坑は23基検出した。形状は円形、楕円形、溝状のものが認められている。土坑からは掲載できる遺物の出土は少なく細片が混入していた。その中でSK6、7から鉢、SK8、19、22、27から甕、SK16から壺や甕が出土したが、時期はいずれも弥生時代後期後半のものである。SK4は古墳時代前期初頭と考えられる土師器鉢が出土している。また、近世のハンダ土坑が4基検出されている。特に調査区東南部に位置するSX6の上層に3基が集中しており、作業場として構築された可能性がある。

第10表 X区土坑一覧表

SK番号	グリッド	時期	形状	主軸方向	規模(m)	規模(m)	深さ(m)	遺物	切り合い	備考
SK1	B10-22-23他		楕円形	N-9° -E	1.14	0.8	0.15			
SK2	B10-22-23		楕円形	N-30° -E	0.8	0.58	0.15			
SK3	B10-22-18	古墳			0.74	(0.38)	0.36			
SK4	B10-22-25	古墳	不整形		0.9	0.73	0.09	土師器鉢	SK5切る	
SK5	B10-22-25				1.12	(0.33)	0.07			
SK6	B10-23-21	弥生	円形		径0.78		0.28	鉢	ST1切る	
SK7	B10-23-22	弥生	長楕円形	N-3° -W	1.1	0.96	0.36	壺、鉢		
SK8	B10-23-17他	弥生			1.34	(0.76)	0.21	甕、叩石		
SK9	B10-23-17		不整形		1.17	1.1	0.37			
SK10欠番										SB3P6に変更
SK11欠番										SG1に変更
SK12	C10-3-3				0.85	(0.84)	0.1			
SK13	C10-3-4		円形		径1.03		0.19		SX3切る	
SK14	C10-3-5	近世			1.43	(0.85)	0.31		SX8切る	ハンダ土坑
SK15	B10-24-16		楕円形	N-72° -W	1.23	0.9	0.41		SB1P3切る	
SK16	B10-24-22	弥生	楕円形	N-39° -W	0.68	0.57	0.49	壺、甕		
SK17	B10-24-22他	近世	長楕円形	N-2° -E	(2.48)	0.38 ~ 1.1	0.32		SU5・8切る	
SK18	B10-25-19	近世?							SD3切る	
SK19	C10-5-3他	弥生	溝状	N-82° -W	1.76	0.42 ~ 0.82	0.18	弥生細片多	SU10切られる	
SK20	C10-5-8	近世			(0.56)	(0.3)	0.48			
SK21	C10-5-6他	近世	不整形		3.22	2.56	0.47			ハンダ土坑
SK22	C10-5-1他	弥生	楕円形	N-20° -W	1.35	1.24	0.19	弥生細片多	SX6切られる	
SK23	C10-5-2他	近世	楕円形	N-33° -E	2.59	2.15	0.57		SK24切る	ハンダ土坑
SK24	C10-5-7	近世	円形		径1.92		0.29		SK23切られる	ハンダ土坑
SK25欠番										SK21に変更
SK26欠番										SG2に変更
SK27	B10-25-14他	近世	楕円形	N-5° -E	2.43	(1.27)	0.57	近世陶磁器、弥生多		

SK4 (第44、45図)

グリッド: B10-22-25 切り合い関係: SK5を切る

時期: 古墳時代前期初頭 形状: 不整形 断面形態: - 主軸方向: -

規模: 0.90×0.73m 深さ0.09m

覆土: にぶい赤褐色シルト質細粒砂(黒褐色土混じり)

出土遺物: 土師器鉢

所見: 調査区西部南側で検出した土坑である。SK5を切り、ST2の西側に隣接する。所属時期は出土遺物からして古墳時代前期初頭と考えられる。

出土遺物(第45図No.1)

No.1 は皿状の小型鉢である。整形は外面には指頭圧痕が顕著である。丸底に僅かにハケを施す。内面は指頭、ナデである。小さな亀裂が入り、手づくねか。古墳時代前期初頭のものと考えられる。

SK6 (第44、45図)

グリッド:B10-23-21 切り合い関係:ST1を切る

時期:弥生時代後期後半 形状:円形 断面形態:箱形 主軸方向:-

規模:直径0.78m 深さ0.28m

覆土:1 灰褐色シルト質細粒砂 2 浅黄橙色シルト質細粒砂(にぶい黄褐色土混じり、炭化物を含む)

3 褐灰色シルト質細粒砂(にぶい褐色土混じり) 4 褐色シルト質細粒砂

5 灰褐色シルト質細粒砂(黒褐色土混じり) 6 褐色シルト質細粒砂

7 褐色シルト質細粒砂(明褐色土混じり)

出土遺物:弥生土器鉢、弥生土器片やや多い、近世灯明皿1点

所見:調査区西部南側で検出した土坑である。ST1の南側を切る。近世灯明皿1点が混入か、切り合い関係にあるか、遺物取り上げの間違いか時期決定はできない。

出土遺物(第45図No.1)

No.1 は碗状のやや小型鉢である。器形はやや深く、底部は尖底気味である。整形は外面上半がナデと下半がヘラナデである。内面はハケである。弥生時代後期後半の所産と考えられる。

SK7 (第44、45図)

グリッド:B10-23-22 切り合い関係:なし

時期:弥生時代後期後半 形状:長楕円形 断面形態:逆台形 主軸方向:N-3°-W

規模:1.10×0.96m 深さ0.36m

覆土:1 浅黄橙色シルト質細粒砂(炭化物を含む) 2 褐灰色シルト質細粒砂(土器を含む)

3 明褐色シルト質細粒砂(褐灰色ブロック)

出土遺物:弥生土器壺、鉢

所見:調査区西部南側で検出した土坑である。所属時期は出土遺物からして弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物(第45図No.1、2)

No.1 は広口壺で、口縁は大きく外反する。内外面共にハケ整形である。2 は碗状の鉢である。整形は外面がタタキ、内面はハケである。共に弥生時代後期後半の所産と考えられる。

SK8 (第44、45図)

グリッド:B10-23-17他 切り合い関係:なし

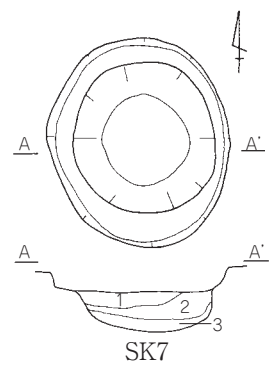
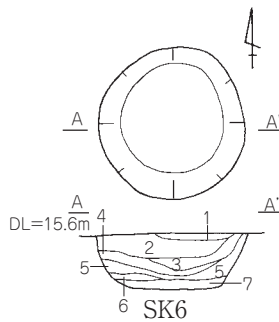
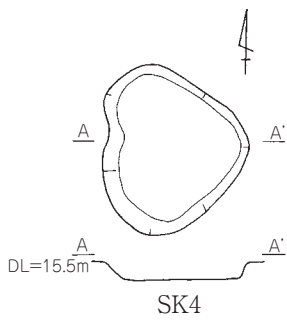
時期:弥生時代後期後半 形状:- 断面形態:- 主軸方向:-

規模:1.34×(0.76) m 深さ0.21m

覆土:にぶい赤褐色シルト質細粒砂(黒褐色土混じり)

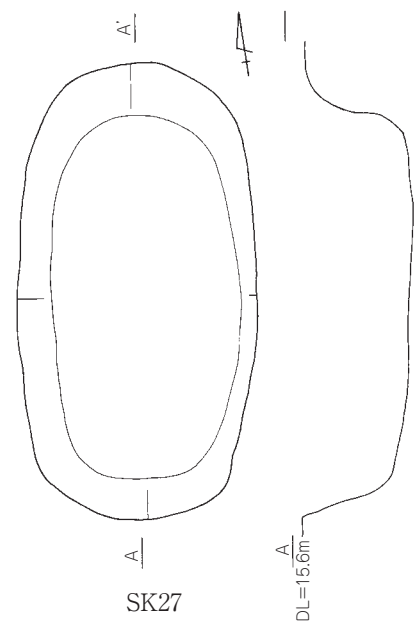
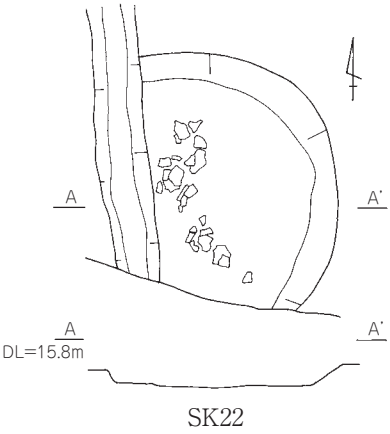
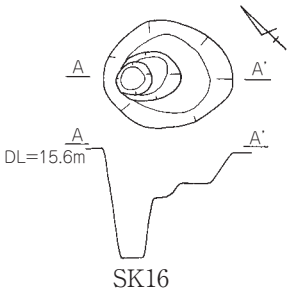
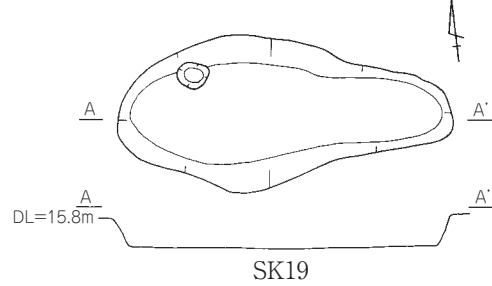
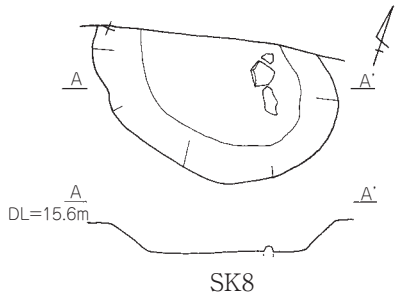
出土遺物:弥生土器甕、細片多、叩石

所見:調査区西部北端で検出した土坑である。ST1の北東に隣接する。北側が調査区外に広がるた



- 1 灰褐色シルト質細粒砂
- 2 浅黄橙色シルト質細粒砂 炭化物多量
- 3 褐灰色シルト質細粒砂
- 4 褐色シルト質細粒砂
- 5 灰褐色シルト質細粒砂
- 6 褐色シルト質細粒砂
- 7 褐色シルト質細粒砂

- 1 浅黄橙色シルト質細粒砂 炭化物多量
- 2 褐灰色シルト質細粒砂 土器含む
- 3 明褐色シルト質細粒砂



第 44 図 X区土坑遺構図

め規模等は不明である。所属時期は出土遺物からして弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物(第45図No.1、2)

No.1は甕である。口縁が外反し、口唇は丸味を持つ。肩部はやや張る。内外面に輪積み痕が残る。整形は外面口縁がナデ、体部はタタキ、ハケである。内面は指頭、ハケである。体部下半には煤が付着する。弥生時代後期後半と考えられる。

2は叩石か。裏面が破損する。一部に自然面を残す。他は敲打痕、両端部に剥離面及び右側縁に剥離痕が認められる。石質は緑色岩である。

SK16 (第44、45図)

グリッド:B10-24-22 切り合い関係:なし

時期:弥生時代後期後半 形状:楕円形 断面形態:漏斗状 主軸方向:N-39° -W

規模:0.68×0.57m 深さ0.49m

覆土:-

出土遺物:弥生土器壺、甕

所見:調査区中央部で検出した土坑である。所属時期は出土遺物からして弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物(第45図No.1、2)

No.1は広口壺である。口縁は大きく開き、口唇に刻みを施す。整形は内外面共に口縁はハケ、ミガキである。2は甕で、口縁がやや強く外傾する。整形は外面口縁がハケ、胴部がタタキである。内面は全面ハケ整形である。共に弥生時代後期後半のものと考えられる。

SK19 (第44、45図)

グリッド:C10-5-3他 切り合い関係:SU10に切られる

時期:弥生時代後期後半 形状:溝状 断面形態:- 主軸方向:N-82° -W

規模:1.76×0.82m 深さ0.15～0.18m

覆土:-

出土遺物:弥生土器甕、細片多、支脚

所見:調査区東部南側で検出した土坑である。SU10に切られる。SX6の東側に隣接する。所属時期は出土遺物からして弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物(第45図No.1～4)

No.1から3は甕である。共に口縁部を欠損する。胴部はタタキ整形、内面はハケとナデ整形である。4は土製支脚で指頭圧痕を明瞭に残す。全て弥生時代後期後半と考えられる。

SK22 (第44、45図)

グリッド:C10-5-1他 切り合い関係: SX6に切られる

時期:弥生時代後期後半 形状:楕円形 断面形態:- 主軸方向:N-20° -W

規模:1.35×1.24m 深さ0.19 m

覆土:黒褐色土

出土遺物:弥生土器甕、細片多

所見:調査区東部南側で検出した土坑である。南側の一部をSX6に切られる。所属時期は出土遺物からして弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物(第45図No.1、2)

No.1、2は共に甕である。1は口縁が外傾し、外面はタタキ、内面はナデ整形である。2は径3.3cmの小さな平底で外面はタタキ、ハケ、内面がハケ整形である。共に弥生時代後期後半である。

SK27 (第44、45図)

グリッド:B10-25-14他 切り合い関係:なし

時期:近世 形状:楕円形 断面形態:箱形 主軸方向:N-5° -E

規模:2.43×(1.27) m 深さ0.57m

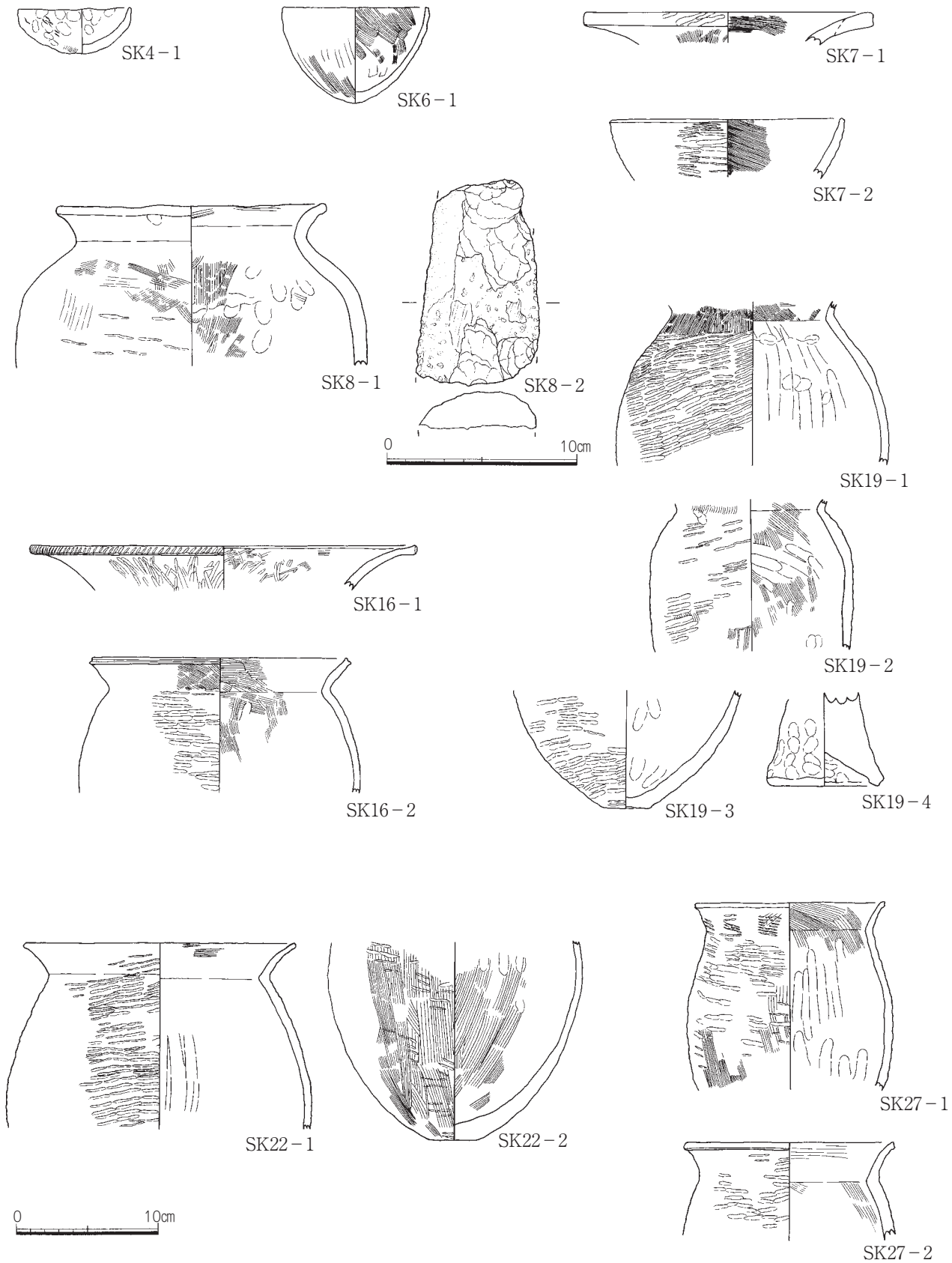
覆土:褐灰色シルト質細粒砂、灰褐色シルト質中粒砂

出土遺物:近世陶磁器、弥生土器多

所見:調査区東端中央で検出した土坑である。東側の一部は調査区外に広がる。SD3の北側に隣接する。多量の河原石が投げ込まれている層から近世陶磁器片が出土した。弥生土器も多く出土しているが混入品か、弥生時代の遺構が破壊されているかもしれない。所属時期は出土遺物からして近世と考えられる。

出土遺物(第45図No.1、2)

No.1、2は弥生時代後期後半の甕である。近世の陶磁器類は割愛した。



第 45 图 X区土坑出土遗物实测图

第6節 性格不明遺構

性格不明遺構は7基検出した。形状が明確なものはSX4の楕円形、SX6の長方形のみである。SX4は弥生土器片が多数出土している。またSX6は須恵器坏、近世陶磁器等が出土しているが、ハンダ土坑のSK21、23、24と関連する遺構と思われる。

第11表 X区性格不明遺構一覧表

SX番号	グリッド	時期	形状	主軸方向	規模(m)	規模(m)	深さ(m)	遺物	切り合い
SX1	B10-22-23	弥生			1.5	(1.03)	0.17	弥生壺	
SX2欠番									
SX3	C10-3-4	不明	不整形				0.06	なし	SK13切られる
SX4	B10-24-9	弥生後期?	楕円形	N-85° -W	2.27	1.3	0.44	弥生土器多	SD3切られる
SX5	B10-24-14他	風倒木	不整形		2.7	2.4	0.75	なし	SD2切られる
SX6	C10-5-1他	近世?	長方形	N-80° -W	6.85	4.62	0.06	陶磁器、須恵器坏蓋、高坏	SK22・SD2
SX7	C10-4-10	不明			1.52	(0.58)	0.21	弥生土器細片	SU9切られる
SX8	C10-3-5	不明			(1.7)	(0.95)	0.26	なし	SK14切られる

SX1 (第46、47図)

グリッド;B10-22-23 切り合い関係;なし

時期;弥生時代後期後半 形状;- 主軸方向;-

規模;1.50×(1.03) m 深さ0.17m

覆土;褐色シルト質細粒砂(褐灰色土、灰褐色土ブロック)

出土遺物;弥生土器壺

所見;調査区西部南端で検出した遺構である。南側が調査区外に広がるため規模等は不明である。

覆土から焼土を検出した。所属時期は出土遺物からして弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物(第47図No.1)

No.1は広口壺である。口縁は大きく開き、端部を僅かに拡張する。肩部はなだらかである。整形は外面口縁がハケ、ミガキ、内面はハケである。弥生時代後期後半のものと考えられる。

SX4 (第46、47図)

グリッド;B10-24-9 切り合い関係;SD3に切られる

時期;弥生時代後期後半? 形状;楕円形 断面形態;皿状 主軸方向;N-85° -W

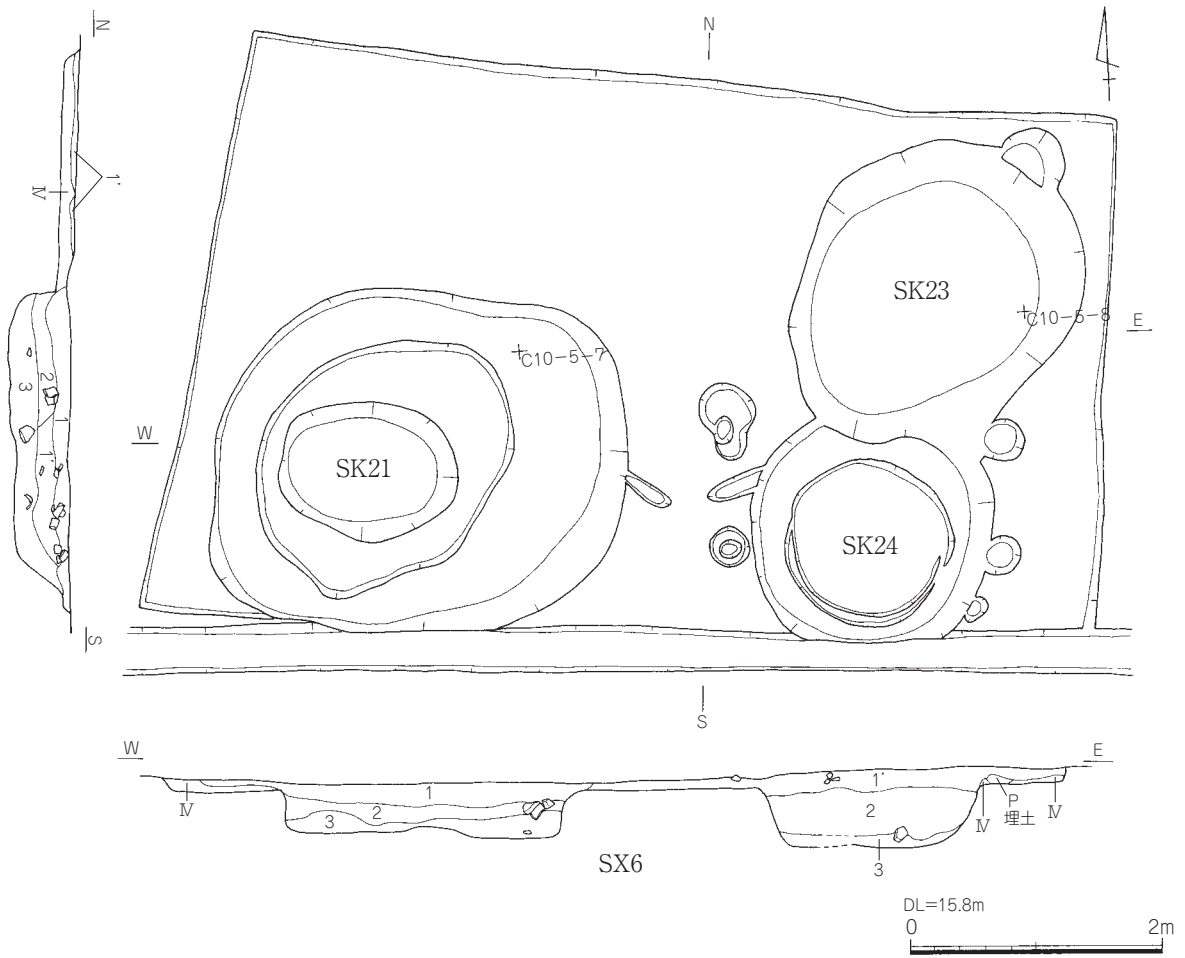
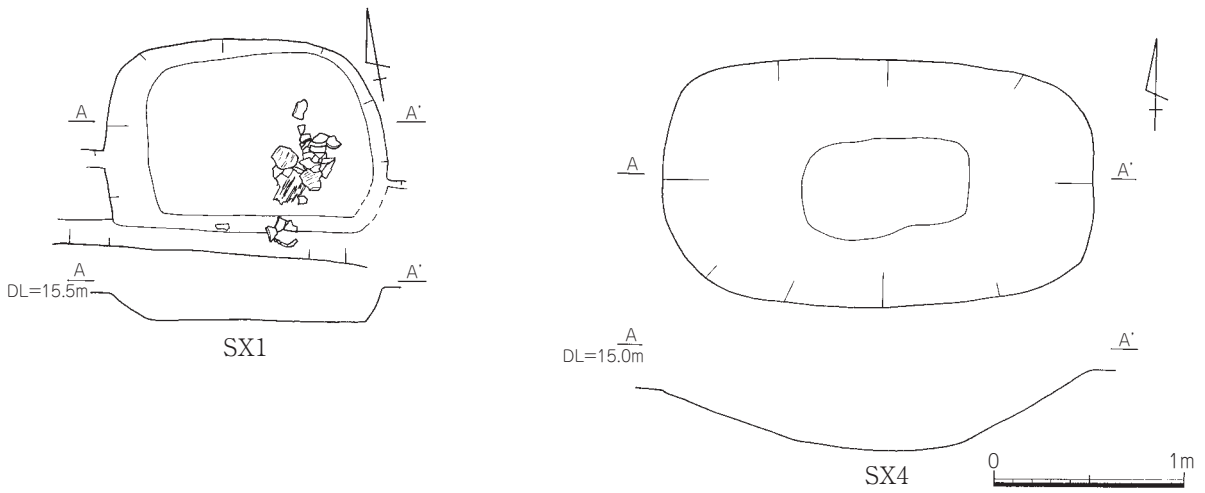
規模;2.27×1.30m 深さ0.44m

覆土; 1にぶい赤褐色シルト質細粒砂(黒褐色土混じり) 2褐灰色シルト質細粒砂 3褐灰色シルト質細粒砂(明褐色土、褐灰色土ブロック) 4灰褐色シルト質中粒砂 5明褐色シルト質中粒砂

出土遺物;弥生土器片600点程

所見;調査区やや東部北端で検出した遺構である。SD3に切られる。SD2に隣接する。風倒木痕に破壊されている可能性がある。所属時期は出土遺物からして、弥生時代後期後半の可能性ある。

出土遺物(第47図No.1、2)



- | | |
|---|--|
| <p>南北土層</p> <p>IV 褐色土</p> <p>1 灰褐色シルト質中粒砂</p> <p>1' 褐灰色シルト質細粒砂</p> <p>2 にぶい黄褐色シルト質細粒砂</p> <p>3 明褐色シルト質中粒砂</p> | <p>東西土層</p> <p>IV 褐色土</p> <p>1 明褐色シルト質中粒砂 5~8cm大の円礫
多量</p> <p>1' 黒褐色シルト質細粒砂</p> <p>2 暗褐色シルト質細粒砂</p> <p>3 暗灰褐色シルト質細粒砂</p> |
|---|--|

第46図 X区SX遺構図

No.1 は小型甕で、口縁が外傾する。整形は外面口縁がハケ、胴部がタタキ、内面はハケである。2は鉢の底部と考えられる。平底で体部はやや丸味を持って立ち上がる。整形は外面がナデ、ハケ、内面はハケ痕が顕著である。共に弥生時代後期後半と考えられる。

SX6 (第46、47図)

グリッド;C10-5-1他 切り合い関係;SK22、SD2を切る

時期;近世? 形状;長方形 主軸方向;N-80° -W

規模;6.85×4.62m 深さ0.06m

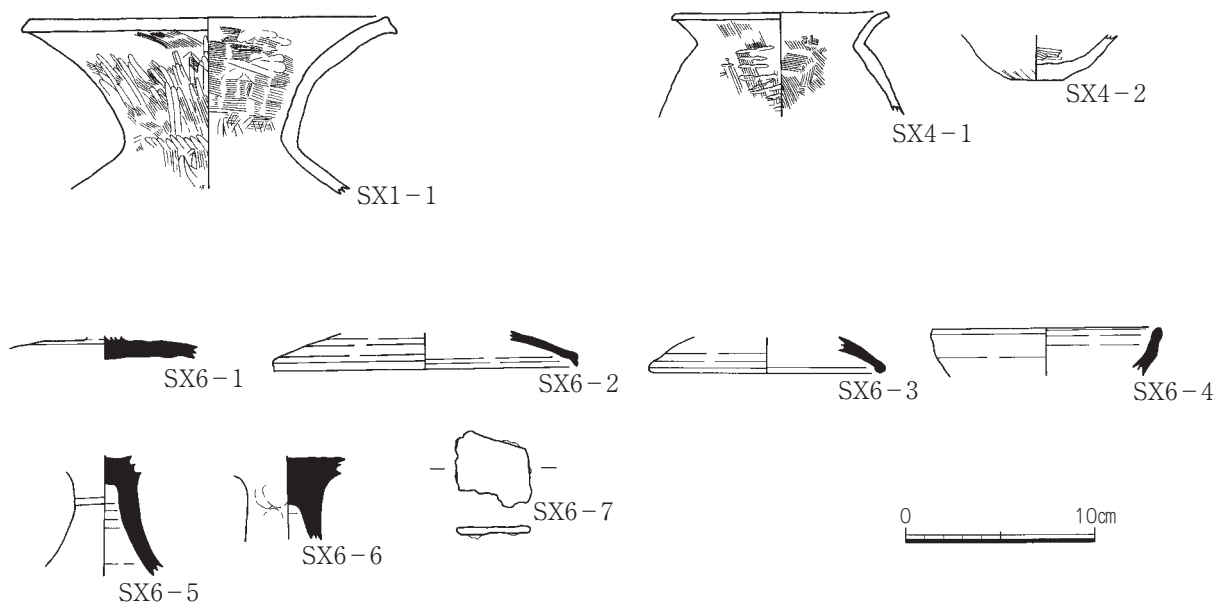
覆土;明褐色シルト質中粒砂ブロックに灰褐色シルト質細粒砂及び黒褐色シルト質細粒砂が混じる混合土

出土遺物;近世陶磁器、須恵器坏、蓋、高坏、甕片

所見;調査区東部南端で検出した遺構である。南側の一部が調査区外に広がる。SK21、SK23、SK24は同時期のもの、本遺構の付属施設と考えられる。SK22、SD2を切る。所属時期は判然としない。8C代の須恵器が比較的纏まって出土しているものの、出土状況写真、図面がないために古代の遺物が本遺構に伴うか全く不明で判断できない。SK21、23、24の近世ハンダ土坑等の関連で土間状の遺構の可能性があり、須恵器類はその際に破壊され混入した可能性が考えられる。

出土遺物(第47図No.1～7)

No.1 から6は須恵器である。1から3は坏蓋で1は鈕部分が欠損し、天井部は丸味を持たないものである。2も同様のもの端部が緩く屈曲する。3は天井部がやや丸味を持ち、端部は丸味を持つ。4は坏で口唇に丸味を持ち、腰部もやや丸味を持つ。5、6は高坏の脚部である。共に坏部が欠損する。6はやや摩耗し、焼成不良か。これらの須恵器は8C代の所産と考えられる。7は短冊形の鉄製品で刃部はなく、用途は不明である。近世陶磁器が僅かに出土しているものの割愛した。



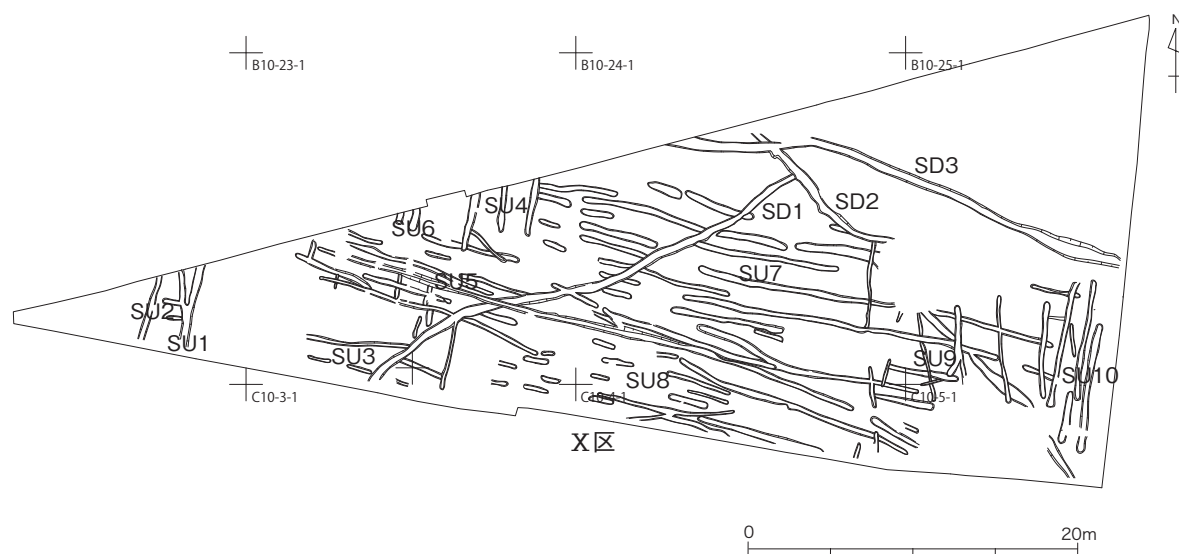
第 47 図 X区 SX 出土遺物実測図

第7節 溝状遺構

溝状遺構は5条検出した。いずれも時期は古代と考えられるが、遺構が調査区外に延びているため全容は判らない。SD1はIX SD4と連結する可能性があり古代の土地区割りにしていた可能性がある。

第12表 X区溝状遺構一覧表

SD番号	グリッド	時期	断面形態	主軸方向	規模長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	遺物	切り合い
SD1	B10-24-13他	古代	皿状	N-53° -E N-78° -E N-61° -E	(29.75)	0.38 ~ 0.65	0.09 ~ 0.11	須恵坏蓋	SD2切る、SB1P4切られる
SD2	B10-24-14他	古代	皿状	N-30° -W N-44° -W	(29.35)	0.36 ~ 0.73	0.06 ~ 0.22	なし	ST2切る、SD1・3、SX5・6切られる
SD3	B10-24-8他	古代?	皿状	N-68° -W N-89° -W	(25.5)	0.44 ~ 1.18	0.14 ~ 0.19	須恵碗、壺	SD2、SX4切る
SD4	B10-22-20他	古代?	皿状	N-6° -E	(6)	0.45 ~ 0.54	0.18	なし	ST1切る
SD5	B10-23-16他	古代?	箱形	N-17° -E	(7.6)	0.22 ~ 0.42	0.14 ~ 0.2	なし	ST1切る



第48図 X区SD・SU全体図

SD1 (第49図)

グリッド: B10-24-13他 切り合い関係: SD2を切る、SB1P4に切られる

時期: 古代 主軸方向: N-53° -E、N-78° -E、N-61° -E

規模: 長さ(29.75) m × 幅0.38 ~ 0.65m 深さ0.09 ~ 0.11m 断面形状: 皿状

覆土: にぶい赤褐色シルト質細粒砂(黒褐色土混じり)

出土遺物:須恵器、弥生高坏、ミニチュア土器

所見:調査区西部南端から中央部で検出した北東溝である。SD2を切る。SB1P4、多数の畝状遺構に切られる。南端が調査区外に広がるため全容は不明であるが、南側のⅨSD4と連結する可能性がある。所属時期は規模等からして古代と考えられる。

出土遺物(第49図No.1～3)

No.1は須恵器の部分破片のため、蓋か坏部か判然としない。古代のものと考えられる。2はミニチュア土器で手づくね成形で指頭圧痕を残す。高坏状を呈し、上部は欠損する。弥生時代のものと考えられる。3は弥生時代の高坏の脚部と考えられる。

SD2

グリッド:B10-24-14他 切り合い関係:ST2を切る、SD1・3、SX5・6に切られる

時期:古代 主軸方向:N-30° -W、N-44° -W

規模:長さ(29.35) m×幅0.36～0.73m 深さ0.06～0.22m 断面形状:皿状

覆土:暗赤灰色シルト質細粒砂(黒褐色土混じり)

出土遺物:なし

所見:調査区東部南端から中央部北端で検出した北西溝である。ST2を切る。SD1、SD3、SX5、SX6および多数の畝状遺構等に切られる。南北両端が調査区外に広がるため全容は不明である。所属時期は規模等からしてSD1と同時期と考えられ、古代の可能性はある。

SD3 (第49図)

グリッド:B10-24-8他 切り合い関係:SD2、SX4を切る

時期:古代? 主軸方向:N-68° -W、N-89° -W

規模:長さ(25.50) m×幅0.44～1.18m 深さ0.14～0.19m 断面形状:皿状

覆土:褐灰色シルト質細粒砂

出土遺物:須恵器碗、壺、甕

所見:調査区東端部から中央部北端で検出した北西溝である。SD2、SX4を切る。西部分は南方向にやや屈曲している。東北両端が調査区外に広がるため全容は不明である。所属時期は出土遺物からして古代の可能性のあるものの断定はできない。

出土遺物(第49図No.1～3)

No.1から3は須恵器で1は大型の碗と考えられる。腰部に丸味を持ち、回転ヘラケズリである。2は壺の肩部破片で肩部は屈曲する。自然釉がかかる。3は甕か壺の胴部破片である。外面は回転櫛調整、内面は円文タタキである。共に8C代の所産と考えられる。

SD4

グリッド:B10-22-20他 切り合い関係:ST1を切る

時期:古代? 主軸方向:N-6° -E

規模:長さ(6.00) m×幅0.45～0.54m 深さ0.18m 断面形状:皿状

覆土:褐色シルト質細粒砂(褐灰色土、灰褐色土ブロック)

出土遺物:なし

所見:調査区西部で検出した南北溝である。ST1を切る。南北両端が調査区外に広がるため全容は不明である。所属時期は遺物が出土していないため判然としないが、方位、規模からして古代の可能性はある。

SD5

グリッド:B10-23-16他 切り合い関係:ST1を切る

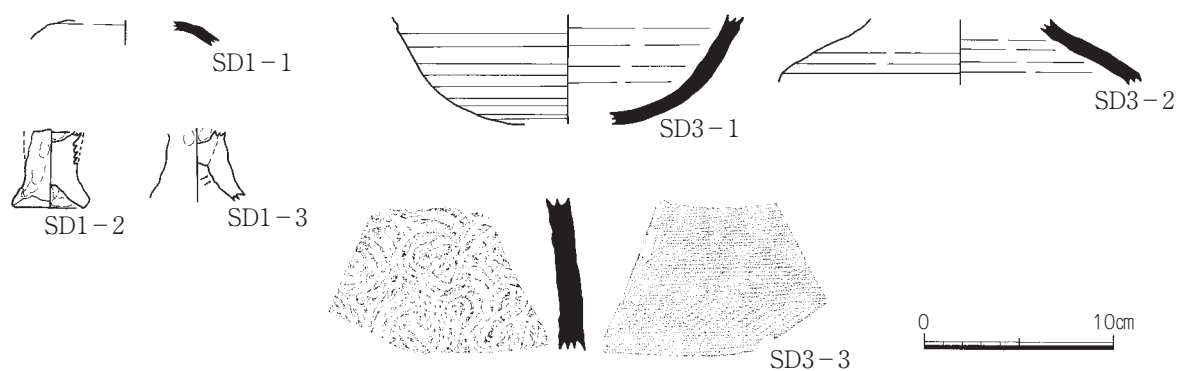
時期:古代? 主軸方向:N-17° -E

規模:長さ(7.60) m×幅0.22～0.42m 深さ0.14～0.20m 断面形状:箱形

覆土:褐色シルト質細粒砂(褐灰色土、灰褐色土ブロック)

出土遺物:なし

所見:調査区西部で検出した南北溝である。ST1を切る。南北両端が調査区外に広がるため全容は不明である。所属時期は遺物が出土していないため判然としないが、方位、規模からして古代の可能性はある。



第 49 図 X区 SD 出土遺物実測図

第8節 畝状遺構

当該畝状遺構は古代の畑地と考えられる。東西方向の畝状遺構はN-73° -W、南北方向はN-8° -Eに構成している。ただし、SU9は屈曲したり、湾曲したりしており方向が一定しない。特筆すべきことは調査区北東部のSD3の北側で畝状遺構を検出しなかったことである。

第13表 X区畝状遺構一覧表

SU番号	グリッド	時期	断面形態	畝本数	主軸方向	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	畝間距離(m)	遺物	切り合い
SU1	B10-22-24他	古代	皿状	3	N-14° -E	(5)	0.32 ~ 0.55	0.07	2.4	弥生鉢	SU2切られる
SU2	B10-22-20他	古代	皿状	3	N-81° -W	(2.8)	0.28	0.04	0.95	なし	SU1切る
SU3	B10-23-22他	古代	皿状	3	N-77° -W	6.3	0.3	0.05	0.75 ~ 1.22	なし	SD1切る
SU4	B10-23-14他	古代	皿状	8	N-10° -E	4.3	0.3 ~ 0.55	0.05	1.74	なし	SU5切られる
SU5	B10-23-19他	古代	皿状	8	N-75° -W	30	0.2 ~ 0.5	0.08	0.75 ~ 0.95	須恵坏蓋	SD1・SU4切る
SU6	B10-23-13	古代	皿状	2	N-11° -E	(1.5)	0.4	0.1	0.95	なし	
SU7	B10-24-18他	古代	皿状	8	N-80° -W	22	0.3 ~ 0.65	0.06	0.8 ~ 1.75	なし	SD1切る、SU9・10切られる
SU8	C10-4-3他	古代	皿状	6	N-76° -W	18	0.17 ~ 0.45	0.06	0.65 ~ 2.83	なし	SD1切る
SU9	B10-25-21他	古代	皿状	5	N-6° -W N-4° -E	8.7	0.17 ~ 0.4	0.07	0.75 ~ 2.55	須恵坏蓋	SU7切る
SU10	B10-25-23他	古代	皿状	5	N-12° -E	7.75	0.19 ~ 0.5	0.1	0.7 ~ 1.3	なし	SK19・SU7切る

SU1 (第50図)

グリッド: B10-22-24他 切り合い関係: SU2に切られる

時期: 古代 主軸方向: N-14° -E

畝本数: 3 規模: 最大長(5.00) m × 幅0.32 ~ 0.55m 深さ0.07m 断面形状: 皿状

覆土: 褐色シルト質細粒砂(褐灰色土、灰褐色土ブロック)

出土遺物: 弥生土器鉢

所見: 調査区西部で検出した南北方向の溝3条の畝状遺構である。SU2に切られる。溝は北側、南側ともに調査区外に広がる。所属時期は明確な遺物は出土していないものの他のSUと同時期と考えられ、7Cから8C代の可能性がある。

出土遺物(第50図No.1)

No.1は弥生土器鉢である。平底で腰部にやや丸味を持ち、体部は余り開かない。整形は外面がタタキ、小さな亀裂が入る。内面はハケである。弥生時代後期後半の所産と考えられるが、混入品である。

SU2

グリッド: B10-22-20他 切り合い関係: SU1を切る

時期: 古代 主軸方向: N-81° -W

畝本数: 3 規模: 最大長(2.80) m × 幅0.28m 深さ0.04m 断面形状: 皿状

覆土:褐灰色シルト質細粒砂(褐色土、暗褐色土ブロック)

出土遺物:なし

所見:調査区西部で検出した東西方向の溝3条の畝状遺構である。SU1を切る。所属時期は明確な遺物は出土していないものの他のSUと同時期と考えられ、7Cから8C代の可能性がある。

SU3

グリッド:B10-23-22他 切り合い関係:SD1を切る

時期:古代 主軸方向:N-77° -W

畝本数:3 規模:最大長6.30m×幅0.30m 深さ0.05m 断面形状:皿状

覆土:褐灰色シルト質細粒砂(褐色土、暗褐色土ブロック)

出土遺物:なし

所見:調査区西部から中央部の南端で検出した東西方向の溝3条の畝状遺構である。SD1を切る。所属時期は明確な遺物は出土していないものの他のSUと同時期と考えられ、7Cから8C代の可能性がある。

SU4

グリッド:B10-23-14他 切り合い関係:SU5に切られる

時期:古代 主軸方向:N-10° -E

畝本数:8 規模:最大長4.30m×幅0.30～0.55m 深さ0.05m 断面形状:皿状

覆土:褐色シルト質細粒砂(褐灰色土、灰褐色土ブロック)

出土遺物:なし

所見:調査区西部から中央部で検出した南北方向の溝8条の畝状遺構である。SU5に切られる。北側の3条が調査区外に広がる。所属時期は明確な遺物は出土していないものの他のSUと同時期と考えられ、7Cから8C代の可能性がある。

SU5 (第50図)

グリッド:B10-23-19他 切り合い関係:SD1、SU4を切る

時期:古代 主軸方向:N-75° -W

畝本数:8 規模:最大長30.0m×幅0.20～0.50m 深さ0.08m 断面形状:皿状

覆土:褐灰色シルト質細粒砂(褐色土、暗褐色土ブロック)

出土遺物:須恵器坏蓋

所見:調査区西部から中央部で検出した東西方向の溝8条の畝状遺構である。SD1、SU4を切る。30mを測る最長の溝は区画溝の可能性がある。所属時期は須恵器1点のみであるが、7Cから8C代の可能性がある。

出土遺物(第50図No.1)

No.1は須恵器坏蓋の破片である。端部も丸味を持ち、かえりも丸味を持つ。天井部は不明である。7C後半の所産と考えられる。

SU6

グリッド;B10-23-13 切り合い関係;なし

時期;古代 主軸方向;N-11° -E

畝本数;2 規模;最大長(1.50) m×幅0.40m 深さ0.10m 断面形状;皿状

覆土;褐色シルト質細粒砂(褐灰色土、灰褐色土ブロック)

出土遺物;なし

所見;調査区西部北端で検出した南北方向の溝2条の畝状遺構である。北側が調査区外に広がる。所属時期は明確な遺物は出土していないものの他のSUと同時期と考えられ、7Cから8C代の可能性がある。

SU7

グリッド;B10-24-18他 切り合い関係;SD1を切る、SU9・10に切られる

時期;古代 主軸方向;N-80° -W

畝本数;8 規模;最大長22.0m×幅0.30～0.65m 深さ0.06m 断面形状;皿状

覆土;褐灰色シルト質細粒砂(褐色土、暗褐色土ブロック)

出土遺物;なし

所見;調査区中央部北側から東部で検出した東西方向の溝8条の畝状遺構である。SD1を切り、SU9・10に切られる。所属時期は明確な遺物は出土していないものの他のSUと同時期と考えられ、7Cから8C代の可能性がある。

SU8

グリッド;C10-4-3他 切り合い関係;SD1を切る

時期;古代 主軸方向;N-76° -W

畝本数;6 規模;最大長18.0m×幅0.17～0.45m 深さ0.06m 断面形状;皿状

覆土;褐灰色シルト質細粒砂(褐色土、暗褐色土ブロック)

出土遺物;なし

所見;調査区中央部南側から東部で検出した東西方向の溝6条の畝状遺構である。SD1を切る。所属時期は明確な遺物は出土していないものの他のSUと同時期と考えられ、7Cから8C代の可能性がある。

SU9 (第50図)

グリッド;B10-25-21他 切り合い関係;SU7を切る

時期;古代 主軸方向;N-6° -W、N-4° -E

畝本数;5 規模;最大長8.70m×幅0.17～0.40m 深さ0.07m 断面形状;皿状

覆土;-

出土遺物;須恵器坏蓋、坏

所見;調査区東部中央から南側で検出した南北方向の溝6条の畝状遺構である。SU7を切る。一部が南側の調査区外に広がる。

所属時期は須恵器から、7Cから8C代の可能性がある。

出土遺物(第50図No.1、2)

No.1は須恵器坏蓋と考えられる。天井部はやや膨らみを持つ。2は須恵器坏身である。口唇は丸味を持ち、腰部はやや丸味を持つ。共に7Cから8Cと考えられる。

SU10

グリッド;B10-25-23他 切り合い関係;SK19、SU7を切る

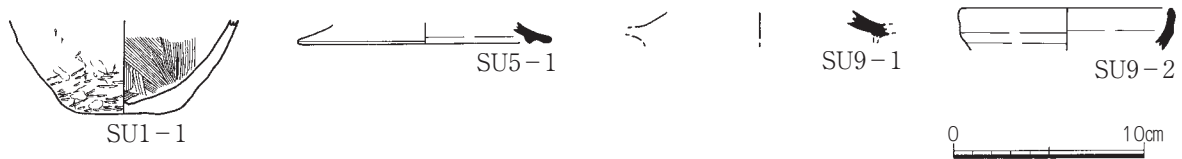
時期;古代 主軸方向;N-12° -E

畝本数;5 規模;最大長7.75m×幅0.19～0.50m 深さ0.10m 断面形状;皿状

覆土;暗赤灰色シルト質細粒砂(黒褐色土ブロック)

出土遺物;なし

所見;調査区東端部中央から南側で検出した南北方向の溝5条の畝状遺構である。SK19、SU7を切る。所属時期は明確な遺物は出土していないものの他のSUと同時期と考えられ、7Cから8C代の可能性がある。



第 50 図 X区 SU 出土遺物実測図

第9節 柱穴跡

柱穴跡は約60基検出した。特徴としては、調査区北東部のSD3の北側と、西部とで比較的多くの柱穴跡を検出したことである。中央部は畝状遺構で占められ、柱穴跡は僅かであった。出土遺物は少なかった。

第14表 X区柱穴跡一覧表

P番号	時期	形状	規模(m)	深さ(m)	遺物	切り合い
B10-22-24P4	古代	円形	径0.52	0.18	須恵坏蓋	
B10-22-25P1	不明	円形	径0.37	0.23	弥生壺	

B10-22-24P4 (第51図)

グリッド;B10-22-24 切り合い関係;なし

時期;古代 形状;円形 断面形態;皿状

規模;径0.52m × 深さ0.18m

覆土;にぶい赤褐色シルト質細粒砂(黒褐色土混じり)

出土遺物;須恵器坏蓋

所見;調査区西部南端で検出した柱穴である。B10-22-24P3・P5と切り合うが先後関係は不明である。所属時期は出土遺物からして7Cから8Cと考えられる。

出土遺物(第51図No.1、2)

No.1は須恵器坏蓋で、鈕が付くものと考えられるが欠損する。天井部は回転ヘラケズリで平らである。7Cから8Cのものか。2は弥生土器甕で幾つかの柱穴の切り合いがあり、混入品であろう。

B10-22-25P1 (第51図)

グリッド;B10-22-25 切り合い関係;なし

時期;不明 形状;円形

規模;径0.37m × 深さ0.23m

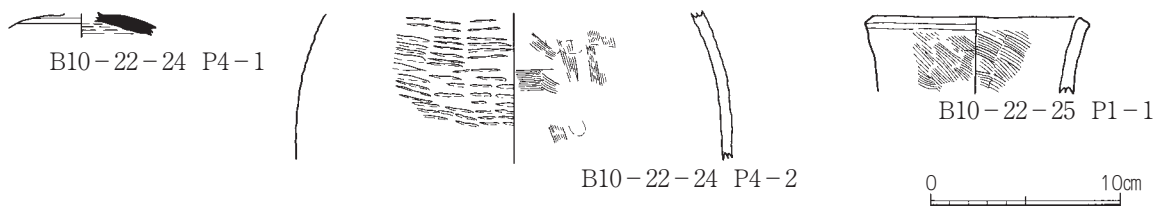
覆土;にぶい赤褐色シルト質細粒砂(黒褐色土混じり)

出土遺物;弥生土器壺

所見;調査区西部中央で検出した柱穴である。所属時期は弥生土器が出土しているものの判然としない。

出土遺物(第51図No.1)

No.1は弥生土器長頸壺の口縁部と考えられる。内外面共にハケ調整である。



第51図 X区柱穴跡出土遺物実測図

第10節 包含層出土遺物

須恵器(第52図No.1～8)

No.1から8は須恵器である。その中で1から3は坏蓋である。1は天井部に丸味があり、回転ヘラケズリを施す。端部は丸味を持ち、かえりは反り、やや尖る。2、3は天井部が平らで回転ヘラケズリを施す。4は高台付坏で高台断面は四角で端部が平坦である。5は横瓶の肩部分と考えられ、肩部はなだらかである。6、7は口唇が凹線状または突帯状になる壺と甕である。8は短頸壺の底部の可能性があり。底部は丸底で、底部内面に自然釉がかかる。時期は1が7C後半、4は7Cから8C、他のものは6C後半から7C前半のものと考えられる。

土師器(第52図No.9、10)

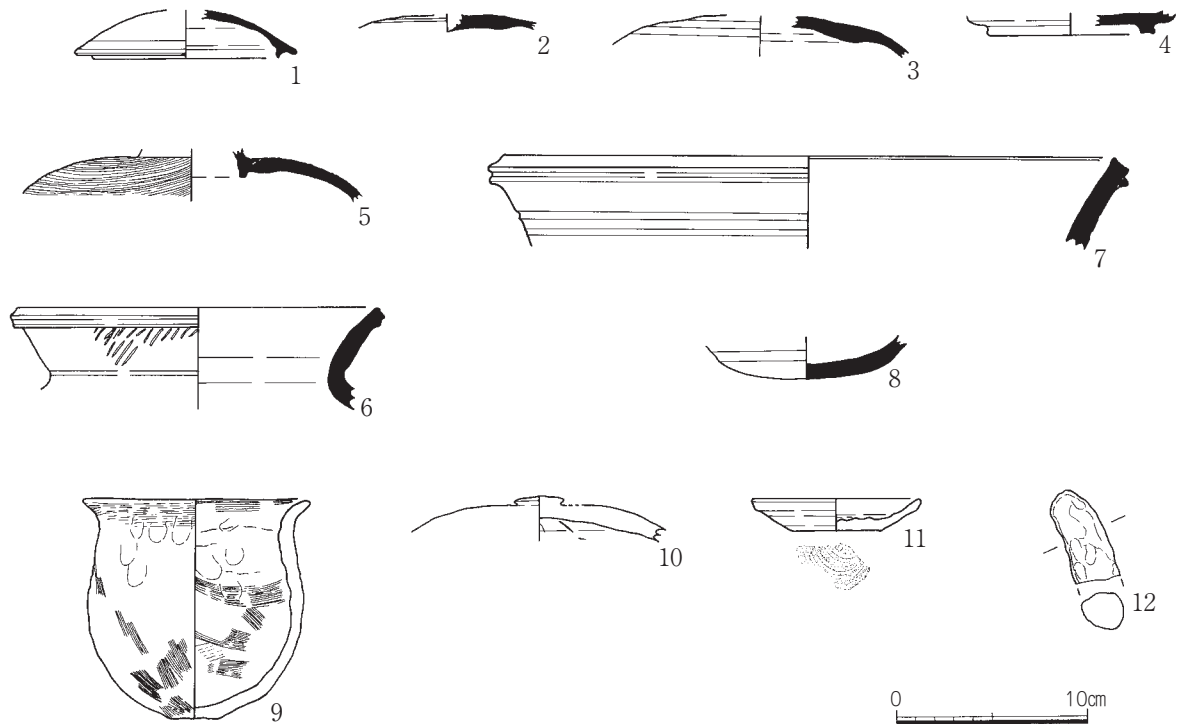
No.9は壺で口縁が短く外反し、口唇はやや丸味を持つ。体部下半に丸味を持ち、丸底である。整形は外面口縁がハケ、ナデ、体部が指頭、ナデである。内面は指頭、ハケ、ナデである。10は坏蓋で扁平な鈕を有する。天井部はやや扁平である。全体に摩耗する。9は6Cから7C、10は8C代と考えられる。

かわらけ(第52図No.11)

No.11は灯明皿である。体部は大きく開く。内面底はロクロ目が顕著で、底部は回転糸切りである。近世のものである。

土製品(第52図No.12)

No.12は支脚受け部の突起部分である。整形は指頭、ナデである。弥生時代後期のものか。



第52図 X区包含層出土遺物実測図

第15表 X区遺物観察表

図版番号	遺構名	遺物番号	種別	器種・部位	口径(cm)	器高	底径、重(g)	特徴	胎土、材質
第32図	ST1	1	弥生土器	壺	(16.6)			二重口縁壺、口縁直立気味、内外面ハケ	砂粒多量
第32図	ST1	2	弥生土器	壺	(18.8)			広口壺、口縁大きく外反、口縁内外粗いヨコハケ、外面細かいハケ、内面ハケ、ミガキ	砂粒少量
第32図	ST1	3	弥生土器	壺	(16.3)			広口壺、口縁大きく外反、口縁凹線状に凹む、内外面ハケ	砂粒少量
第32図	ST1	4	弥生土器	壺	14.0			広口壺、素口縁、口縁大きく外反、肩部張る、内外面ハケ	砂粒微量
第32図	ST1	5	弥生土器	甕	(14.4)			口縁外傾、外面口縁ハケ、胴部タタキ、内面ハケ	砂粒微量
第32図	ST1	6	弥生土器	甕	(14.0)			小型、口縁外傾、外面口縁ナデ、胴部タタキ、内面ハケ	砂粒微量
第32図	ST1-No8	7	弥生土器	壺・底部			7.4	壺底部か、平底、体部やや丸味を持ち大きく開く、やや落剥、外面タタキ、ナデ	砂粒多量
第32図	ST1	8	弥生土器	甕・底部			3.8	甕底部か、平底、大きく開く、外面タタキ、内面ハケ	砂粒少量
第32図	ST1	9	弥生土器	甕・底部			4.6	甕底部か、やや丸底気味、大きく開く、外面タタキ、ナデ、内面ハケ、ナデ	砂粒少量
第32図	ST1-No7	10	弥生土器	甕・底部			4.0	平底、体部僅かに開く、内外面ハケ	砂粒少量
第32図	ST1	11	弥生土器	鉢	(31.0)			大型鉢、片口部、口縁、体部直線的にやや開く、外面口縁ナデ、体部タタキ、内面ハケ、ナデ	砂粒多量
第32図	ST1-P2	12	弥生土器	鉢	23.7	13.4		大型鉢、口縁括れ外反、体部丸味を持つ、底部丸底、外面口縁ハケ、ナデ、体部ハケ、内面ハケ、ミガキ	砂粒極微量
第32図	ST1	13	弥生土器	鉢	17.6	7.5		大型鉢、丸底、体部開く、外面タタキ、ナデ、内面ハケ	砂粒微量
第32図	ST1	14	弥生土器	鉢	(13.4)	5.5	(3.4)	平底、体部僅かに丸味を持ち開く、外面ナデ、内面ハケ	砂粒極微量
第32図	ST1-No5	15	弥生土器	鉢	11.5	9.4		尖底、余り開かず、器高が高い、外面ハケ、内面ハケ、ミガキ	砂粒少量
第32図	ST1-No6	16	弥生土器	鉢	(11.2)	9.4	1.2	尖底気味の小さな底部、深い、余り開かず、口縁直立気味、口縁内外面ヨコハケ、内面ハケ、ミガキ	砂粒少量
第32図	ST1	17	弥生土器	鉢	(9.5)	6.8	3.0	小型、丸底気味の平底、やや深い、体部余り開かず、外面タタキ、ナデ、内面ハケ、ナデ	砂粒少量
第32図	ST1-No2	18	弥生土器	鉢	8.8	5.9	1.8	小型、尖底気味、体部やや開く、内外面ナデ、表面小さな亀裂多数、手づくね	砂粒少量
第32図	ST1	19	弥生土器	鉢	8.9	5.4	2.6	小型、やや深い、丸底気味、体部余り開かない、外面ナデ、下半ハケ、内面ハケ	砂粒少量

図版番号	遺構名	遺物番号	種別	器種・部位	口径(cm)	器高	底径、重(g)	特徴	胎土、材質
第32図	ST1	20	弥生土器	鉢	7.1	4.0	1.6	小型、丸底気味、体部余り開かない、内外面ナデ、指頭、表面小さな亀裂多数、手づくね?	砂粒少量
第32図	ST1-No4	21	弥生土器	鉢	8.9	3.6		完形、小型、浅い、皿状、体部丸味を持ち開く、丸底、内外面ハケ、ナデ、指頭	砂粒少量
第32図	ST1-No9	22	弥生土器	甕・底部			0.9	甕底部か、尖底気味、体部大きく開く、外面タタキ、ナデ、内面ハケ	砂粒少量
第32図	ST1-No10	23	弥生土器	鉢・底部			1.1	鉢底部か、尖底、外面ハケ、内面ハケ、ナデ	砂粒極微量
第32図	ST1	24	弥生土器	鉢・底部			4.4	鉢底部か、平底、体部下半やや丸味、上半僅かに丸味を持ち立ち上がる、外面タタキ、ハケ、ナデ、内面ハケ	砂粒少量
第32図	ST1	25	弥生土器	鉢・底部			(5.4)	鉢底部か、体部下半丸味を余り持たず、外面ナデ、内面ハケ、ナデ	砂粒微量
第32図	ST1	26	弥生土器	鉢・底部			1.6	鉢底部か、小さい平底、体部やや開く、外面タタキ、内面ハケ	砂粒微量
第33図	ST1	27	弥生土器	高坏	(22.8)			大型、口縁外反、腰部やや屈曲、内外面やや落剥、ナデ	砂粒少量
第33図	ST1	28	土製品	円盤	径6.1、厚1.1、孔径0.9		45.9g	扁平、中心に焼成前円孔、ナデ整形	砂粒極微量
第33図	ST1	29	土製品	支脚	長14.1、最大幅8.4			完形、受け部突起2つ傾く、脚部裾やや開く、指頭、ナデ整形	砂粒少量
第33図	ST1	30	弥生土器	支脚				受け部突起、指頭、ナデ整形	砂粒少量
第33図	ST1	31	弥生土器	支脚				受け部突起、指頭、ナデ整形	砂粒少量
第33図	ST1	32	石器	磨石	長18.5、幅12.5、厚9.5		2600g	楕円礫、一面のみ擦痕、後は敲打痕	砂岩
第35図	ST2	1	弥生土器	壺	(20.4)			二重口縁壺、口縁直立気味、山形斜格子文、内外面ハケ	砂粒少量
第35図	ST2	2	弥生土器	壺	(27.0)			二重口縁壺、口縁直立気味、波状文、円形刺突、内外面ハケ	砂粒少量
第35図	ST2	3	弥生土器	壺	(24.5)			広口壺、口縁大きく外反、内外面ハケ	砂粒少量
第35図	ST2	4	弥生土器	甕	(13.8)			小型、口縁僅かに短く外反、外面口縁ナデ、胴部タタキ、ハケ、内面口縁指頭、ハケ、胴部ハケ	砂粒少量
第35図	ST2	5	弥生土器	甕	(15.4)			小型、口縁外傾、外面口縁タタキ、ハケ、胴部タタキ、内面口縁指頭、ハケ、胴部ハケ	砂粒少量
第35図	ST2	6	弥生土器	甕	(17.0)			口縁外反、内外面ハケ、器肉薄い	砂粒少量
第35図	ST2	7	弥生土器	甕・底部				甕底部か、やや丸底気味、体部大きく開く、外面ミガキ、ナデ、内面ハケ	砂粒少量
第35図	ST2	8	弥生土器	甕・底部			(2.4)	甕底部か、小さな平底、体部開く、外面ミガキ、ナデ、内面ハケ	砂粒少量

図版番号	遺構名	遺物番号	種別	器種・部位	口径 (cm)	器高	底径、重 (g)	特徴	胎土、材質
第35図	ST2	9	弥生土器	甕・胴部				木葉痕、胴部下半か	砂粒微量
第35図	ST2	10	弥生土器	鉢	(8.0)			甕形、小型、口縁外傾、体部やや丸味、内外面ハケ	砂粒微量
第35図	ST2	11	弥生土器	壺				小型丸底壺？肩部段状になる、頸部僅かに開く、体部丸味、外面丁寧なミガキ、内面ハケ	砂粒微量
第35図	ST2	12	弥生土器	鉢	11.8	7.0		ほぼ完形、碗状、底部やや尖底気味の丸底、外面タタキ、内面ハケ	砂粒少量
第35図	ST2	13	弥生土器	鉢	9.2	6.3		ほぼ完形、小型、碗状、底部やや尖底気味の丸底、外面ナデ、下半タタキ、ハケ、内面ハケ	砂粒少量
第35図	ST2	14	弥生土器	鉢	(9.7)	6.7	2.6	小型、碗状、やや深い、平底、外面ナデ、内面ハケ、ナデ	砂粒少量
第35図	ST2	15	弥生土器	鉢	(9.8)	6.4	3.6	小型、碗状、体部丸味、口縁内湾気味、平底、外面タタキ、内面ハケ	砂粒少量
第35図	ST2	16	弥生土器	鉢	8.4	3.9	2.0	ほぼ完形、小型、浅い、体部開く、底部尖り気味の平底、外面指頭、ナデ、小さな亀裂、内面ハケ	砂粒少量
第35図	ST2	17	弥生土器	鉢・底部			2.8	小さな平底、体部開く、外面タタキ、内面ハケ	砂粒少量
第35図	ST2	18	弥生土器	鉢・底部				鉢底部か、丸底、体部丸味、外面タタキ、ミガキ、内面ハケ	砂粒少量
第35図	ST2	19	弥生土器	高坏・裾部			(13.2)	裾大きく開く、整形落剥のため不明	砂粒多量
第35図	ST2	20	土製品	支脚				受け部突起、指頭、ナデ整形	砂粒少量
第43図	SG1	1	弥生土器	壺	(17.0)	(71.0)	10.2	大型壺、口縁短く外反、端部欠損、頸部刻み突帯、肩部張る、最大径胴部上半53.2cm、下半すばまる、底部平底、外面タタキ、ハケ、内面ハケ	砂粒多量
第43図	SG2	1	弥生土器	壺	(16.7)	35.9	5.5	広口壺、下膨れ、口縁外反、胴部丸味、最大径胴部中央25.5cm、平底、外面口縁ハケ、胴部タタキ、ハケ、内面ハケ	砂粒多量
第45図	SK4	1	土師器	鉢	7.8	3.2		小型、皿状、丸底、外面指頭顕著、底僅かにハケ、内面指頭、ナデ、小さな亀裂有り、手づくねか	砂粒微量
第45図	SK6	1	弥生土器	鉢	(10.3)	6.8		やや小型、碗状、やや深い、尖底気味、外面上半ナデ、下半ヘラナデ、内面ハケ	砂粒少量
第45図	SK7	1	弥生土器	壺	(20.4)			広口壺、口縁大きく外反、内外面ハケ	砂粒少量
第45図	SK7	2	弥生土器	鉢	(16.0)			碗状、外面タタキ、内面ハケ	砂粒少量
第45図	SK8	1	弥生土器	甕	(18.2)			口縁外反、口唇丸味、肩部やや張る、輪積み痕、外面口縁ナデ、体部タタキ？、ハケ、内面指頭、ハケ、体部下半煤付着	砂粒少量

図版番号	遺構名	遺物番号	種別	器種・部位	口径(cm)	器高	底径、重(g)	特徴	胎土、材質
第45図	SK8	2	石器	叩石?	長(10.5)、 幅(6.0)、厚 (1.9)		(176.6g)	裏面は破損、一部自然面を残す、他は敲打痕、両端部剥離、右側縁剥離	緑色岩
第45図	SK16	1	弥生土器	壺	(27.0)			広口壺、口縁大きく開く、口唇刻み、内外面口縁ハケ、ミガキ	砂粒少量
第45図	SK16	2	弥生土器	甕	(17.8)			口縁外傾、外面口縁ハケ、胴部タタキ、内面ハケ	砂粒微量
第45図	SK19	1	弥生土器	甕・胴部				外面頸部ハケ、胴部タタキ、内面口縁ハケ、胴部ナデ	砂粒少量
第45図	SK19	2	弥生土器	甕・胴部				外面頸部ハケ、胴部タタキ、下半ハケ、内面口縁ハケ、胴部ハケ、ナデ	砂粒少量
第45図	SK19	3	弥生土器	甕・底部			(3.0)	平底、外面タタキ、内面ナデ	砂粒少量
第45図	SK19	4	土製品	支脚・脚部			(8.2)	裾部のみ中空、指頭	砂粒少量
第45図	SK22	1	弥生土器	甕	(19.2)			口縁外傾、外面タタキ、内面ナデ	砂粒多量
第45図	SK22	2	弥生土器	甕・底部			(2.1)	小さな平底、外面タタキ、ハケ、内面ハケ	砂粒少量
第45図	SK27	1	弥生土器	甕	(13.4)			小型、口縁外傾、外面口縁ハケ、ナデ、胴部タタキ、下半ハケ、内面ハケ、下半ナデ	砂粒微量
第45図	SK27	2	弥生土器	甕	(14.8)			小型、口縁外反、外面タタキ、内面ハケ	小礫多量
第47図	SX1	1	弥生土器	壺	18.8			広口壺、口縁大きく開く、端部僅かに拡張、肩部ならぬ、外面口縁ハケ、ミガキ、内面ハケ	砂粒少量
第47図	SX4	1	弥生土器	甕	(11.2)			小型、口縁外傾、外面口縁ハケ、胴部タタキ、内面ハケ	砂粒少量
第47図	SX4	2	弥生土器	鉢・底部			(2.6)	鉢底部か、平底、体部はやや丸味を持って立ち上がる、外面ナデ、ハケ、内面ハケ痕顕著	砂粒微量
第47図	SX6	1	須恵器	坏蓋				鈕部分欠損、天井部丸味を持たない	精良
第47図	SX6	2	須恵器	坏蓋	(16.0)			天井部丸味を持たない、端部緩く屈曲	精良
第47図	SX6	3	須恵器	坏蓋	(12.0)			天井部やや丸味を持つ、端部丸味	精良
第47図	SX6	4	須恵器	坏	(12.0)			口唇丸味、腰部やや丸味	精良
第47図	SX6	5	須恵器	高坏・脚部				坏部欠損、裾部やや開く、自然釉僅かにかかる	精良
第47図	SX6	6	須恵器	高坏・脚部				坏部欠損、やや摩耗、焼成不良?	精良
第47図	SX6	7	鉄製品	不明鉄製品	長(4.1)、幅 4.0、厚0.4		(9.8g)	扁平、刃部なし	鉄
第49図	SD1	1	須恵器	坏蓋				部分破片のため、蓋か坏部か判然としない	精良
第49図	SD1	2	弥生土器	ミニチュア土器・脚部			3.5	手づくね、高坏状、上部は欠損、指頭	砂粒少量
第49図	SD1	3	弥生土器	高坏・脚部				高坏脚部破片、中空、ナデ	砂粒少量

図版番号	遺構名	遺物番号	種別	器種・部位	口径 (cm)	器高	底径、重 (g)	特徴	胎土、材質
第49図	SD3	1	須恵器	碗				大型、腰部丸味、回転ヘラケズリ	精良
第49図	SD3	2	須恵器	壺・肩部				肩部破片、肩部屈曲する、自然釉	精良
第49図	SD3	3	須恵器	甕・胴部				甕か壺の胴部破片、外面回転櫛調整、内面 凹文タタキ	精良
第50図	SU1	1	弥生土器	鉢・底部			(5.2)	平底、腰部やや丸味、体部余り開かない、外 面タタキ、小さな亀裂、内面ハケ	砂粒少量
第50図	SU5	1	須恵器	坏蓋	(13.4)			端部丸味、かえりも丸味、天井部不明	精良
第50図	SU9	1	須恵器	坏蓋				天井部やや膨らみ	精良
第50図	SU9	2	須恵器	坏	(11.0)			口縁ほぼ直立、口唇丸味、腰部やや丸味	精良
第51図	B10-22- 24-P4	1	須恵器	坏蓋				鈕部分欠損、天井部丸味を持たない、回転 ヘラケズリ	精良
第51図	B10-22- 24-P4	2	弥生土器	甕・胴部				外面タタキ、内面ハケ、ナデ	砂粒少量
第51図	B10-22- 25-P1	1	弥生土器	壺	(11.0)			長頸壺か、内外面ハケ	砂粒少量
第52図	包含層	1	須恵器	坏蓋	(9.8)			天井部丸味、回転ヘラケズリ、端部丸味、か えり反り、やや尖る	精良
第52図	包含層	2	須恵器	坏蓋				天井部平坦、回転ヘラケズリ	精良
第52図	包含層	3	須恵器	坏蓋				天井部平坦、回転ヘラケズリ	精良
第52図	包含層	4	須恵器	高台坏・底 部			(8.8)	高台付坏、高台四角、高台端部平坦	精良
第52図	包含層	5	須恵器	横瓶・肩部				肩部なだらか	白色鈹物 粒少量
第52図	包含層	6	須恵器	壺	(19.0)			口唇凹線状、肩部張る	白色鈹物 粒少量
第52図	包含層	7	須恵器	甕	(32.2)			口唇突帯状、頸部やや外傾	精良
第52図	包含層	8	須恵器	小壺・底部				短頸壺の底部か、丸底、底部内面自然釉	精良
第52図	包含層	9	土師器	壺	(12.0)	11.6		口縁短く外反、口唇やや丸味、体部下半丸 味、丸底、外面口縁ハケ、ナデ、体部指頭、ナ デ、内面指頭、ハケ、ナデ	砂粒、白色 鈹物粒少 量
第52図	包含層	10	土師器	坏蓋				扁平な鈕、天井部やや扁平、摩耗する	砂粒微量
第52図	包含層	11	かわらけ	小皿	(8.8)	1.7	(4.6)	灯明皿、体部大きく開く、内面底ロクロ目 顕著、底部回転糸切り	精良
第52図	包含層	12	土製品	支脚				受け部突起、指頭、ナデ整形	砂粒多量

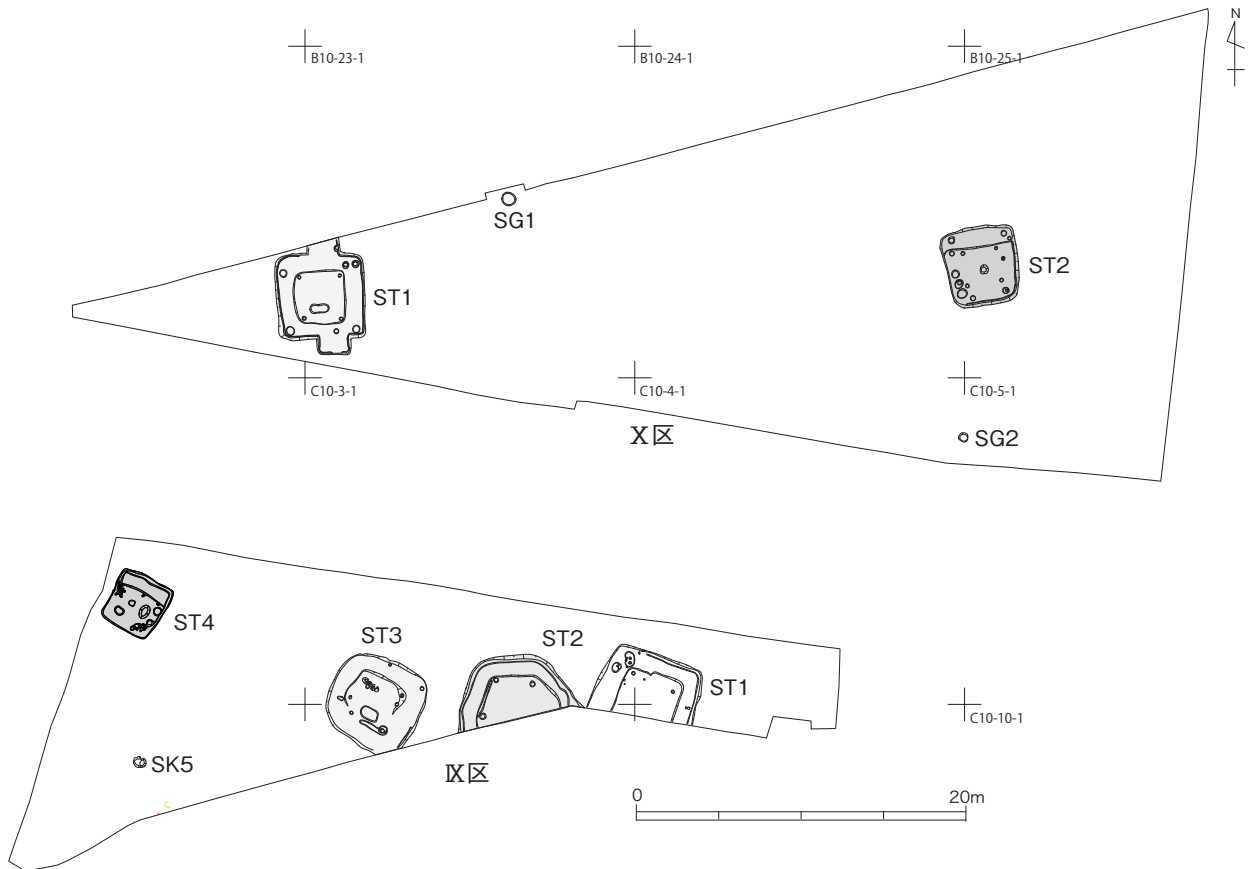
第Ⅲ章 まとめ

第1節 弥生時代について

Ⅸ、Ⅹ区は祈年遺跡で遺構検出状況からして北東端に位置すると考えられる。遺構の密集度はやや低く、竪穴建物跡6軒、壺棺墓2基、土坑は弥生時代と確実に判断できるものは2基のみであった。他にも幾つか弥生時代の遺物を出土する遺構を検出しているものの、不確実なものが多いため除外した。

竪穴建物跡は僅か6軒にも関わらず、平面形は多様である。またⅨ区ST1、ST2は極めて隣接していることから、近接した時期にも関わらず時間的差異が存在しているようである。

以下では、Ⅸ区の竪穴建物跡STは略してⅨST1、Ⅹ区はXST1と言う具合に略して表記する。



ST番号	グリッド	時期	形状	主軸方向	規模(m)	規模(m)	深さ(m)	備考
ⅨST1	C10-4-21他	弥生後期後半	方形	N-23° -E	6.2	(3.9)	0.41	石囲い炉
ⅨST2	C10-3-24他	弥生後期後半	多角形	N-4° -W	(7.3)	(3.9)	0.39	
ⅨST3	C10-3-21他	弥生後期後半	隅丸方形	N-64° -E	5.6	5.5	0.55	焼失住居
ⅨST4	C10-2-18他	弥生末	方形	N-30° -E	3.6	3.4	0.41	
XST1	B10-23-16他	弥生後期後半	多角形	N-1° -W	(6.8)	5.3	0.52	張り出し部
XST2	B10-25-16他	弥生後期後半	方形	N-14° -W	5.1	4.4	0.4	

第53図 Ⅸ・Ⅹ区弥生時代後期の集落

1. 弥生時代後期の集落

(1) 竪穴建物跡

Ⅸ、Ⅹ区で6軒検出した。Ⅸ区の東南部に3軒纏まって検出しており、更に集落は南側に展開すると考えられる。Ⅹ区では2軒の竪穴建物跡を検出しているものの、集落本体から離れて散在している。6軒の竪穴建物跡はおのおの様相を違えており、方形、隅丸方形、多角形(六角形)の3種類で、円形のものはない。

方形のものはⅨST1、ⅨST4、XST2である。平面形は方形でも他の属性からして相違する。ⅨST1は一辺6m強の中型のもので、ベッド状遺構が全周すると考えられ、炉も石囲い炉である。また弥生時代後期末のSD22に切られているところから若干古くなりそうである。ⅨST4は一辺3.6mの小型のものである。ベッドは北側のみである。遺物が多量に出土しており、礫の投棄も認められた。XST2については形態的にはⅨST4に似るものの、調査精度に疑問がある為に除外する。ⅨST4の類型は他の調査区でも、香南平野でも認められるもので、後期末に相当する竪穴建物跡である。出土遺物からすると後期後半のものとはほとんど時期差を抽出することは困難である。しかしながら、建物跡の形態からして、終末期に入れても大過ないものと考えられる。

隅丸方形のものはⅨST3、XST1の2軒である。隅丸方形でも形は違っており、ⅨST3は角の丸味が強く、XST1は角に僅かに丸味を持つ程度である。共にベッド状遺構が壁際に全周し、長楕円形の炉跡が南寄りに構築されている。またXST1は南北にそれぞれ張り出し部を持つ。ⅨST3は焼失建物跡である。時期的にはほぼ同一時期で後期後半である。ⅨST3とXST1を比較した場合には、XST1が若干新しくなる。多角形(六角形)のものはⅨST2のみである。他の調査区でも同様のものを検出している。時期的にはⅨST4の終末期に近い。

祈年遺跡の他の竪穴建物跡と比較しなければならないが、ここでは暫定的に高知平野部での弥生土器様式(出原2000)を当てはめると、

第Ⅵ-1様式 ⅨST1

第Ⅵ-1様式から第Ⅵ-2様式の端境期 ⅨST3、XST1、ⅨST2

第Ⅵ-2様式 ⅨST4、XST2(?)

となる。しかしながら、遺物からしてほとんど変化は見いだせておらず、極めて近接する時期のものである。

(2) 壺棺墓

祈年遺跡では壺棺墓は22基検出している。Ⅶ区で2基、Ⅷ区で18基、Ⅹ区で2基である。Ⅷ区では密集した状態で壺棺墓を検出している。Ⅹ区では2基が散在している。

XSG1は祈年遺跡で最大のもので、径0.86m、深さ0.48mの円形土坑内に逆位の状態で壺棺を検出している。口縁部はやや欠ける。頸部がすぼまり、口径の小さな壺を転用する。逆位の埋置方法は本遺跡では類例はない。

XSG2は径0.66m、深さ0.16mの浅い円形土坑である。壺は広口壺で横位の状態で埋置されている。上部半分程は後世により壊されている。

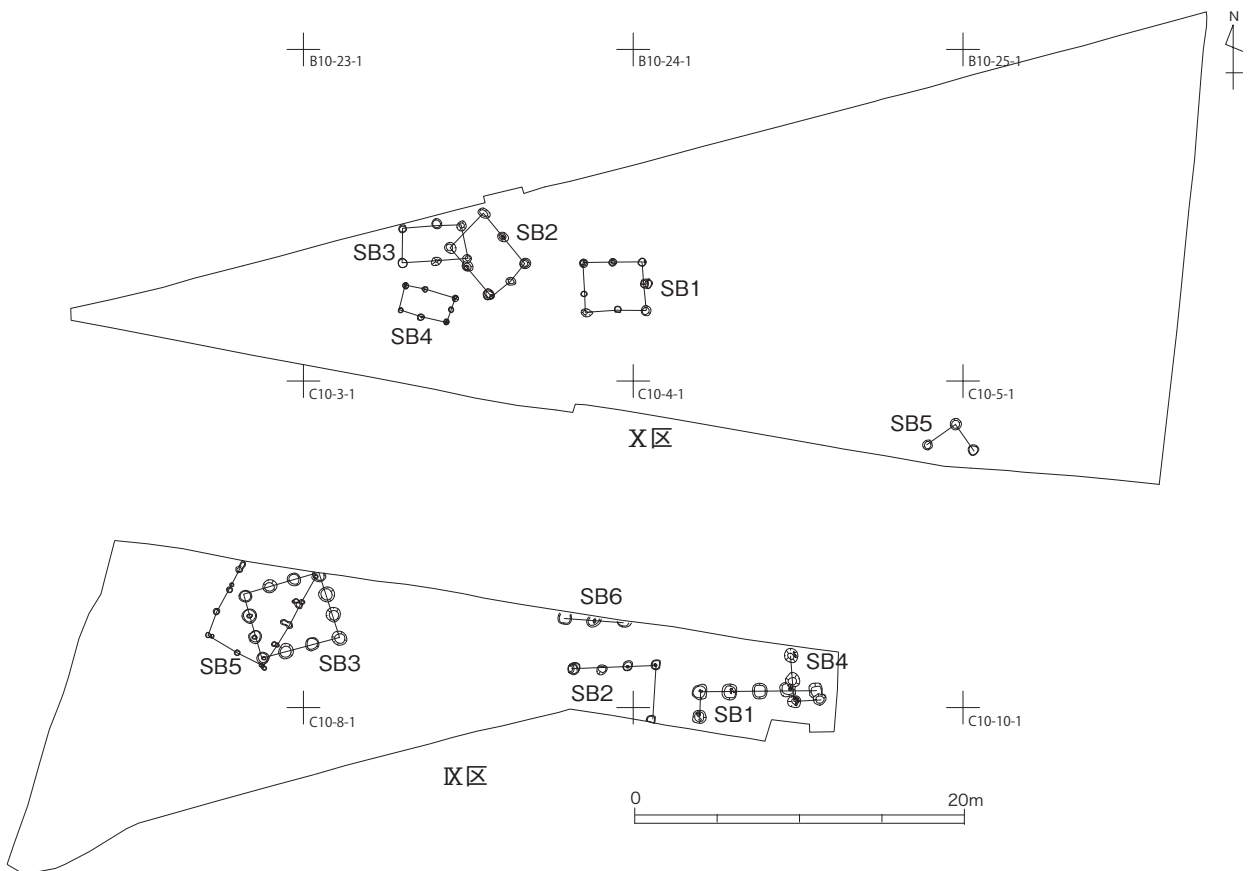
2基の壺棺共にほぼ同時期で第Ⅵ-1様式に相当するものの、どの竪穴建物跡に伴うかは判然としない。距離からして、XSG1はXST1に、XSG2はXST2に伴う可能性がある。

第2節 古代について

1. 掘立柱建物跡

IX、X区で検出した掘立柱建物跡11棟である。

IX区では掘立柱建物跡は6棟検出しているものの、SB5については古代に含まれない可能性もあり除外した。IX区東側部でSB1、SB2、SB4、SB6の4棟を検出しているものの、全てが調査区外へと広がる為に全容は不明である。切り合い関係はSB4がSB1に切られている。SB1、SB2、SB6は東西棟で軸方向もN-85°-EからN-90°-Eの範囲に収まっている。規模的にはSB1が大きく、柱穴掘り



SB番号	グリッド	時期	桁行	梁行	桁×梁(m)	面積(m ²)	柱穴形状	柱穴平均径(m)	柱穴平均深さ(m)	柱痕平均径(m)	柱痕平均深さ(m)	軸方向
IX SB1	C10-4-22他	古代	(4)	(1)	7.07×(1.52)		方形	0.88	0.53	0.15	(0.52)	N-90°-E
IX SB2	C10-3-25他	古代	3	(1)	5.05×(3.16)		円形・方形	0.7	0.44	0.18	(0.52)	N-87°-E
IX SB3	C10-2-20他	古代	3	3	4.87×4.03	19.63	円形	0.8	0.57	0.17	(0.57)	N-74°-E
IX SB4	C10-4-23他	古代	(2)	(1)	(2.77)×(1.40)		円形	0.79	0.75	0.14	(0.71)	N-4°-W
IX SB5	C10-2-20他	古代	4	2	6.39×4.0	25.56	円形	0.35	0.56			N-28°-E
IX SB6	C10-3-20他	古代	(2)		(3.66)×-		円形	0.8	0.5			N-85°-W
XSB1	B10-23-20他	古代?	2	2	3.73×3.07	11.45	円形	0.48	0.3	0.15	0.3	N-90°-E
XSB2	B10-23-18他	不明	2	2	4.0×2.87	11.48	円形	0.6	0.33	0.16	0.38	N-39°-W
XSB3	B10-23-17他	古代?	2	2	3.94×2.05	8.08	円形	0.54	0.4			N-87°-E
XSB4	B10-23-17他	不明	2	2	3.12×1.66	5.18	円形	0.34	0.28	0.12	0.32	N-75°-W
XSB5	C10-4-5他	古代?	(1)	(1)	(2.10)×(1.85)	-	円形	0.64	0.55			N-55°-E

第54図 IX・X区古代掘立柱建物跡

方も方形で一辺0.88m、桁行は調査区内4間である。他の掘立柱建物跡は柱穴掘り方は円形が多く、径0.7～0.8mを測る。SB2は桁行3間である。SB2からは高台付の須恵器坏が出土しており、8C後半と考えられる。掘立柱建物跡からは唯一この須恵器のみであり、他の掘立柱建物跡からは混入品の弥生土器細片だけであった。IX区東側部の掘立柱建物跡群は同時期の可能性があり、SB4のみ切り合い関係からして若干古いと考えられる。

IX区西側部で確認したSB3については3×3間ではあるものの、桁行4.9m×梁行4mで桁行の方が長く東西棟である。軸方向はN-74°-Eで東側部の掘立柱建物跡群とは相違している。遺物は出土しておらず時期決定は困難なものの、柱穴掘り方は円形で0.8mを測るところから、東側部一群と時期的な隔たりは余りないものと考えられる。

X区では5棟の掘立柱建物跡を検出した。IX区の掘立柱建物跡と比較して柱穴は一回り小さい。遺物は混入の弥生土器細片のみで遺物からは時期決定はできない。他の遺構との切り合い関係を見ても、XSB1はXSD1に切られる。XSU5にXSB2～5は切られる。XSD1も遺物は時期の明確に分かるものは出土しておらず、僅かに須恵器が出土しているのみで時期は判然としない。またSU(畝状遺構)についても時期を明確にすることはできない。但し、SD、SU共に大枠では古代に含まれることから、X区掘立柱建物跡は古代かそれ以前と考えられる。しかしながら、弥生時代の可能性も残されている。

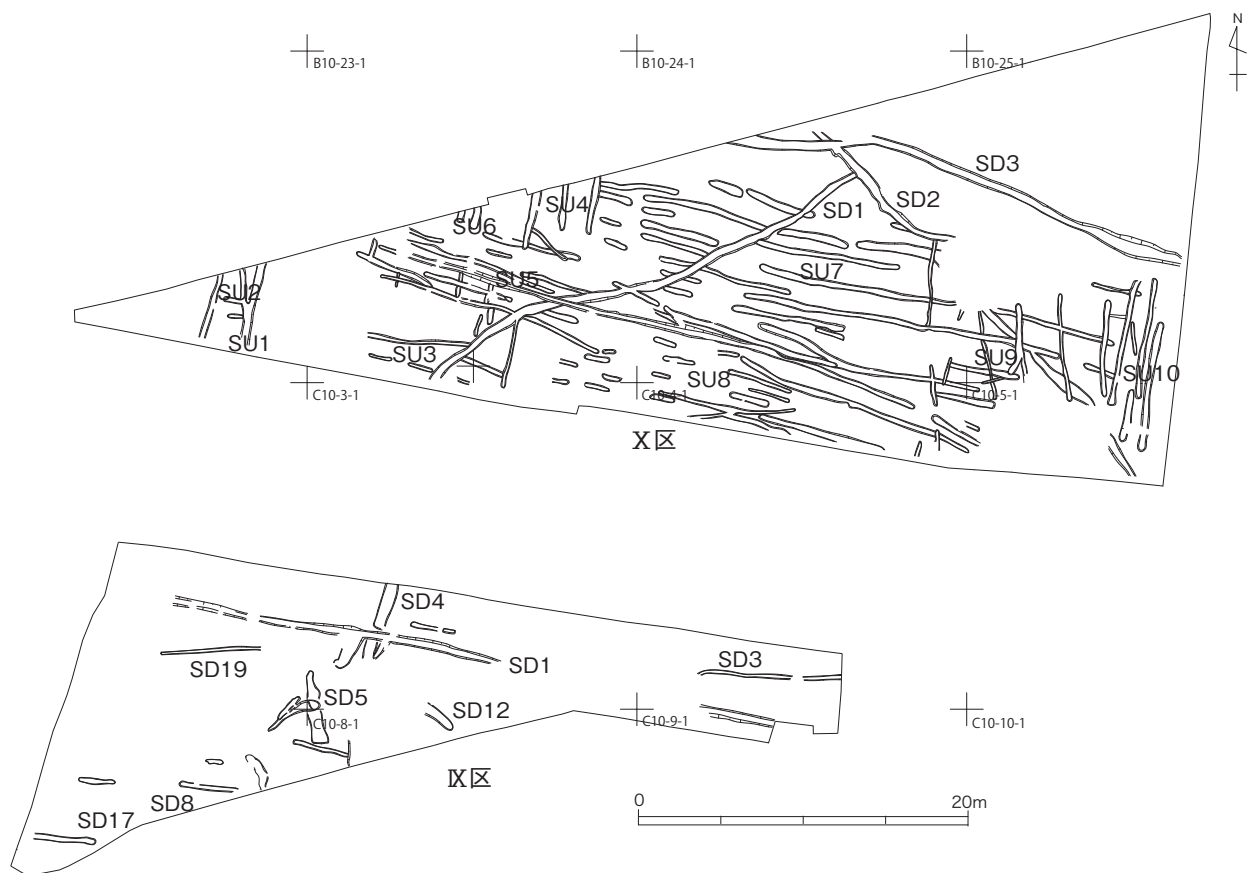
軸方向で見ると、XSB1、XSB3はIX区東側部の掘立柱建物跡群とほぼ同一のN-85°-EからN-90°-Eの範疇で捉えることが可能であるところから、唯一の手がかりとなっている。XSB5については軸方向N-55°-Eと大きくズレるものの、柱穴掘り方規模、配置からして古代の可能性が強い。他のXSB2、4については古代か弥生か時期不明である。

2. 溝状遺構・畝状遺構

IX、X区で溝状遺構は6条検出した。他にも短い溝状遺構も確認しているものの、時期不明、または弥生時代に含まれるものが存在しており、古代に含まれるものはIX区で3条、X区でも3条である。IX区の南西のSD8、17は単一の溝状遺構ではなく、畝状遺構の一部と考えられることから、溝状遺構から除外している。IX区のIXSD1は弥生時代の遺構及び古代の遺構も切って東西に横走している。現道路ともほぼ平行しており、地境か道路状遺構の一部の可能性もある。IXSD4についてはXSD1と連繋する溝状遺構である。X区ではXSD1はXSD2にほぼ直行し、交わる地点でXSD1は終点となっているところから同機能の溝状遺構と考えられる。X区では畝状遺構群に切られる。

XSD3はX区北端をやや北向きに横走する。部分的には幅1m以上を測る地点もあり、この溝から北側には古代の遺構は検出できておらず、畝状遺構はこの溝を境に南側に展開している。XSD2を畝状遺構群と同様に切っているところから、畝状遺構群と同時期に機能していたと考えられ、畑地の境界線の可能性が強い。

畝状遺構としたものは、数条の小溝が平行したもので、幅50cm前後、深さ10cm未満と浅い。東西畝と南北畝が認められる。遺物が明確に伴う例はなく、近世の攪乱遺構に切られる以外は全ての古代を切ることしか時期的手がかりはない。



SD 番号	主軸方向	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	遺物	切り合い
IX SD1	N-78° -W	(40.8)	0.44 ~ 0.66	0.09 ~ 0.28	須恵坏蓋	SB1・3・5、SK11・14等切る、SD2切られる
IX SD3	N-86° -W	(10.72)	0.18 ~ 0.32	0.05 ~ 0.13	弥生細片	ST1切る
IX SD4	N-9° -E	(10.76)	0.55 ~ 0.88	0.11 ~ 0.25	弥生細片	ST3、SD9・13切る、SD1切られる
IX SD5	N-8° -W	(5.86)	0.48 ~ 0.8	0.06 ~ 0.12	弥生細片	SD6・13切られる
IX SD8	N-83° -W	(3.38)	0.3	0.06	弥生細片	SK6切られる
IX SD12	N-53° -W	2.76	0.6	0.11	弥生細片	ST3、SK3を切る
IX SD17	N-84° -W	(4.4)	0.32	0.05	弥生細片	SD16切る
IX SD19	N-87° -E	6.35	0.14 ~ 0.25	0.04 ~ 0.07	弥生細片	
XSD1	N-53° -E	(29.75)	0.38 ~ 0.65	0.09 ~ 0.11	須恵坏蓋	SD2切る、SB1P4切られる
XSD2	N-30° -W	(29.35)	0.36 ~ 0.73	0.06 ~ 0.22	なし	ST2切る、SD1・3、SX5・6切られる
XSD3	N-68° -W	(25.5)	0.44 ~ 1.18	0.14 ~ 0.19	須恵碗、壺	SD2、SX4切る

SU 番号	主軸方向	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	畝本数	畝間距離(m)	遺物	切り合い
XSU1	N-14° -E	(5)	0.32 ~ 0.55	0.07	3	2.4	弥生鉢	SU2切られる
XSU2	N-81° -W	(2.8)	0.28	0.04	3	0.95	なし	SD1、SU1切る
XSU3	N-77° -W	6.3	0.3	0.05	3	0.75 ~ 1.22	なし	SD1切る
XSU4	N-10° -E	4.3	0.3 ~ 0.55	0.05	8	1.74	なし	SU5切られる
XSU5	N-75° -W	30	0.2 ~ 0.5	0.08	8	0.75 ~ 0.95	須恵坏蓋	SD1、SU4切る
XSU6	N-11° -E	(1.5)	0.4	0.1	2	0.95	なし	
XSU7	N-80° -W	22	0.3 ~ 0.65	0.06	8	0.8 ~ 1.75	なし	SD1切る、SU9・10切られる
XSU8	N-76° -W	18	0.17 ~ 0.45	0.06	6	0.65 ~ 2.83	なし	SD1切る
XSU9	N-6° -W N-4° -E	8.7	0.17 ~ 0.4	0.07	5	0.75 ~ 2.55	須恵坏蓋	SU7切る
XSU10	N-12° -E	7.75	0.19 ~ 0.5	0.1	5	0.7 ~ 1.3	なし	SK19、SU7切る

第 55 図 IX・X区古代溝状遺構・畝状遺構

参考文献

- 出原恵三、2000、土佐地域『弥生土器の様式と編年』 四国編、木耳社
- 『深淵遺跡発掘調査報告書』1989、野市町教育委員会
- 『栄エ田遺跡』1995、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 『小籠遺跡Ⅱ』1996、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 『陣山遺跡・陣山北三区遺跡』1997、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 『小籠遺跡Ⅲ』1997、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 『山田三ツ又遺跡』1997、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 『小籠北遺跡』1999、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 『里改田遺跡』2000、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 『西分増井遺跡Ⅱ』2004、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 『林田遺跡Ⅲ』2005、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 『田村遺跡群Ⅱ』2004-2006、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 『伏原遺跡Ⅰ』2010、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 『ひびのきサウジ遺跡Ⅲ』2010、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

写真図版



IX・X区空撮1・東より

写真2



Ⅸ・Ⅹ区空撮2



Ⅸ区空撮



IX区完掘1・西より



IX区完掘2・東より

写真4



Ⅸ区 ST1・完掘1



Ⅸ区 ST1・完掘2



Ⅸ区 ST1・土層



Ⅸ区 ST1・炉跡



Ⅸ区 ST1・石包丁



Ⅸ区 ST2・完掘 1



Ⅸ区 ST2・完掘 2



Ⅸ区 ST2・土層



Ⅸ区 ST2・炉跡



Ⅸ区 ST2・遺物

写真6



Ⅸ区 ST3・完掘1



Ⅸ区 ST3・完掘2



Ⅸ区 ST3・土層



Ⅸ区 ST3・焼土・遺物



Ⅸ区 ST3・炉跡土層



Ⅸ区 ST4・完掘1



Ⅸ区 ST4・完掘2



Ⅸ区 ST4・土層



Ⅸ区 ST4・遺物



Ⅸ区 ST4・炉跡土層

写真8



Ⅸ区SB 全景・東より



Ⅸ区 SB1



SB1P1



SB1P3

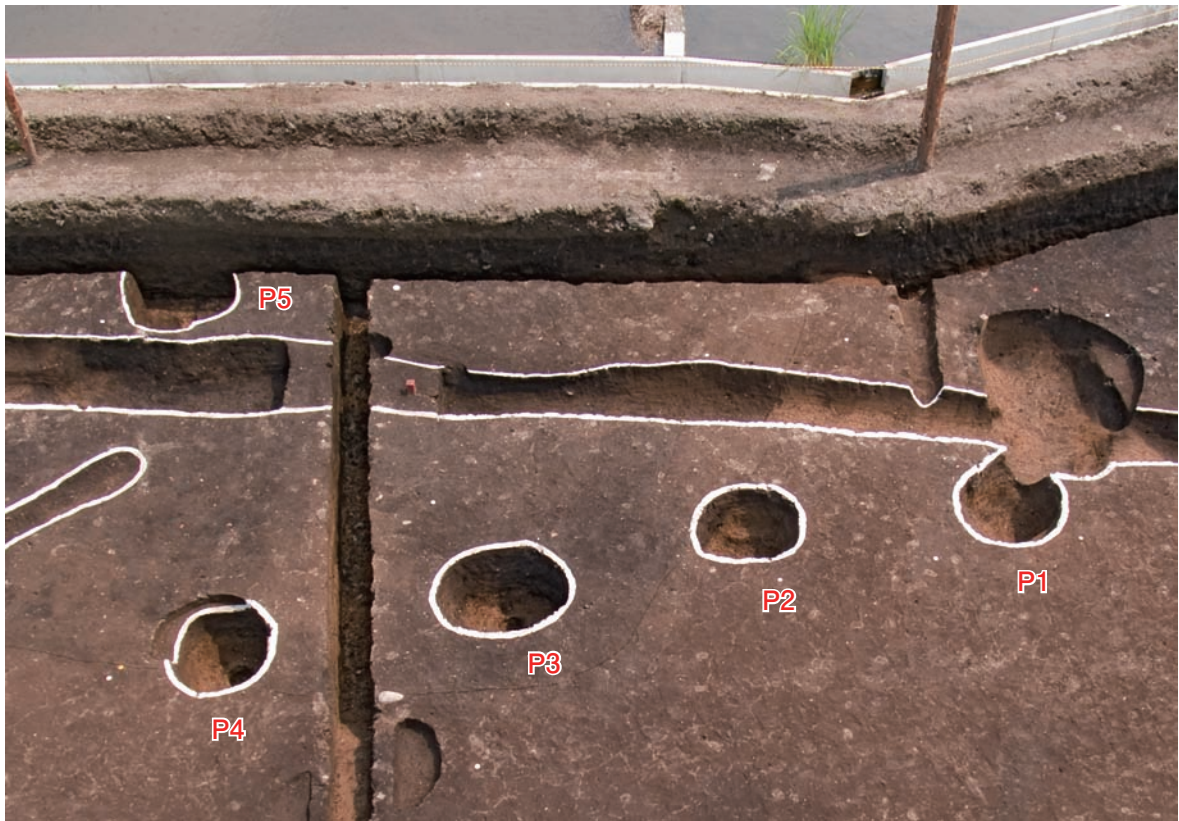


SB1P4



SB1P5

写真10



Ⅸ区 SB2・北より



SB2P1



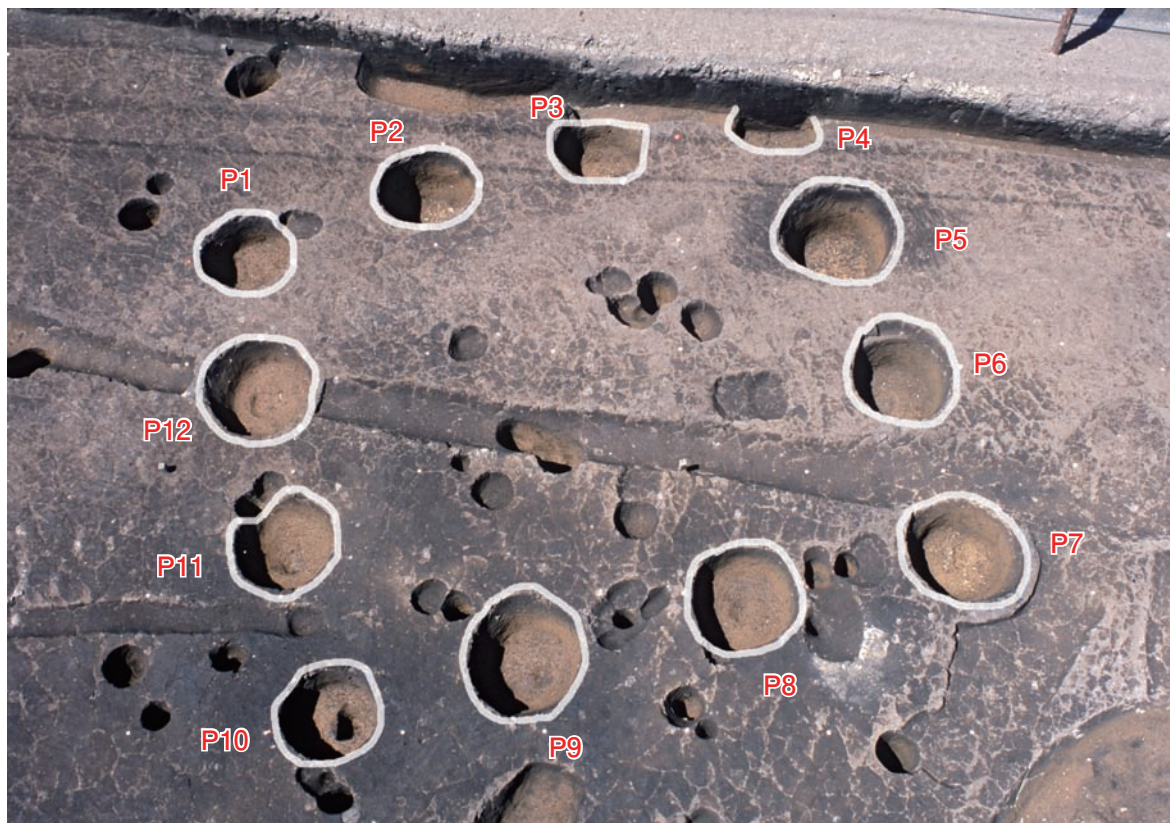
SB2P2



SB2P3



SB2P4



Ⅸ区 SB3・南東より



SB3P3



SB3P5



SB3P6



SB3P9

写真12



Ⅸ区 SB4・南より



SB4P1



SB4P2



SB4P3



SB4P4



IX区 SB5・北西より



IX区 SB6・南より

写真14



Ⅸ区 SK1



Ⅸ区 SK1・土層



Ⅸ区 SK2



Ⅸ区 SK2・土層



Ⅸ区 SK5



Ⅸ区 SK5・遺物



Ⅸ区 SK5・土層



Ⅸ区 SK7・土層



Ⅸ区 SK8



Ⅸ区 SK11



Ⅸ区 SK11・土層



Ⅸ区 SK15



Ⅸ区 SD1



Ⅸ区 SD17



Ⅸ区 SD22

写真16



X区空撮・南より



X区全景・東より



X区 ST1・南より



X区 ST1・検出・東より



X区 ST1・西より



X区 ST1・土層・南東より



X区 ST1・土坑内出土遺物

写真18



X区 ST2・南より



X区 ST2・北より



X区 ST2・土層・東より



X区 ST2・炉跡・南より



X区 ST2・炉跡・東より



X区SB 全景・南より



X区SB1・北より

写真20



X区 SB2・SB3・SB4・東より



X区 SB5・北東より



X区 SG1・南西より



X区 SG1・検出・南西より



X区 SG1・半截・南より



X区 SG1・土層・南より



X区 SG1・完掘・南より

写真22



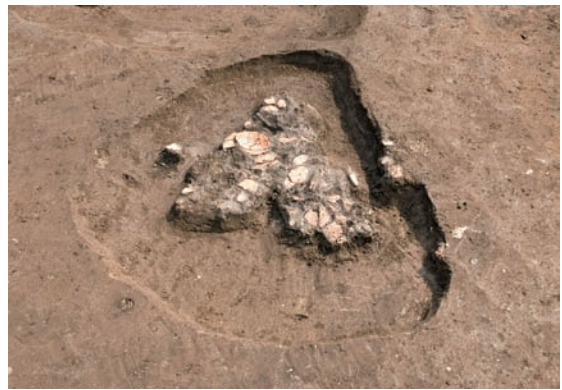
X区 SG2・南より



X区 SG2・南東より



X区 SK3



X区 SK4



X区 SK8



X区 SK16



X区 SK27



X区 SX1



X区 SX6・北より



X区 SX6・土層・北より



X区 SX6・土層・東より



X区 SX6・土層・東より

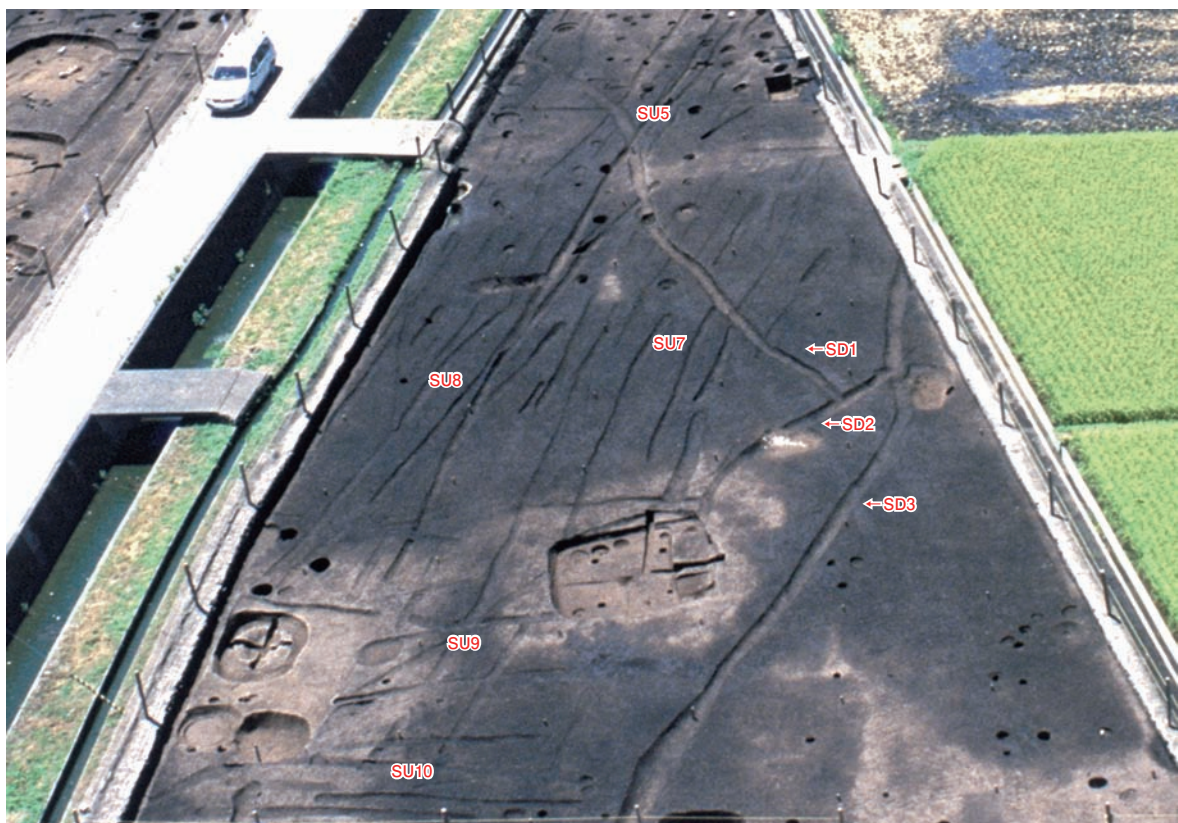


X区 SX6・西より

写真24



X区 SD・SU 空撮・南より



X区 SD・SU 全景1・東より



X区SD・SU 全景2・東より



X区SD・SU 全景3・南西より

写真26



IX区 ST1-1



IX区 ST1-2



IX区 ST1-3



IX区 ST1-4



IX区 ST1-5



IX区 ST1-6



IX区 ST1-7



IX区 ST1-8



IX区 ST1-9



IX区 ST1-12



IX区 ST1-14



IX区 ST1-15



IX区 ST1-16



IX区 ST1-17



IX区 ST1-18



IX区 ST1-19



IX区 ST1-20



IX区 ST1-20

※遺物写真の縮尺は不同一である



Ⅸ区 ST2-1



Ⅸ区 ST2-2



Ⅸ区 ST2-3



Ⅸ区 ST2-5



Ⅸ区 ST2-6



Ⅸ区 ST2-7



Ⅸ区 ST2-8



Ⅸ区 ST2-9



Ⅸ区 ST2-10



Ⅸ区 ST2-11



Ⅸ区 ST2-12



Ⅸ区 ST2-13



Ⅸ区 ST2-14



Ⅸ区 ST2-15



Ⅸ区 ST3-1

写真28



IX 区 ST3-2



IX 区 ST3-3



IX 区 ST3-4



IX 区 ST3-5



IX 区 ST3-6



IX 区 ST3-7



IX 区 ST3-8



IX 区 ST3-9



IX 区 ST3-10



IX 区 ST3-11



IX 区 ST3-12



IX 区 ST3-13



IX 区 ST3-14



IX 区 ST3-15 · 底部



IX 区 ST3-16



IX 区 ST3-17 · 底部



IX 区 ST3-18 · 底部



IX 区 ST3-19 · 底部



IX 区 ST3-20



IX 区 ST3-22



IX 区 ST4-1



IX 区 ST4-2



IX 区 ST4-3



IX 区 ST4-4



IX 区 ST4-5



IX 区 ST4-6



IX 区 ST4-7



IX 区 ST4-9



IX 区 ST4-10 · 底部

写真30



IX 区 ST4-11 · 底部



IX 区 ST4-12



IX 区 ST4-13



IX 区 ST4-14



IX 区 ST4-15



IX 区 ST4-16



IX 区 ST4-17



IX 区 ST4-18



IX 区 ST4-19



IX 区 ST4-20



IX 区 ST4-21 · 底部



IX 区 ST4-22



IX 区 ST4-23



IX 区 ST4-24



IX 区 ST4-25



IX 区 ST4-26



IX 区 ST4-28



Ⅸ区 ST4-31



Ⅸ区 ST4-32



Ⅸ区 ST4-33



Ⅸ区 ST4-37



Ⅸ区 SB2-1



Ⅸ区 SB2-3



Ⅸ区 SK1-1



Ⅸ区 SK5-1



Ⅸ区 SK5-2



Ⅸ区 SK5-3



Ⅸ区 SK5-4



Ⅸ区 SK5-5



Ⅸ区 SK5-7

写真32



IX 区 SK7-1



IX 区 SK7-2



IX 区 SD22-1



IX 区 C10-9-1P2-1



IX 区 包含層 -7



IX 区 包含層 -8



X 区 ST1-3



X 区 ST1-4



X 区 ST1-5



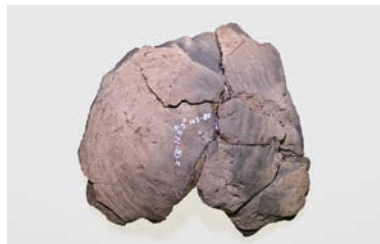
X 区 ST1-6



X 区 ST1-7 · 底部



X 区 ST1-8 · 底部



X 区 ST1-9 · 底部



X 区 ST1-10 · 底部



X 区 ST1-11



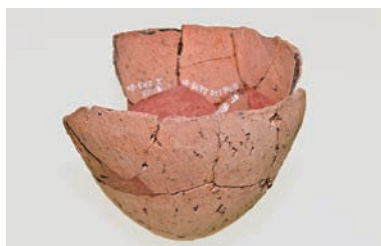
X 区 ST1-12



X 区 ST1-13



X区 ST1-14



X区 ST1-15



X区 ST1-16



X区 ST1-17



X区 ST1-18



X区 ST1-19



X区 ST1-20



X区 ST1-21



X区 ST1-22 · 底部



X区 ST1-24



X区 ST1-25



X区 ST1-26 · 底部



X区 ST1-27



X区 ST1-28



X区 ST1-29



X区 ST2-1



X区 ST2-2



X区 ST2-3

写真34



X区 ST2-4



X区 ST2-6



X区 ST2-7 · 底部



X区 ST2-8 · 底部



X区 ST2-10



X区 ST2-11



X区 ST2-12



X区 ST2-13



X区 ST2-14



X区 ST2-15



X区 ST2-16



X区 ST2-18 · 底部



X区 SG1-1



X 区 ST2-19



X 区 SK4-1



X 区 SK6-1



X 区 SG2-1



X 区 SK8-1



X 区 SK8-2



X 区 SK16-1



X 区 SK16-2



X 区 SK19-1



X 区 SK19-2



X 区 SK19-3



X 区 SK19-4



X 区 SK22-1



X 区 SK22-2



X 区 SK27-1



X 区 SK27-2



X 区 SX1-1

写真36



X区 SX4-1



X区 SX4-2・底部



X区 SX6-1



X区 SX6-5



X区 SX6-6



X区 SX6-7



X区 SD1-2



X区 SD3-1



X区 SD3-2



X区 包含層 -1・内面



X区 包含層 -5



X区 包含層 -6



X区 包含層 -7



X区 包含層 -8



X区 包含層 -9



X区 包含層 -10

報告書抄録

ふりがな	きねんいせき							
書名	祈年遺跡Ⅱ							
副書名	国道195号道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第2分冊 Ⅸ区・Ⅹ区							
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第124集							
編著者名	近藤孝文、前田光雄							
編集機関	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	〒783-0006 高知県南国市篠原1437-1 TEL 088-864-0671 FAX 088-864-1423							
発行年月日	2012年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
きねんいせき 祈年遺跡	こうちけんなんこくしりがき 高知県南国市東崎他	39204	0166	33° 35' 10"	133° 38' 28"	20070401 ～ 20091225	21,707	国道195号線改築に伴う緊急調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
祈年遺跡	集落	弥生時代後期 古墳時代後期 古代	竪穴建物跡 掘立柱建物跡 竪穴状遺構 道路状遺構	弥生土器、土師器、須恵器、壺棺	弥生時代後期の集落及び壺棺22基を検出。古墳時代後期の竈付き竪穴住居跡県下最多。古代道路状遺構検出。			
要約	<p>弥生時代竪穴建物跡約40軒、古墳時代建物住居跡約30軒、古代掘立柱建物跡約50棟である。長岡台地での調査事例としては最大規模の内容となった。</p> <p>弥生時代は後期中葉、後期後半、終末から古墳時代初頭にかけての3区分である。後期後半の住居跡の規模は円形で径8～10mを超える。住居跡以外に壺棺を22基検出した。集落の中央部に纏まる。壺の口を割り別の土器で蓋をしたもの、壺にさらに一回り大きな土器をすっぽり覆い被せ、入り子にしたものなどがあつた。壺は穴を掘り、壺を安定させるために穴の底に数個の石を置いたものなどもあつた。高知県下では最も多い。</p> <p>古墳時代後期終末の住居跡は27軒検出している。方形で一辺5、6mの中型の住居跡で占められ、北側部に造り付けの竈を有する。高知県下では最も多い。</p> <p>古代では掘立柱建物跡が50棟余りである。柱穴の形状が円形、方形のものがそれぞれ認められる。径50～70cm程の掘り方を持つものが多い。古代の中で最も重要な遺構は、道路状遺構である。2条の溝の幅員約6m程あり、溝自体は幅約70～90cm、深さ30cmの規模で南北方向に縦走する。上部は後世に削平を受けているために、轍跡等は検出できなかった。古代香長条里に則し、国分寺の東側に直線上に通じることから、土佐国の国衙に通じる主要道路の可能性が極めて高い。今まで高知県では古代官道関連の調査例はなく、初めての検出例である。</p>							

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第124集

祈年遺跡Ⅱ

国道195号道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第2分冊 IX区・X区

編集 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
発行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
高知県南国市篠原1437-1
電話 088-864-0671
発行日 2012年3月22日
印刷 共和印刷株式会社

